

長野県安曇野市

穂高古墳群

2018・2019年度 F 9号墳発掘調査報告書



2021.2

國學院大學考古学研究室

長野県安曇野市

穂高古墳群

2018・2019年度 F 9号墳発掘調査報告書

2021.2

國學院大學考古学研究室

(表紙写真) : F 9号墳石室全景(第10次調査終了時)

(裏表紙写真) : F 9号墳から常念岳を望む

緒 言

わたくしが着任して2冊目となる徳高古墳群F9号墳の発掘調査報告書を、ここに公刊する運びとなった。2016・17年度の報告に引き続き、2年分の調査成果を1冊の報告書にする、いわゆる合冊の体裁をとることとしたが、発掘調査報告書が無事に刊行できることを、まずは素直に喜びたい。

上に無事と記したが、刊行に至るまで平坦な道のりとは程遠かった。当初計画では、1年前に刊行する予定で学生諸君が準備を進めてきたが、今般の新型コロナウイルス感染拡大により、大学での作業が半年間にわたって中断し、刊行が大幅に遅れた。さらに2020年度は、40年におよぶ本学考古学実習史上初の中止をやむなく決断した。発掘調査と報告書作成に向き合う千載一遇の機会を奪われてしまった学生の気持ちは、察するに余りある。それでも過年度実習生は、両年の総務を中心に、2度の中断期間を挟んだ困難な状況下、リモートワークを駆使し、最後まで取り組んでくれた。実習生諸君の労を多としたい。

さて2018年度は石室調査の最終年と位置づけ、石室床面の精査や壁体の観察などをおこない、10年近い石室調査に区切りをつけた。炎天下の中、全員で石室を埋め戻し、完了した時のなんともいえない充足感、そしてもう石室をみることのない一抹のさみさが入り混じった感興の中、打ち上げで喉を潤したビールの味は忘れられない。

続く2019年度の調査は、墳丘構築法の解明と周溝の有無など、主たる調査目的が墳丘へとシフトした。出土遺物はぐっと減ったが、周溝の可能性がある落ち込みの検出や、従来の想定よりも墳丘規模が大きくなる可能性が示唆された点など、得られた成果は枚挙に暇がない。

今後は墳丘の規模と構造、外表施設の有無といった点に調査目的の主眼を置くことになるが、いよいよ次なる発掘調査対象も射程に入ってきた。F9号墳の北に所在するE6号墳は、その有力な候補となるため、本書において既往の所見などをまとめておくこととした。今後、E6号墳をはじめとした周辺の古墳の測量調査なども本格化させ、われわれの調査だけでなく、徳高古墳群全体の資料化も図り、地元へ成果を還元する活動も充実させたい。

最後に、いつも温かい目で見守ってくださり、援助を惜しまない地元の長野県教育委員会ならびに安曇野市教育委員会、発掘調査の実施にご協力いただいている国土交通省関東地方整備局長野国道事務所、国営アルプスあづみの公園、毎年の発掘調査を楽しみに待っておられる地元の皆様方をはじめ関係各位に深く謝するとともに、今後とも倍旧のご支援・ご協力を賜りたく心よりお願い申し上げます。

令和3年1月24日

國學院大學考古学研究室

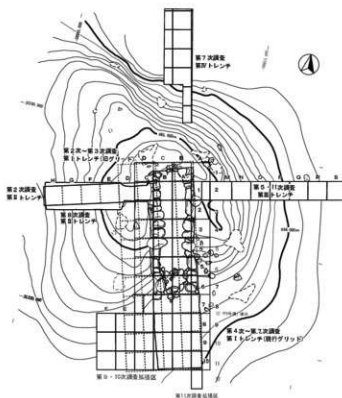
青 木 敬

例 言

1. 本書は、長野県安曇野市穂高柏原3653番地(塚原地区)に所在する穂高古墳群F 9号墳の第10次・第11次発掘調査報告書である。
2. 第10次調査は、平成30年度(2018)の國學院大學学部開講科目「考古学調査法」、および同大学院開講科目「考古学実習B」の一環として、同年8月7日から8月16日までの10日間にわたって実施した。
3. 第11次調査は、令和元年度(2019)の國學院大學学部開講科目「考古学調査法」、および同大学院開講科目「考古学実習B」の一環として、同年8月6日から8月15日までの10日間にわたって実施した。
4. 第10次調査は、國學院大學の赤井益久(学長、文学部教授)、第11次調査は針本正行(学長、文学部教授)が主体者となり、青木敬(文学部准教授)が担当した。
5. 第10次調査の実施に際しては谷口康浩(文学部教授)、深澤太郎(研究開発推進機構准教授)の助言を得て、青木が運営を統括した。また、朝倉一貫(文学部助手)と大学院ティーチングアシスタントの長嶋幹也(大学院文学研究科博士課程後期)・黒澤ひかり(大学院文学研究科博士課程前期)が指導にあたり、考古学実習生14名・特別参加生20名が調査を実施した。
6. 第11次調査の実施に際しては谷口、深澤の助言を得て、青木が運営を統括した。また、大日方一郎(文学部助手)と、大学院ティーチングアシスタントの石澤菜衣子・武藤駿平(大学院文学研究科博士課程前期)が指導にあたり、考古学実習生22名・特別参加生11名が調査を実施した。
7. 本書の執筆・図面の製図・表および図版の作製は、考古学実習生(過年度を含む)を中心とする調査参加者が分担した。執筆・製図・作製分担は、目次・挿図目次・表目次と文末に示した。
8. 遺構・遺物写真の撮影は、考古学実習生の写真係が担当した(第1章4参照)。
9. 第10次調査出土鉄製品のX線撮影は、帝京大学文化財研究所の協力を得て、深澤、大塚惟子・小池茜・馬場由佳・平井智規(文学部)が実施した。
10. 本書の編集は、考古学実習生が主体となって進め、朝倉、大日方、長嶋、黒澤、石澤、武藤の補佐を得て、青木が統括した。
11. F 9号墳から出土した資料は、調査研究の都合上、総括報告書を刊行するまで國學院大學考古学研究室が保管する。
12. 現地調査、および調査記録の整理作業に際しては、多くの関係機関・関係各位から御支援を受けた。第1章4に御芳名を記し、感謝の意を表する次第である。なお、本書内の機関名・所属先等は、調査当時のものを用いた(敬称略)。

凡 例

1. 穂高古墳群を構成する各古墳の名称については、既往の調査研究に準拠して「所属支群を示すアルファベット+通し番号」とした。ただし、松川村所在古墳については、この限りでない。また、別称をもつ古墳に関しては、過去の文献との整合を容易にするため、括弧付けで別称を表記する場合もある。
2. F9号墳は、F10号墳とともに2基の総称として「二つ塚」の別称を持っている。そのため、どちらかを単独で表記する場合に、別称を表記するのは適当ではない。また、文章中で古墳名を多用することを考慮して、両古墳に限り別称の表記を省略する。
3. 本書では、平成21年度(2009)の墳丘測量調査・現状確認調査を第1次調査とし、調査年度ではなく、F9号墳における調査回数で表記する。
4. 現行のグリッドは、第3次調査で判明した石室の軸に合わせて、第4次調査から新たに採用したものである。第2次～第3次調査における旧グリッドとの対応関係は下図を参照されたい。
5. 本書では、F9号墳に設定した第Iトレンチの8～11グリッドを、仮に前庭部と表記した。
6. 本書で用いる標高は、すべて東京湾標準海抜高に基づく。
7. 本書における遺構図の座標値は、平成14年国土交通省告示第9号による平面直角座標系第8系(原点:北緯36度00分00秒・東経138度30分00秒)に基づく。
8. 本書における土層、および出土遺物の色調に関する記述は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」(2005年度版)に準拠した。
9. 本書の第三・IV章における遺物の図面では、須恵器の断面を黒色、金属器の断面を斜線で表した。
10. 遺物番号は、各遺物固有の個体番号を用いた。図面等に示す場合は、図面番号に続き、〔 〕内に個体番号を示した。なお、既報告の資料のうち、複数の個体が接合した場合は、初出の番号に「ほか」と付して表記する。
11. 本書の第4～6図は、国土地理院発行1/25,000地形図を用いた。
12. 既刊の第1次～第9次発掘調査報告書については、調査年度を付して、『報告2009』のように略記した。



目 次

緒 言	
例 言	
凡 例	
目 次	

第 I 章 序 言

1 調査の経緯	
(1) 研究計画の策定	(松下志保子) 1
(2) 発掘調査の経過	(大日方一郎) 2
2 穂高古墳群の調査研究史	(尾上周平・深田特弘・藤原正大・依田健太) 3
3 調査研究の目的	(関口拓海・萩原亮太) 5
4 調査組織	
(1) 第10次調査	(田中優帆) 6
(2) 第11次調査	(能沢悠都) 7
5 調査の経過	
(1) 既往の調査	(種神春香) 8
(2) 第10次調査日誌	(日下部旭祐・栗山雄河・豊田倫史) 10
(3) 第11次調査日誌	(小野梨奈・方波見睦美) 12

第 II 章 周辺の環境

1 安曇野の自然環境	
(1) 安曇野の地形と生物相	(平塚裕美・森田耕平) 17
(2) 中房川・烏川と扇状地	(平塚・森田) 20
2 安曇野の歴史環境	
(1) 旧石器時代	(原武卓也・前田奈都美・武藤駿平) 21
(2) 縄文時代	(原武・前田奈都美・武藤) 21
(3) 弥生時代	(原武・前田奈都美・前田萌登) 22
(4) 古墳時代	(前田萌登・森田) 22
(5) 古代	(原武・深田) 23
(6) 中世・近世	(原武・深田) 25
3 穂高古墳群および瀬古墳群の概要	
(1) 穂高古墳群の概要	(和泉智子・原武) 32
(2) 瀬古墳群の概要	(大嶋拓真) 42

第 III 章 第10次調査成果

1 F 9号墳の現況	
(1) 古墳の立地	(関根美季) 49
(2) 調査区の設定	(関口・田中) 49
(3) 基本層序	(紀静婷・高橋桃子) 51

2 遺構		
(1) 概要	……………(荒瀬麻希・平井智規)	51
(2) 第Iトレンチ	……………(関口)	53
(3) 第Iトレンチ拡張区	……………(関口)	57
3 遺物		
(1) 概要	……………(齋藤優太)	58
(2) 第Iトレンチ		
i) 須恵器	……………(大塚惟子)	58
ii) ガラス小玉	……………(日下部)	58
(3) 第Iトレンチ拡張区		
i) 土師器	……………(上地里奈)	59
ii) 須恵器	……………(大塚)	59
iii) 鉄製品	……………(豊田)	61

第IV章 第11次調査成果

1 調査区の設定	……………(河原薫)	67
2 遺構		
(1) 第Iトレンチ	……………(池田貴史・石澤茉衣子・望月悠太)	69
(2) 第IIIトレンチ	……………(古口翔太・馬場由佳)	69
3 遺物		
(1) 第Iトレンチ南側拡張区		
i) 土師器	……………(張ハヌル)	72
ii) 土製品	……………(張)	72
(2) 第IIIトレンチ	……………(菱本竹那)	72
4 E6号墳の調査		
(1) 調査計画の策定	……………(岡一颯・押本雅生)	73
(2) 既往の調査・研究	……………(神澤郁美・松本空也・水谷凌)	73
(3) 表面採集遺物	……………(大嶋)	75

第V章 考察

1 墳丘規模と構築過程に関する知見の整理	……………(青木・押本・望月)	77
2 須恵器甕の出土状態に関する基礎的整理	……………(青木・馬場)	82

第VI章 結語

1 調査のまとめ		
(1) 第10次調査	……………(関口)	87
(2) 第11次調査	……………(大嶋・小池西・望月)	87
2 おわりにあたって	……………(大嶋・関口)	88

挿図目次

第1図	徳高古墳群の位置	(藤原製図)	1
第2図	長野県の山岳・河川	(森田製図)	17
第3図	調査地周辺地質図	(北澤宏明製図)	19
第4図	安曇野市周辺の遺跡	(原武製図)	26
第5図	安曇野市周辺の遺跡(古墳時代)	(原武製図)	27
第6図	徳高古墳群と周辺の古墳時代遺跡	(黒澤ひかり・藤原製図)	33
第7図	徳高古墳群の墳丘	(和泉製図)	34
第8図	徳高古墳群の石室	(和泉製図)	35
第9図	徳高古墳群出土の主要遺物(1)	(尾上・原武製図)	37
第10図	徳高古墳群出土の主要遺物(2)	(尾上・原武製図)	38
第11図	徳高古墳群出土の主要遺物(3)	(尾上・原武製図)	39
第12図	徳高古墳群出土の主要遺物(4)	(尾上・原武製図)	40
第13図	瀬古墳群出土の主要遺物	(大嶋製図)	41
第14図	第10次調査トレンチ配置図	(関口製図)	50
第15図	基本層序	(黒澤・中島志徳製図)	52
第16図	石室実測図	(尾上・小林文昭・関根美季・中島・深澤太郎製図)	54
第17図	第10次調査遺物出土状況	(平井製図)	55
第18図	第Iトレンチ前庭部東壁土層断面図	(小池・関口・平井製図)	56
第19図	第Iトレンチ拡張区土層断面図	(関口製図)	56
第20図	第10次調査出土遺物実測図(1)	(関口製図)	62
第21図	第10次調査出土遺物実測図(2)	(関口製図)	63
第22図	第11次調査トレンチ配置図	(関口製図)	68
第23図	第Iトレンチ南側拡張区土層断面図	(小池製図)	70
第24図	第Iトレンチ南壁土層断面図	(小池製図)	70
第25図	第IIIトレンチ土層断面図	(関口・平井・渡辺夏海製図)	71
第26図	第11次調査出土遺物実測図	(小池製図)	72
第27図	第11次調査E6号墳表面採集須恵器実測図	(小池製図)	74
第28図	F9号墳断面図	(関口・樋口典昭製図)	80
第29図	F9号墳における須恵器甕の出土状況	(関口製図)	84

表 目 次

第1表	安曇野市周辺の遺跡	(原武作製)	28
第2表	穂高古墳群一覧	(尾上改訂)	47
第3表	第10次調査 須恵器観察表	(齋藤作製)	64
第4表	第10次調査 ガラス小玉観察表	(齋藤作製)	65
第5表	第10次調査 鍍金具観察表	(齋藤作製)	65
第6表	第11次調査 土師器・土製品観察表	(渡辺作製)	72
第7表	第11次調査 須恵器観察表	(馬場作製)	72
第8表	E 6号墳が記載された文献における名称と墳丘の規模	(神澤・松本・水谷作製)	74
第9表	第11次調査 E 6号墳表面採集須恵器観察表	(小池作製)	74
第10表	F 9号墳出土須恵器壺一覧	(小田山来未・小池作製)	85

図版目次

第10次調査図版

- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 図版1 調査前全景 | 図版8 第Iトレンチ 須恵器出土状況 (1) |
| 図版2 第Iトレンチ全景 (1) | 図版9 第Iトレンチ 須恵器出土状況 (2) |
| 図版3 第Iトレンチ全景 (2)・拡張区壁面 (1) | 図版10 第Iトレンチ 須恵器出土状況 (3) |
| 図版4 拡張区壁面 (2) | 図版11 遺物 須恵器 (1) |
| 図版5 拡張区壁面 (3) | 図版12 遺物 須恵器 (2) |
| 図版6 拡張区壁面 (4) | 図版13 遺物 須恵器 (3)・馬具・ガラス小玉 |
| 図版7 第Iトレンチ 馬具出土状況 | |

第11次調査図版

- | | |
|------------------|-------------------------|
| 図版1 調査前・調査後全景 | 図版7 第IIIトレンチ (5) |
| 図版2 第Iトレンチ | 図版8 第IIIトレンチ (6) |
| 図版3 第IIIトレンチ (1) | 図版9 E6号墳 |
| 図版4 第IIIトレンチ (2) | 図版10 遺物 土師器片・土製品・瓦・須恵器片 |
| 図版5 第IIIトレンチ (3) | |
| 図版6 第IIIトレンチ (4) | |

集合写真

1. 第10次調査
2. 第11次調査

第I章 序 言

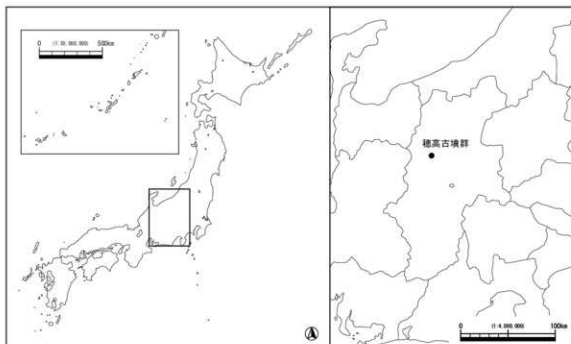
1 調査の経緯

(1) 研究計画の策定

國學院大學考古学研究室は、長野県安曇野市に位置する穂高古墳群において実習調査を実施した。これは、同大学の吉田恵二(元文学部教授)を調査担当者として研究計画を策定し、平成21年度(2009)から継続している調査である。

穂高古墳群は、6世紀後半から8世紀前半にかけて利用されていた約90基に及ぶ群集墳で、古墳の分布や埋葬施設の様相、年代観などの基礎的な研究に関しては、すでに一定の成果が得られている。しかし、後世の改変を受けた古墳も多く、墳丘・石室・遺物の総合的な学術調査は少なかった。古墳時代から古代への展開過程をあきらかにするためには、個別の地域における具体的な様相を把握することは欠かせない。

そこで、穂高古墳群における墳丘と埋葬施設の遺存状況が良好な事例の中で、国土交通省所管の国営アルプスあづみの公園(堀金・穂高地区)に保存されており、既に天井石を失っていたF9号墳を対象として発掘調査を開始した。なお、隣在するF10号墳は天井石まで遺存しているため、発掘調査の手を加えず、現状のまま保存して後世に伝えることとした。(松下)



第1図 穂高古墳群の位置

(2) 発掘調査の経過

第10次調査に係る手続き 調査の計画と実施に当たっては、当該分野を所轄する長野県教育委員会・安曇野市教育委員会の指導を仰ぎ、地権者の国土交通省と、管理者である国営アルプスあづみの公園の協力を得た。平成30年度(2018)の第10次調査に関しても、同年5月22日に、これらの4者と國學院大學考古学研究室による事前協議を公園事務所にて実施し、調査計画・安全対策・保存活用・広報などに関する同意を得た。その上で、文化財保護法第92条に基づく調査のための発掘届(平成30年(2018)6月29日付)を、安曇野市教育委員会経由にて長野県教育委員会へ提出した。

現地における発掘調査は、8月7日から8月16日まで35.5㎡の範囲を対象に実施し、コンテナ2個分の出土遺物を得ている。これを受けて、安曇野警察署長宛てに埋蔵物発見届(平成30年(2018)8月21日付)を、長野県教育委員会教育長宛てに埋蔵文化財保管証(平成30年(2018)8月21日付)・発掘調査終了届(平成30年(2018)8月21日付)を提出した。

第11次調査に係る手続き 令和元年度(2019)の第11次調査は、同年5月20日に、事前協議を安曇野市埋蔵文化財資料センターにて実施した上で、文化財保護法第92条に基づく調査のための発掘届(令和元年(2019)7月1日付)を、安曇野市教育委員会経由にて長野県教育委員会へ提出した。

現地における発掘調査は、8月6日から8月15日まで34㎡の範囲を対象に実施し、コンテナ1個分の出土遺物を得ている。これを受けて、安曇野警察署長宛てに埋蔵物発見届(令和元年(2019)8月17日付)を、長野県教育委員会教育長宛てに埋蔵文化財保管証(令和元年(2019)8月17日付)・発掘調査終了届(令和元年(2019)8月17日付)を提出した。

整理作業 出土遺物や調査記録の整理は、各調査終了後の9月から開始したが、新型コロナウイルス感染拡大にともなう大学の一時閉鎖があり、令和3年(2021)1月まで継続しておこなった。(大日方)

2 穂高古墳群の調査研究史

古墳群の発見 學術誌において穂高古墳群の存在が世に示されたのは、明治23年(1890)に廣野秀雄によって「有明村ノ古墳」として紹介された報告が初出である¹⁾。次いで、明治34年(1901)には、増田謙吾によって、旧有明村に所在する古墳の分布概略図が示され²⁾、大正年間には、D1号墳(魏石鬼窟)をはじめとするいくつかの古墳が、鳥居龍藏らによって踏査された³⁾。大正10年(1921)には、長野県史蹟名勝天然記念物調査会の発足にもなって、南安曇郡から長野県へ旧有明村の47基・旧西穂高村の21基の古墳が報告され⁴⁾、調査の結果、要保存と判断された物件として、A1号墳(陵塚)・B1号墳(ちいが塚)・D1号墳・G1号墳(上原古墳)が報告書に記載された⁵⁾。

これら個々に報告されてきた旧有明村周辺の古墳を古墳群として包括する見地は、昭和31年(1956)発行の『信濃史料』において示された。ただし、旧有明村の古墳が「有明古墳群」としてA～Dの4群に分類されているが、旧西穂高村など安曇野市穂高牧以南に所在する古墳については古墳群として扱っていなかった⁶⁾。

古墳の悉皆調査と「穂高古墳群」 戦後の宅地造成などにより古墳の消滅が問題になると、穂高町教育委員会によって、昭和39年度(1964)から昭和43年度(1968)にかけて、町内に所在する古墳の精密な分布調査が実施された。現存確認できた65基の古墳に標柱が設置され、古墳の概要と現状の写真を付した報告書が刊行された⁷⁾。この調査では、それまで「有明古墳群」に含まれていなかった古墳も、E～Hの支群に分類された。同時期には、長野県教育委員会による分布調査も実施され⁸⁾、これらの調査を通して、穂高古墳群の現状と実態が把握された結果、旧穂高町域(有明地区・西穂高地区・穂高地区)の古墳が、A～Hの8群に分類された⁹⁾。

なお、「穂高古墳群」の名称は、A～G群と北安曇郡松川村鼠穴地籍に所在する3基の古墳を包括した『長野県史』を初出とし¹⁰⁾、『穂高町誌』¹¹⁾以降、広く用いられることとなる。ただし、A～C・E群を「有明・牧古墳群」、F群を「塚原古墳群」に分ける立場も示した『南安曇郡誌』¹²⁾や、A～C群を「有明古墳群」、E・F群を「牧古墳群・塚原古墳群」の「二大古墳群」として想定する論考¹³⁾もある。また、平成元年(1989)に穂高町教育委員会から刊行された『穂高町の古墳群とその人々』では、A～D群を「有明古墳群」、E群を「牧古墳群」、F群を「塚原古墳群」の分類に従って表記している¹⁴⁾。これに対して、三木弘は、祖父が塚古墳とA～F群、およびD1号墳・G1号墳などの「単独墳」を単一の「有明古墳群」として捉えるなど¹⁵⁾、調査主体や研究者をまたいで、群認識・名称の統一はなされていない。

本学では、これら松川村南部から安曇野市西部の常念山脈麓にかけて分布する群集墳を包括した名称として、『長野県史』以来普及し、安曇野市指定史跡名称である「穂高古墳群」を用いることとした。さらに、その内訳として、『信濃史料』以降の文献上から確認できた86基以上の古墳(安曇野市内83基・松川村内3基)を含むと定義している¹⁶⁾。

発掘調査と既出資料の再検討 穂高古墳群の多くの古墳が、明治から昭和初期にかけて「発掘」されたものの、詳細な記録も残らず、出土遺物もほとんどが散逸している。学術的な記録をともなった発掘調

査は、大正7年(1918)のB5号墳(金堀塚)や¹⁷⁾、昭和5年(1930)のG1号墳¹⁸⁾を嚆矢とする。戦後の県史・郡誌・町誌編纂の一環として、数基の古墳を対象に実施された。昭和26年(1951)のE7号墳(狐塚2号墳)ほか数基¹⁹⁾、昭和50年(1975)のF1号墳(一本杉古墳)²⁰⁾、昭和62年(1987)のD1号墳の発掘調査などである²¹⁾。さらに、平成11年(1999)には、戦前の第1次調査に続いて、G1号墳の第2次発掘調査がおこなわれ²²⁾、続いて実施された第3・4次調査の発掘調査報告書も刊行されている²³⁾。なお、平成21年度(2009)からは、本学考古学研究室によるF9号墳の発掘調査が継続中であり、令和元年度(2019)で第11次調査を迎えている²⁴⁾。

また、古墳の分布調査を通して、古墳群全体の現状や個々の古墳の損壊状況が把握されてくるなかで、県史・町史の編纂にともない、既出資料の再検討も実施された。後述するように、昭和57年(1982)には、岩崎卓也らによって、旧徳高町内2基・松川村内1基の墳丘・石室の測量調査と、宮内庁書陵部・有明山神社・徳高神社所蔵資料の実測調査がおこなわれた²⁵⁾。平成3年(1991)には、三木により、徳高町郷土資料館など断片的にしか伝えられていなかったE6号墳(狐塚3号墳)の出土資料が調査された²⁶⁾。

徳高古墳群の位置づけに関する研究 資料の蓄積を踏まえて、徳高古墳群の位置づけに関連した以下の研究がおこなわれている。

徳高古墳群の年代について、岩崎らは6基の古墳について墳丘・石室の測量調査、および既出遺物の実測調査を実施した。その結果、「有明古墳群」の造営年代を6世紀後半から7世紀前半と推定し、石室を規模に応じた3類型に分類したうえで、出土遺物の年代をもとに各類型の築造年代を比定した。また、類型ごとに開口方向の差異が認められることを指摘した²⁷⁾。桐原健は、「徳高町誌」において、岩崎らによる石室分類をE・F群にも適用し、A-C群とE・F群との間に僅かな時期差がある可能性を指摘した²⁸⁾。また、三木はE6号墳出土と伝わる資料の検討により、E6号墳において、6世紀末の築造後、少なくとも7世紀前半に2回、8世紀前半に1回の追葬があったことを指摘した。三木は、D1号墳出土資料も、8世紀を除いてほぼ同様の年代に比定し²⁹⁾、その他の古墳出土資料と総合した結果、「有明古墳群」が6世紀後半から7世紀にかけて築造されたものと推定した。すなわち、TK43型式の須恵器を出土しているA6号墳(犬養塚)・B23号墳(祝塚)・D1号墳・E6号墳・G1号墳が6世紀後半に築造され始め、7世紀に入っても築造が継続していたとみている。なお、古墳築造の最終時期は不明であるが、F群は他の支群と比べて相対的に新しい築造時期であるとの認識のもとで、小型石室をもつF1号墳の年代を7世紀中葉とみている。さらに、石室・墳丘規模ともに卓越する古墳が、各支群において最高標高地に先行して築造され、後続する古墳に対して占地的な規制を与えた可能性を指摘した³⁰⁾。このように、徳高古墳群の稼働年代については、6世紀後半から8世紀の間とされ、F9号墳出土遺物の年代もほぼ当該期間に収まる³¹⁾。

石室については、岩崎らが、石室長・幅・高によって3類型に分類し、石室類型ごとに開口方向の差異が認められることを指摘した。さらに、古墳の分布からA-C群を小支群に分類したうえで、石室類型との対応関係が認められる可能性を提示した³²⁾。三木は、岩崎らの石室分類を受けて、石室長に主眼を置いた5類型に分類し、石室構造には、腰石を用いずに河原石を平積みするものと、大振りの石材を用いて腰石とするものが存在すると指摘した。また、後者には、礫を平積みにして腰石としたもの(B1号墳・C2号墳・F1号墳・G1号墳)と、礫を縦長に並べて腰石としたもの(E2号墳・E7号墳)

とに分かれることを指摘している³⁰。

なお、古墳群の造管主体は、未だあきらかとなっていないが、桐原は、A～C群とE・F群とに僅かな時期差が認められる点などを指摘し、それぞれ異なる集落によって形成されたことを想定しつつ、現状で徳高古墳群周辺における古墳時代の集落遺跡がF・G群下流の等々力・白金・矢原地区一帯のみしか認められないことから、今のところこれを否定せざるを得ないとした³⁰。これに対して、三木は烏川扇状地内において、洪水層が遺物包含層の上に厚く堆積していることなどから、古墳時代集落の大部分が発見されていない可能性を示した³⁰。また、古墳群を古代の牧と関連づける研究もある。桐原は、『延喜式』に記載された「猪鹿牧」が安曇野市穂高牧地籍に比定されることや他地域での古墳と古牧との係わりから、E群を猪鹿牧に先行する私牧の墓域であると想定するが⁶⁰、三木は、E群からの馬具の出土が乏しい点などを根拠に否定的な見解を示している³¹。

(尾上・深田・藤原・依田)

3 調査研究の目的

徳高古墳群は、長野県の松本市西部を流れる烏川と中房川の扇状地上に点在する群集墳である。本古墳群は、安曇野市に所在するA～H群と松川村所在古墳の支群からなり、長野市の大室古墳群や松本市の中山古墳群と並ぶ中部高地の主要な後期古墳群である。徳高古墳群では、過去に何度か調査がおこなわれているが、墳丘・石室・出土遺物などを包括した総合的な調査例がなく、古墳群全体を把握する詳細な調査も平成3年(1991)の『穂高町誌』編纂以降おこなわれていない。これらの課題を踏まえ、國學院大學考古学研究室では、平成21年(2009)から徳高古墳群F9号墳における継続的な発掘調査を開始した。その目的は、徳高古墳全体の位置づけを考察するための基礎情報の収集、およびF9号墳の継続的かつ体系的な調査の実施、そして古墳群を構成する個々の古墳の現状確認である。

第10次調査 石室内の精査・埋め戻しと周溝の存否確認、墳丘と石室の取り付け方の検証を目的とする。そのため、第9次調査の拡張区の南西部と北部をさらに拡げ、第Iトレンチ東側と拡張区の層の対応の確認をおこなう。墳丘盛土と整地土の境界があきらかになりつつあり、より正確な石室前庭部の状況の確認を目指す。

第11次調査 石室側壁の背面構造を把握すること、墳裾部の所在位置を再検討すること、加えて周辺古墳のデータを収集することの3点を目的とする。

(関口・萩原)

4 調査組織

(1) 第10次調査

調査主体者

赤井益久(國學院大學学長)

調査担当者

青木敬(文学部准教授)

調査指導者

谷口康浩(文学部教授)・深澤太郎(研究開発推進機構准教授)・朝倉一貴(文学部助手)

大学院ティーチングアシスタント

長嶋幹也(大学院文学研究科博士課程前期2年)・黒澤ひかり(大学院文学研究科博士課程前期1年)

平成30年度(2018)考古学実習生

総務：関口拓海

副総務：齋藤寛朗・清水流佳

幹事：田中優帆・豊田倫史

遺物係：齋藤優太・笹幸恵・清水流佳・関口拓海

写真係：大塚惟子・上地里奈・齋藤寛朗

図面係：井田圭祐・菊池慶太・田中優帆・和田七海

機材係：日下部旭祐・栗山雄河・豊田倫史

発掘特別参加者

大日方一郎・尾上周平(以上大学院文学研究科博士課程後期)・伊沢加奈子・高田大幹・茅原明日香(以上大学院文学研究科博士課程前期)・石澤茉衣子・春日皓介・齋木鉦介・関根美季・新田朝子・羽瀬広大・菱本竹那・樋口典昭・堀功樹・松下志保子・武藤駿平・望月悠太・森下竜成・吉田めぐみ(以上文学部)・種神春香(國學院大學北海道短期大学部国文学科)

調査協力機関・協力者

安曇野市教育委員会・安曇野市徳高郷土資料館・安曇野市豊科郷土博物館・あづみの公園歴史愛好会・アルプスあづみの公園管理マネジメント共同体・AID保養所エソール安曇野・奥原造園・國學院大學広報課・国土交通省関東地方整備局国営アルプスあづみの公園事務所・市民タイムス・渋谷氷川神社・中日新聞社・帝京大学文化財研究所・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター
阿部常樹・有福小百合・石川蒼・石橋宏・横田真・内堀田・春日宇光・加藤大二郎・風間栄一・北澤宏明・小林正春・齋藤直樹・佐々木憲一・渋谷恵美子・田中大輔・土屋和章・鳥越多工摩・松本康太郎・箕浦絢・中村耕作・成田裕・原明芳・原智之・原武卓也・藤好史都・山下泰水・吉田みちこ(五十音順・敬称略) (田中)

(2) 第11次調査

調査主体者

針本正行(國學院大學学長)

調査担当者

青木敬(文学部准教授)

調査指導者

谷口康浩(文学部教授)・深澤太郎(研究開発推進機構准教授)・大日方一郎(文学部助手)

大学院ティーチングアシスタント

石澤菜衣子(大学院文学研究科博士課程前期1年)・武藤駿平(大学院文学研究科博士課程前期1年)

令和元年度(2019)考古学実習生

総務：大嶋拓真

副総務：小池茜・望月悠太

幹事：池田貴史・渡辺夏海

遺物係：小池茜・張ハスル・馬場由佳・松下志保子・渡辺夏海

写真係：大嶋拓真・押本雅生・小野梨奈・方波見睦美・古口翔太・種神春香

図面係：荒堀麻希・池田貴史・小田山来未・菱本竹那・平井智規・望月悠太

機材係：岡一颯・河原薫・鈴木誠人・能沢悠都・萩原亮太

発掘特別参加者

黒澤ひかり(大学院文学研究科博士課程前期)・春日皓介・樋口典昭・森下竜成・大塚惟子・齋藤優太・関口拓海・田中優帆・神澤郁美・松本空也・水谷凌(文学部)

調査協力機関・協力者

安曇野市教育委員会・安曇野市豊科郷土博物館・安曇野市文化財保護審議会・安曇野市穂高郷土資料館・アルプスあづみの公園管理マネジメント共同体・茨城県教育財団・AID保養所エソール安曇野・大熊町教育委員会・大町市教育委員会・大室古墳館・神奈川県教育委員会・川崎市教育委員会・北アルプス牧場直売店・國學院大學栃木短期大学・国土交通省関東地方整備局国営アルプスあづみの公園事務所・渋谷氷川神社・市民タイムス・千曲市教育委員会・中日新聞社・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター・長野県立博物館・松本市教育委員会・松本市立考古博物館・森将軍塚古墳館
安孫子昭二・阿部常樹・有福小百合・石川蒼・石橋宏・石丸敦史・大澤慶哲・内堀団・内川隆志・大谷舞菜・尾上周平・尾上誠・風間栄一・菊川隆・北澤宏明・日下部旭祐・島田哲男・高垣美菜子・田中大輔・土屋和章・鳥越多工摩・中村耕作・成田裕・原武卓也・原智之・藤好史都・二本泰央・古谷毅・松澤好哲・百瀬新治・矢島宏雄・山下泰永・吉田みち子(五十音順・敬称略) (能沢)

5 調査の経過

(1) 既往の調査

第1次調査 F9号墳・F10号墳の墳丘測量をおこなった。調査の結果、F9号墳は現状で直径約17m、残存高13m、F10号墳は長軸約129m・残存高1.8mの墳丘規模で、いずれも横穴式石室をもつ円墳と判明した。あわせてE群・F群の現状確認もおこなった³⁰⁾。

第2次調査 比較的遺存状態が良好と判断されるF10号墳を現状保存し、F9号墳の発掘調査を開始した。この調査では、石室・羨道部の規模の確認を目的とした南北に伸びる長さ約10mの第Iトレンチと、墳丘の扇形や西側における墳裾部の状況の把握を目的とした東西約8mの第IIトレンチを設定した。調査の結果、第Iトレンチでは石室東壁と推定される石列を確認した。石室内部は割石や石室石材といった長軸長10～50cm大を中心とする大型礫で埋められていた。石室開口部付近の攪乱層を中心に土師器・須恵器(7世紀中ごろ)、石室付近から和釘・硬貨・陶器片(近代)などが出土した。第IIトレンチでは、国営公園の設置まで機能していた塚原配水池によって墳裾部が削平されたことを確認した。また、測量調査で得られた墳丘規模が構築当初とは異なる可能性を指摘した³¹⁾。

第3次調査 石室全体像を確認するため、第Iトレンチを北に0.5m、西に1m拡張して掘削をおこなった。調査の結果、石室残存長約7m、石室幅約13～15mの無袖構造の横穴式石室であることが判明した。この時点で石室残存高は最大約1.1m、石室の主軸は第2次調査でN-145°-Wと推定したが、東西両側壁を検出したことにより、N-12°-Wをとる南向きに開口した石室と判明した。また石室内の大型礫を除去した。土師器・須恵器(8世紀前半)、切子玉、陶製受皿・釘類・硬貨(中世以降)などが出土した⁴⁰⁾。

第4次調査 石室の内部構造をあきらかにするため、引き続き第Iトレンチの掘削を進めた。第3次調査では、第2次調査で設定したグリッドを使用していたため、グリッドの軸が石室に対して傾いていた。そこで、第3次調査であきらかになった主軸の延長上に基準点を設け、改めてグリッドを設定した。調査の結果、石室は石積みが上段にいくほど石室幅が狭くなる持ち送り構造を呈し、石室長は約7mと判明した。また閉塞石と推測される礫が出土したことから、石室の入り口と思われる部分を特定した。古墳時代から古代にかけての遺物として土師器・須恵器(6世紀後半～8世紀初頭)・馬具(6世紀後半～7世紀)・刀子・切子玉、近世以降の遺物として動物骨が出土し、石室内部の遺物は入り口付近を中心に出土した⁴¹⁾。

第5次調査 石室構造の全容を把握するため、引き続き第Iトレンチの掘削を進めた。また、周溝の存否と墳丘規模の確認、墳丘の構築方法の解明を目的とし、墳頂部から東に約8m、幅1mの第IIIトレンチを設定した。調査の結果、石積みは奥壁・側壁ともに6段目までを確認し、羨道部の石列全体を検出した。土師器・須恵器(8世紀前半頃)・鉸具・鉄鎌(6世紀後半頃)・刀子・釘・勾玉・管玉・ウマの歯や骨などの動物遺存体(9世紀末～11世紀前半)が出土した。特に、B6グリッドの閉塞石の内側からは、8世紀前半の須恵器が集中的に出土した。調査の結果、当初の目的である周溝は確認できなかったが、

墳丘の基盤層とみられる砂礫層を検出した。また、第Ⅰトレンチ前庭部や第Ⅲトレンチとの層位の比較から、F9号墳は古墳築造時の地表面を掘り込んで石室を構築した可能性を指摘した⁴⁰⁾。

第6次調査 石室の内部構造をあきらかにするため、引き続き第Ⅰトレンチの掘削を進めた。また、F9号墳の基盤層を確認するため、前庭部東側に幅約30cmのサブトレンチを設定した。さらに、周溝の有無と墳丘規模の確認、墳丘構築方法の解明を目的とし、墳丘北側に第Ⅳトレンチを設定した。調査の結果、いずれの調査区においても砂礫層を検出した。第Ⅰトレンチでは、幅約100cmの礫石と思われる石材がみられ、ほぼ完形の土師器杯(7世紀中頃)、須恵器長頸壺・鉄鏝(6世紀末～7世紀初頭)、直刀(7世紀前半)、賣金具・鞆金具(6世紀末～7世紀初頭)、ウマの歯(9世紀末～11世紀前半)などが出土した。第Ⅳトレンチでは、明確な遺構を確認することはできなかったが、第Ⅱトレンチ・第Ⅲトレンチの土層堆積状況から改めて墳丘の形状を検討してみると、第Ⅳトレンチの設定範囲に墳裾部が収まらない可能性も想定された⁴¹⁾。

第7次調査 初葬時の石室床面の検出を目的とし、第Ⅰトレンチ東側のB区の掘削をおこなった。土師器・須恵器・両頭金具・鉄鏝・赤色顔料やガラス小玉・切子玉が礫とともに出土した。また、墳丘規模や構築方法の確認および遺跡形成の過程の確認を目的とし、第Ⅳトレンチを東に0.5m、南に2m拡張し、掘削をおこなった結果、周溝埋土と推測し得るレンズ状堆積を確認した。他のトレンチにおける土層の状況ともあわせて検討した結果、墳丘の規模を約11mと推測した⁴²⁾。

第8次調査 初葬時の床面を検出するため、引き続き第Ⅰトレンチ石室内埋土の掘削をおこなった。その結果、初葬時の床面とされる礫が混じる黒色土層を検出した。土師器・須恵器(7世紀中頃)、鉄鏝・直刀(6世紀末～7世紀初頭)、ガラス小玉(6世紀後半～7世紀前半)、鍔紐(6世紀後半)、不明鉄片が出土した。また、墳裾部の確認と墳丘構築方法の解明のため、第ⅡトレンチをD2グリッド西端部から東西5m、南北1mに再設定し、部分的に南側へ0.5m、東側へ1m拡張した。さらに北壁から0.8m幅でサブトレンチを設定した。その結果、石室壁体の背後に控え積みとみられる円礫を検出した⁴³⁾。

第9次調査 初葬時と推定される石室床面の全面的な検出と、副葬品など床面付近の遺物の存否確認を目的とした。石室内埋土を掘削し、初葬時の床面とされる小礫が混ざった黒色土層を全面で検出した。須恵器子持壺(6世紀前半)、須恵器杯身(7世紀中頃)、ガラス小玉(6世紀末～7世紀前半)、鉄鏝、不明鉄片、炭化物が出土した。また、周溝の存否確認や石室開口部全面付近の構造をあきらかにすること、石室開口部南側やその周辺における埋葬儀礼の把握を目的に、前庭部西側に東西2.0m、南北3.0mの拡張区を設定し、掘削をおこなった。土師器・須恵器・磁器・鉄製鈔・刀子・寛永通寶鉄銭・丸釘・不明鉄製品・炭化物が出土した⁴⁴⁾。

(種神)

(2) 第10次調査日誌

8月7日(火) 晴れ/曇り

午前調査地へ到着した先発隊は、調査前全景の写真撮影と機材の搬入などをおこなった。実習生と特別参加生は午後から合流した。その後、調査区の復原を開始した。

8月8日(水) 晴れ/曇り

前日に引き続き、調査区の復原作業を午後まで継続した。作業中に佐々木憲一教授(明治大学)ら一行が来踏した。復原作業終了後、班ごとに分かれて墳丘・石室内部・前庭部の清掃を開始した。作業後、第10次調査区の全景写真を撮影した。

8月9日(木) 曇り/晴れ

石室内では午前中に清掃を終え、午後よりB2～B5、C2～C5グリッドの精査をおこなった。ふるいがけにより、B2グリッドから須恵器片、B4グリッドからガラス小玉を回収した。

前庭部では午前よりトレンチ壁面の清掃をおこない、C11グリッドより須恵器片が出土した。また、午前中にトータルステーションで拡張区を設定し、F9～F11グリッドの掘削を開始した。須恵器片のほか、特にF9グリッドからは馬具が出土した。いずれも出土状態の撮影と出土位置を記録した。

8月10日(金) 晴れ

石室内では精査と清掃をおこなった。遺物の取り残しなどが無いことを確認し、石室内の作業を終了した。C3・C4グリッド排土のふるいがけからガラス小玉を回収した。

前庭部では、東壁面の精査および床面の清掃をおこなった。また、拡張区F9～F11グリッドの土層の確認、D8グリッドを断ち割り、西半にサブトレンチを設定した。

8月11日(土) 晴れ

石室周辺を清掃し、全景写真撮影をおこなった。午前中、実習生の一部は、安曇野市周辺の古墳と博物館を見学した。

前庭部・拡張区では精査・清掃をおこなった。D8・E8グリッド北壁、D8グリッド西壁、東壁では、砂礫層(3層)および黒色土(4層)を確認した。ふるいがけでは、F10グリッドから子持壺片を回収した。





8月12日(日) 晴れ

石室埋め戻しの準備を開始した。また、現地説明会をおこなった。前庭部では、北壁、東壁、西壁の土層断面図の作成、写真撮影をおこなった。F9・F11グリッドから出土した須恵器片の出土位置を計測した。



8月13日(月) 曇り/雨

午前中は、前日に作成した土層断面図の微修正および土層注記をおこなった。昼前に、各壁の土層の堆積状況や性格についてのミーティングをおこなった。前庭部東壁(A8～A11グリッド)、拡張区北壁(F9・F10グリッド)、西壁(D8・F9～F11グリッド)の断面図作成は昼頃に完了した。午後は墳丘・石室の3次元計測をおこなった。



8月14日(火) 曇り/雨

午前中は、拡張区のSSM-MVS用の写真撮影をおこなった。その後、前庭部および拡張区を発泡スチロール、土嚢、土で埋め戻した。石室内を砂で充填したのち、墳丘の養生を開始した。



8月15日(水) 曇り/雨

午前中に、墳丘の養生作業が完了し、埋め戻し後の全景を撮影して現地での調査は終了した。埋め戻し作業と並行して、機材の洗浄、整理をおこなった。



8月16日(木) 曇り/雨

現場と宿舎で撤収作業をおこない、機材をトラックに積み込んだ。実習生は、11時に徳高駅で解散した。(日下部・栗山・豊田)



(3) 第11次調査日誌

8月6日(火) 晴れ

前日に現地入りした先発隊は、朝から機材を搬入し、第1トレンチと第Ⅲトレンチの調査前全景を撮影した。実習生と特別参加生は、午後から合流して作業を開始した。第1トレンチでは、拡張区を含む第10次調査の前庭部調査区の復原作業を開始した。第Ⅲトレンチでは、調査区周辺の清掃をおこなった。



8月7日(水) 曇り

第1トレンチでは前日に引き続き土嚢などの撤去作業を続行し、第10次調査終了時の状態に復原した。その後、南壁全景の撮影をおこない、分層を開始した。第Ⅲトレンチでは調査区の復原をおこなった。



8月8日(木) 晴れ

第1トレンチでは、南壁の分層完了後、写真撮影と土層断面図の作成をおこなった。その後、トータルステーションで南側拡張区(A12グリッド)を設定した。第Ⅲトレンチでは、壁面を整え、周囲を清掃後、写真撮影をおこなった。撮影後、西側へ調査区を2m拡張した。掘削を開始して石室の控え積みとみられる礎を確認した。



E6号墳では三次元計測をおこなうため、墳丘とその周辺を清掃した。また、作業中に須恵器片2点を表面採集した。



8月9日(金) 晴れ

第1トレンチでは、南壁土層断面図の修正をおこなった。第Ⅲトレンチでは控え積みの撮影をおこなった。その後、東端から東西4.5m、幅0.4mを約15cm掘り下げた。また、現地説明会に向けて調査区およびその周辺の清掃をおこなった。



E6号墳では、清掃の仕上げをおこなった。また、石室周辺から須恵器片1点を表面採集した。

8月10日(土) 晴れ

第1トレンチでは、南壁のSEM-MVS用の写真を撮影した。その後、A12グリッドの掘り下げをおこなった。第Ⅲトレンチでは、O2～S2グリッドを掘削し、O2グリッドはI層、O2～S2グリッドはII層まで掘り下げた。その後、北壁土層の検討をおこない、第5次調査の土層認識からさらに細分した。B2～M2グリッドは、控え積みの構造が崩れないように階段状に掘り下げ、写真撮影をおこなった。





8月11日(日) 曇り

第Ⅰトレンチでは、南側拡張区東壁の分層をおこなった。写真撮影後、土層断面図を作成した。第Ⅲトレンチでは、A2・M2グリッド北壁の分層をおこなった。また、第Ⅰ・Ⅲトレンチ掘削排土をふるいにかけて、土師器2点と須恵器1点を回収した。

E6号墳では、三次元レーザースキャナーによる測量を実施し、調査を完了した。また、周辺の歴史的環境を学ぶため、長野県内の古墳・博物館の巡見を開始した。



8月12日(月) 晴れ

午前中に現地説明会をおこない、約60人が来訪した。

第ⅠトレンチではA12グリッドの土層断面図を前日に引き続き作成した。第Ⅲトレンチでは午前中、S2グリッド以西の土層断面図を作成し、拡張区の土層断面図の作成を進めた。



8月13日(火) 晴れ/雨

第Ⅰトレンチは、埋め戻し作業を完了した。第Ⅲトレンチは、午前中A2・M2・N2グリッドの層位確定のあと、図面を作成した。また、第Ⅲトレンチ周辺と墳丘の清掃、写真撮影をおこなった。



8月14日(水) 曇り

第Ⅲトレンチでは北壁のSDM-MVS用の写真撮影をおこなった。その後、調査区を埋め戻し、調査後全景を撮影した。また、調査機材の洗浄をおこなった。



8月15日(木) 晴れ

撤収のため、宿舎の清掃および機材の最終点検と発送作業を終え、正午頃穂高駅にて解散した。(小野・方波見)



註

- 1) 廣野秀雄1980「信濃原有明村ノ古墳」『東京人類學會雜誌』第5巻52號、東京人類學會
- 2) 増田謙吾1901「信濃國有明村古墳所在地管見録」『東京人類學會雜誌』第16巻第181号、東京人類學會
- 3) 宮坂光次1922「信州南安曇群有明村ドルメン類似の古墳に就いて」『人類學雜誌』第37巻第9号、東京人類學會
島居龍藏1925「豊科町より」『有史以前の跡を訪尋ねて』雄山閣
- 4) 太田伯一郎1923「第三章第三節遺跡(古墳)」『南安曇郡誌』(旧版)、南安曇郡教育會
- 5) 唐澤貞治部・岩崎長思1923「南安曇郡魏城遺蹟」『長野県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第1輯、長野県・長野県教育委員會
唐澤貞治部1925「ちいが塚」・「陵塚」『長野県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第3輯、長野県・長野県教育委員會
今井眞樹1933「穂高町上原の壑穴式石室郡古墳」『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第14輯 長野県・長野県教育委員會
- 6) 信濃史料刊行會編1956「信濃史料」第1巻上、信濃史料刊行會
- 7) 穂高町教育委員會編1970「穂高町の古墳」柳沢書苑
- 8) 長野県教育委員會編1968「昭和42年度国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書」長野県教育委員會
- 9) 前掲註7)穂高町教育委員會編1970
- 10) 河西清光・松尾昌彦1983「穂高古墳群」『長野県史』考古資料編(3)、長野県史刊行會
- 11) 桐原健1991「第二章第三節 古墳時代」『穂高町誌』第2巻歴史編上・民俗編、穂高町誌刊行會
- 12) 藤沢宗平1968「第四章 古墳文化とそれ以降の文化」『南安曇郡誌』第2巻上、南安曇郡誌改訂編纂會
- 13) 岩崎卓也・松尾昌彦・松村公仁1983「有明古墳群の再調査」『信濃』第35巻第11号、信濃史学会
- 14) 穂高町・穂高町教育委員會編1989「穂高町の古墳とその人々」穂高町・穂高町教育委員會
- 15) 三木弘1991「有明古墳群の再検討(1)」『信濃』第43巻第12号、信濃史学会
三木弘2006「有明古墳群の再検討(2) - 魏城遺蹟古墳の再考を通じて -」『長野県考古学会誌』118号、長野県考古学会
三木弘2011「古墳社会と地域経営」学生社
- 16) 『報告2009』
- 17) 前掲註4)太田1923
- 18) 泉田文紀1931「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」『信濃考古学会誌』第2年第5・6輯、信濃考古学会
- 19) 前掲註12)藤沢1968
- 20) 中島豊晴1976「穂高町塚原F1号墳調査概報」『長野県考古学会誌』第25号、長野県考古学会
- 21) 三木弘1990「魏石鬼頭古墳を利用した修験道」『穂高町郷土資料館』第12号、穂高町郷土資料館
- 22) 穂高町教育委員會編2001「一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡 穂高沢水系による開発史、上原古墳」
- 23) 安曇野市教育委員會編2015「穂高古墳群G1号墳(上原古墳)第3次・第4次発掘調査」安曇野市の埋蔵文化財第8集
- 24) 前掲註16)『報告2009』
『報告2010』
『報告2011』
『報告2012』
『報告2013』
『報告2014』
『報告2015』
『報告2016・17』
- 25) 前掲註13)岩崎・松尾・松村1983
- 26) 前掲註15)三木1991
- 27) 前掲註13)岩崎・松尾・松村1983
- 28) 前掲註11)桐原1991

- 29) 前掲註15)三木2006
- 30) 前掲註15)三木1991・2011
- 31) 前掲註24)『報告2015』
- 32) 前掲註13)岩崎・松尾・松村 1983
- 33) 前掲註15)三木1991・2011
- 34) 前掲註11)桐原1991
- 35) 前掲註15)三木2011
- 36) 前掲註11)桐原1991
桐原健 2016 「徳高古墳群と猪鹿の牧」『信濃』第68巻7号、信濃史学会
- 37) 前掲註15)三木1991・2011
- 38) 前掲註16)『報告2009』
- 39) 前掲註24)『報告2010』
- 40) 前掲註24)『報告2011』
- 41) 前掲註24)『報告2012』
- 42) 前掲註24)『報告2013』
- 43) 前掲註24)『報告2014』
- 44) 前掲註24)『報告2015』
- 45) 前掲註24)『報告2016・2017』
- 46) 前掲註24)『報告2016・2017』

第Ⅱ章 周辺の環境

1 安曇野の自然環境

多様な姿をみせる大地の中で、遺跡が特定の地点を選んで占地している理由をあきらかにしたり、遺構の形成過程を復元したりするためには、当該遺跡を取り巻く自然環境を理解しておくことが欠かせない。そこで本節では、穂高古墳群が営まれた安曇野周辺の地形・地質や、生物相等について概観する¹⁾。なお、地質年代の年代値については、国際地質科学連合の国際層序委員会が公開している国際年代層序表にしたがう。

(1) 安曇野の地形と生物相

安曇野の位置と気候 いわゆる「安曇野」が位置する長野県は、南北約212km・東西約120km・総面積約13,562km²の規模を誇るが、その大半を山地が占めている。また、主要河川の流域には、中信地域の松本平(松本盆地)、南信地域地域の伊那谷(伊那盆地)、東信地域の佐久平(佐久盆地)、北信地域の善光寺平(長野盆地)といった盆地が存在する。ただし、松本盆地に相当する広義の「松本平」の中には、狭義の松本平にあたる梓川以南の「筑摩野」と、梓川以北の「安曇平(安曇野)」が含まれ、前者が旧筑摩郡域、後者の大部分が旧安曇郡域に属した。

この安曇野は、「西山」と呼ばれる飛騨山脈(北アルプス)の山麓線を西縁とし、そこから流れ出した乳川・芦川・中房川・鳥川・梓川などが形成した複合扇状地に相当する。具体的には、大町市の高瀬川右岸から、北安曇郡松川村・池田町、安曇野市、そして梓川左岸の松本市梓川地区(旧南安曇郡梓川村)を概ねの範囲とし、「東山」と呼ばれる筑摩山地が東の境となる。

なお、松本平では、内陸性気候の特徴がみられ、最高気温と最低気温の日較差・年較差が大きい。夏季は、日中に比べて、夜間や朝方の気温が低く、降水量も少ないため、比較的過ごしやすい日が続く。一方、冬季は、飛騨山脈が雪を阻むものの、山地から吹き降ろす寒風のため、氷点下を下回る日も多い。

松本平の形成 松本平、すなわち松本盆地は、大町市から塩尻市に至る南北約50km・東西約10km・面積約480km²の盆地であり、西に連なる標高3,000m級の飛騨山脈と、東の筑摩山地が隆起することによって相対的に陥没した山間盆地でもある。中央には、フォッサマグナ(中央地溝帯)の西縁にあたる糸魚川-



第2図 長野県の山岳・河川

静岡構造線が縦貫し、標高約520mの安曇野市明科周辺を底にした楕円状の地形をなす。

かかる地形の形成には、ユーラシアプレート・北アメリカプレート・フィリピン海プレートの境界に位置するフォッサマグナが深く関係していた。後に日本列島となる陸地は、新生代古第三紀(約6,600万年前～約2,300万年前)までアジア大陸の一部をなしていたが、新第三紀(約2,300万年前～約258万年前)になると、日本海の形成とともに西南日本と東北日本が分裂する。そこに生じた大きな溝がフォッサマグナであり、この溝に流れ込んだ海の底には、次第に砂泥などが堆積していった。

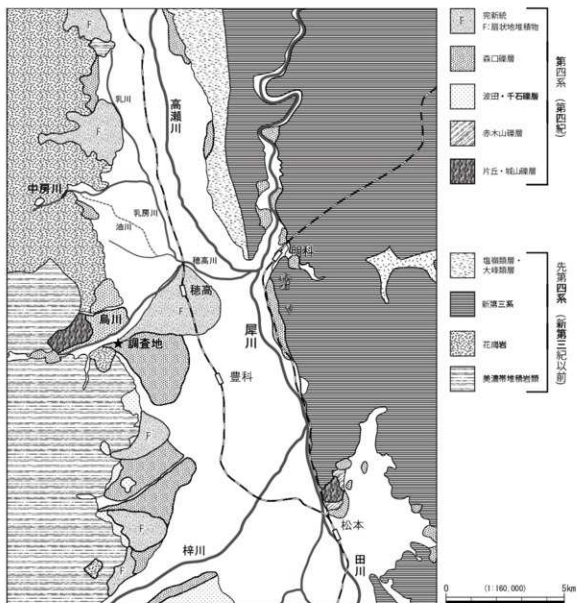
また、第四紀前期更新世(約258万年前～約78万年前)になると広域隆起が進み、フォッサマグナに準平原が出現する。第四紀中期更新世(約78万年前～約13万年前)以降になると、その準平原が糸魚川-静岡構造線に沿って地溝状に陥没したところへ、飛騨山脈や筑摩山地から運ばれてきた砂礫が堆積した。そして完新世(約11,500年前～)に複合扇状地や氾濫原が形成された。

地質の特徴 このように松本平の地形形成が進んだ結果、糸魚川-静岡構造線を境として、西部の険峻な飛騨山脈側と、東部のなだらかな筑摩山地側では、基盤層となる地質の特徴に大きな差異が生じた。西部は、古生代石炭紀から中生代ジュラ紀(約3億5,900万年前～約1億4,500万年前)にかけて海底に堆積・噴出した堆積岩・火山岩からなる美濃帯の堆積岩類と、新生代古第三紀(約6,600万年前～約2,300万年前)に貫入してできた花崗岩類等からなる。一方、東部は、新生代新第三紀(約2,300万年前～約258万年前)にフォッサマグナの海へ堆積した礫岩・砂岩・泥岩類等によって形成されている。

その後、新生代第四紀中期更新世(約78万年前～約13万年前)に陥没した松本平では、中期更新世初期の梨ノ木礫層、中期更新世中期の片丘礫層・城山礫層、後期更新世初期の赤木山礫層、後期更新世中期の波田礫層・千石礫層、後期更新世後期の森口礫層が堆積している。そこに完新世の低位段丘堆積物・扇状地堆積物・氾濫原堆積物や、現河床面堆積物などが広がっていく。これらの地層は、地点によって層相が大きく異なっている。徳高古墳群のF群が位置する鳥川流域では、黒雲母花崗岩などからなる有明花崗岩、花崗岩巨礫が多い淘汰不良の亜角-亜円礫層である片丘礫層、花崗岩・砂岩・泥岩の巨礫・大礫による角-亜角礫層である赤木山礫層、円磨された中礫や大礫が多い波田礫層、美濃帯堆積岩類や花崗岩を主とする中礫の円-亜円礫層である森口礫層、美濃帯砂岩や花崗岩からなる段丘堆積物、そして礫・砂・シルトの氾濫原堆積物が認められる。

山地と動植物 安曇野の西縁は、飛騨山脈の前山にあたる常念山脈に画されている。この常念山脈は、北から唐沢岳(標高2,633m)・燕岳(標高2,763m)・有明山(標高2,268m)・大天井岳(標高2,922m)・常念岳(標高2,857m)・蝶ヶ岳(標高2,677m)・霞沢岳(標高2,646m)などの標高3,000m近い山々からなる。最高峰の大天井岳から、安曇野市明科中川手附近の盆地底に至る標高差が約2,400mに及ぶ。かかる標高差は、直線距離で東西20kmほどの狭い地域に、著しい気候差・植生差をもたらした。

そのうち、森林限界を越えた標高2,500m以上の高山帯は、常緑針葉樹の低木であるハイマツや、落葉低木のミヤマハシノキ、コマクサなどの群落といった高山植物の自然植生がみられるハイマツ帯であり、留鳥のライチョウ、高山蝶のタカネヒカゲなども生息する。標高1,500m～2,500mの亜高山帯は、常緑針葉樹のシラビソ・コマツガや、落葉広葉樹であるダケカンバ等の自然植生によるシラビソ帯であり、メボソムシクイやホシガラスなどの鳥類がみられる。標高1,500m以下の山地帯は、多くが人の手による代償植生となっており、ニホンカモシカ・ツキノワグマ・ニホンザル・ニホンノウサギなどが出没する。



第3図 調査地周辺地質図(43頁註1)松本盆地団体研究グループ1977・塚原編2002を改変)

河川と動物 槍ヶ岳から北回りで南流する高瀬川や、燕岳からの中房川が、常念岳・蝶ヶ岳からの烏川と合流した穂高川などは、槍ヶ岳から南回りで北流する梓川、すなわち奈良井川と合流して名を変えた犀川と明科の押野崎で1つになる。このように、松本平の河川を集めた犀川は、筑摩山地を嵌入蛇行しつつ善光寺平まで北上して千曲川と合流し、新潟県境から信濃川と名を変えて日本海に注ぐ。

これらの河川には、春に産卵期を迎えるカジカ、初夏に集団で産卵するウグイのほか、水の冷たい溪流に生息するイワナなどがみられる。昭和初期までは、信濃川河口から290kmほど上流の安曇野にも、サケ・マス・ウナギ・アユが遡上していたが、水力発電所の建設が進んだ結果、河川の生態系に大きな影響が及んだ。

扇状地と水田開発 また、先述した通り、飛弾山脈を源とする中房川・烏川や、黒沢川などは、山を削

り溪谷を形成した先へ砂礫を運び扇状地を形成した。扇頂部に顔を出した河川は、地下に浸透して伏流水となる。したがって、扇中央部では、大雨や雪解けによる水量の増加が無い限り、いわゆる水無川となる場合が多い。そのため、安曇野では、地元で「環」と呼んでいる用水路を、平安時代から開削してきたという。しかし、環の本格的な整備が進められたのは、江戸時代以降のことであり、一般的な縦環と、等高線に沿って設けた横環を張り巡らせることによって、不毛の扇状地が広大な水田地帯に変貌を遂げた。このような水田では、コイを放流して除草や害虫駆除に利用する田鯉農法がおこなわれている。

一方、扇端部では、伏流水となっていた河川が湧水となり、豊かな水をもたらしている。安曇野では、このような湧水のことを「花見」と呼んできた。その代表例が、周囲から万の川を集めて流れる万水川であり、環境省による名水百選「安曇野わさび田湧水群」にも選定されている。

(2) 中房川・烏川と扇状地

穂高古墳群は、北の中房川と、南の烏川に挟まれた地域を中心に占地している(第3・6図)。この2つの河川が形成する扇状地が、安曇野市穂高における沖積地のほぼ全域を占めている。

中房川扇状地 中房川は、東沢乗越に源を発し、乳川と合流して乳房川となるまでの全長が約16km、山地内の流域面積が約57km²の河川である。この川が形成した約23km²の扇状地は、扇頂が標高約750mの宮城にあたり、扇端が乳房川の右岸に及ぶ。

中房川では、上流に基盤岩である花崗岩が露出する溪谷が形成され、扇頂部に近い矢村・宮城付近にて、径約5mを超える花崗岩の押し出しが認められる。また、扇中央部には、長径約5cm～約30cmの花崗岩礫と粗粒砂がみられる。そして、扇端部に近い乳房川沿いの耳塚地区では、中粒から細粒の砂層を主として間にシルト層を挟み、ときに細礫を混入する地層となる。このように、堆積物の粒度に大きな差異が生じているのは、中房川扇状地が風化しやすい有明花崗岩を基盤としているためである。

ちなみに、中房川に由来する花崗岩の巨礫は、古くから石材として利用されてきた。大正から昭和の初期にかけては、中房川で採集されたり、扇状地内から掘り出されたりした花崗岩礫が、石碑・土台石・門柱・鳥居等の石材として各地に出荷されていたという²⁾。

烏川扇状地 烏川は、薬ヶ岳から直線状に東流し、穂高川に合流するまでの全長が約16km、山地内の流域面積が約69km²の河川である。この川が形成する約30km²の扇状地は、扇頂が標高約700mの須砂丘にあたり、扇端が穂高中心地の東側まで及ぶ³⁾。

このような烏川では、上流にV字谷が形成されており、中流まで渓流をなしているが、上原の北方を過ぎると粗粒物質からなる烏川扇状地に吸収されて水量が激減する。河床は、美濃帯の珪質泥岩・チャート・砂岩などが占め、全体的に黒っぽい岩石が多いが、上流域には花崗岩礫も多数みられる。扇中央に位置する富田の南方では、現河床のものほとんど同類の礫が地表から約15mにわたって堆積している。

(平塚・森田)

2 安曇野の歴史環境

長野県の中央に位置する安曇野市は、平成17年(2005)に5町村が合併して成立した。その内、旧南安曇郡徳高町・堀金村・三郷村、ならびに豊科町が、「西山」と呼ばれる飛騨山脈の東麓に広がる扇状地と、犀川西岸の沖積地にあたる。また、旧豊科町の一部と旧東筑摩郡明科町が、犀川東岸から「東山」と呼ばれる筑摩山地の西麓に位置する。このような市域の大半を山地が占めているものの、河川流域の河岸段丘上や、扇状地の扇端などに多数の遺跡が営まれており、縄文時代早期以降に属する周知の埋蔵文化財包蔵地が、これまでに400箇所ほど確認されてきた。本節では、必要に応じて松本平全域の様相に目を配りつつ、安曇野市域の旧石器時代から歴史時代にかけての概要を瞥見し、穂高古墳群の形成前後における歴史的な文脈を把握する。

(1) 旧石器時代

今のところ、松本平における旧石器時代遺跡の確認例は、盆地南部の田川流域を中心とした塩尻市域に集中している。安曇野市内では、三郷の東小倉遺跡 [3-6] にて有舌尖頭器が採集されており、旧石器時代に遡る遺跡が黒沢川流域に存在する可能性も指摘された⁴⁾。なお、明科の吐中遺跡 [5-422] にて、昭和31年(1956)にオオツノシカの化石が発見されたとの記録もあるという⁵⁾。しかし、この時期の実態については、明確な事例が乏しく、詳細を窺い知り得ない憾みがある。(原武・前田奈・武藤)

(2) 縄文時代

安曇野市域の縄文時代遺跡は、中期の事例を主体としつつ、早期から晩期にかけての事例がみられる。その多くが西山東麓に広がる複合扇状地の扇頂附近や、明科における犀川流域の河岸段丘上に営まれた。

穂高地域では⁶⁾、離山遺跡 [2-19]・新林遺跡等 [2-25] にて、僅かながら早期から前期の土器が報告されている。中期に入ると、多数の堅穴建物跡が確認された他谷遺跡 [2-27] をはじめ、徐々に遺跡数が増し、中期後葉にそのピークを迎えた。後期以降に遺跡数も大きく減少するが、山崎遺跡 [2-16]・草深遺跡 [2-17]・神谷遺跡 [2-24]・新林遺跡 [2-25] では、後期に属する土器の出土が報告された。また、離山遺跡 [2-19] では、大配石遺構が確認されており、後期・晩期の土器も多数出土している。堀金地域では⁷⁾、神沢遺跡の北側に位置する上手林遺跡 [4-8]・石見堂遺跡 [4-9] にて早期の押型文土器、石見堂遺跡などにて前期の土器が出土し、西山の山腹にあたる東峠でも同時期の遺物が採集されている。中期になると、そり表遺跡 [4-19]・なかじま遺跡 [4-20]・市上遺跡 [4-4] など、西山山麓に多数の遺跡が出現した。後・晩期の遺跡としては、神沢遺跡 [4-15] をはじめ、石剣がまとまって出土した山の神下遺跡 [4-6] が知られる。三郷地域では、早期の押型文土器片が出土した黒沢川右岸遺跡 [3-

8)・稲荷西遺跡 [3-12]がある。また、前期の北小倉才の神遺跡では、有尾式、北白川下層式土器も出土している。中期の遺跡としては、長者屋敷遺跡 [3-47]・南松原遺跡 [3-10]・東小倉遺跡 [3-6]の規模が大きい。

一方、東山に沿った明科地域では、北村遺跡にて中期を中心とする集落跡が確認されたほか、470基近い後期の土壙墓や、300体以上のほろ人骨が見つかった⁸⁾。また、晩期末から弥生時代初期の土器がみられたみどりヶ丘遺跡 [5-209]や、水式土器が出土した荒井遺跡 [5-206]が存在する⁹⁾。

(原武・前田奈・武藤)

(3) 弥生時代

安曇野市域の弥生時代遺跡は、中期以降に集落遺跡が増加する傾向にある。集落遺跡の立地は、地域によって差がみられ、穂高地域では扇尖から扇端にかけて分布するのに対して、堀金・三郷・豊科・明科地域では主として山麓に営まれた。

穂高の芝宮南遺跡 [2-40]では、竪穴建物跡等の遺構や、中期前半を主体とする土器が出土した。ほとんどの土器が細片であり、明科のみどりヶ丘遺跡 [5-209]の事例と類似することから、当該期の遺跡に共通する出土状況とも考えられている。一方で、石器の器種組成が偏在している点は、豊富な器種がみられたみどりヶ丘遺跡とは異なっており特徴的である。なお、芝宮南遺跡が厚い砂礫層の下から発見されたことから、扇尖に未知の遺跡が存在している可能性が示唆された¹⁰⁾。扇端付近に立地する等々力町市上中下遺跡 [2-35]では、かつて石包丁が採集されていたが、その後の発掘調査により、地表下18mから後期の竪穴建物跡が検出され、甌を含む土器も出土した¹¹⁾。穂高神社境内遺跡 [2-36]でも、明確な遺構は認められないものの、後期の土器片が確認された¹²⁾。また、三枚橋・藤塚遺跡 [2-38・47]の周辺からは、過去の発掘調査および採集遺物等で弥生時代後期の赤彩を施した土器片が確認されており、関連する遺構の存在が示唆されているが、具体的にはあきらかになっていない¹³⁾。

三郷の黒沢川右岸遺跡 [3-8]や、豊科の町田遺跡 [1-14]も中期に展開した集落であり、いずれも山麓の河岸段丘上に立地する¹⁴⁾。特に町田遺跡は、中期後半から終末にかけての短い期間に形成された集落遺跡と考えられている¹⁵⁾。

また、穂高の他谷遺跡 [2-27]、明科のほうろく屋敷遺跡 [5-101]などでは、再葬墓が発掘調査された¹⁶⁾。特に、ほうろく屋敷遺跡では、後期の竪穴建物跡のほかに、4群16基に及ぶ中期初頭の再葬墓が確認されており、在地系の土器を中心として、東北・関東および東海系の土器も出土している¹⁷⁾。

(原武・前田奈・前田萌)

(4) 古墳時代

安曇野市域の古墳時代遺跡は、前期から終末期まで存在する。前期古墳かと思われる事例も知られているが、当地域にて古墳の築造が盛んとなるのは、あくまで後期以降のことである。いずれの古墳も、6世紀後半から順次造営されたが、8世紀に墳墓としての役割を終えた点で共通している。

西山東麓の徳高地域から三郷地域にかけては、約90基の円墳からなる徳高古墳群を中心に、多数の後期古墳が営まれた。堀金では、須佐渡口南古墳 [4-1]、岩原古墳 [4-2]、前の髪古墳 [4-5] などが存在する。また、三郷の北小倉1・2号墳 [3-39]、平福寺付近古墳 [3-28]、アルプス学園前古墳 [3-7] は、扇状地を縦断して点在する。徳高古墳群を造営した集団は、烏川扇状地の扇端付近に、馬場街道遺跡 [2-53]、藤塚遺跡 [2-28] や、等々力町巾巾下遺跡 [2-35] をはじめとする矢原遺跡群を拠点としたのであろう。馬場街道遺跡では、中期から後期にかけての建物跡が確認されており、古代・中世にかけて集落遺跡が継続する³⁸⁾。藤塚遺跡では、後期と推定される竪穴建物跡30棟と掘立柱建物跡5棟が確認されている³⁹⁾。矢原五輪畑遺跡 [2-48] では、土製勾玉が多数出土したという⁴⁰⁾。一方、堀金・豊科地域では、古墳時代の集落がみられないが⁴¹⁾、これは沖積作用によって集落域が地中深くに埋没した結果に過ぎない。

明科地域には、前期に遡る上生野遺跡 [5-517] が認められる²²⁾。また、長峯山から潮神明宮周辺の山麓にかけては、能念寺古墳群(能念寺1～3号墳) [5-416～418]、武士平1・2号墳 [5-420・421]、上郷古墳 [5-408]、潮古墳群(金山塚1～5号墳・お経塚古墳・潮古墳群6～8号墳) [5-503～507・508・537～539] などが築かれており、恐らく20基以上の古墳があると予想されている。能念寺古墳群には、前期古墳が含まれる可能性も指摘されているが、大方が6世紀以降のものであろう²³⁾。7世紀から8世紀初頭まで稼働した潮古墳群は²⁴⁾、明科廃寺 [5-409] を創建した氏族の奥津城である可能性が高い。そのうち、潮神明宮前遺跡では、周溝を巡らせた一辺約20mの方墳が存在することも確認された²⁵⁾。このような周溝をもつ方墳は、松本平全域でも中山15号墳以外に類例がない²⁶⁾。上郷古墳は、横穴式石室から直刀2本と轡が出土しており、それらの特徴から7世紀末葉に比定されている²⁷⁾。

また、先述した通り明科地域には、7世紀後半に創建された明科廃寺 [5-409] がある。これまでの発掘調査によって、掘立柱建物跡などともなう大量の瓦が出土した²⁸⁾。鴟尾や瓦塔も確認されており、信濃における最古の寺院のひとつとして注目されよう。補修瓦の様相などから、平安時代まで存続していたものと考えられている。一部の瓦は、桜坂古窯跡 [5-212] から供給されたものとみられるが²⁹⁾、軒丸瓦第一型式第1・2類などは生産地がわからない。なお、第一型式第2類と同范の軒丸瓦が、岐阜県飛騨市の寿楽寺廃寺から出土している³⁰⁾。

(前田萌・森田)

(5) 古代

ほぼ現在の長野県にあたる地域に建置された令制国の信濃国には、伊那・諏訪・筑摩・安曇・更級・水内・高井・埴科・小県・佐久の10郡が設けられた。現在の安曇野市は、安曇郡の大部分と、筑摩郡の一部に該当し、「倭名類聚抄」によれば、安曇郡に高家・八原・前科・村上の4郷が存在していたことがわかる。恐らく、高家郷が豊科・三郷周辺、八原郷が徳高周辺、前科郷が明科・池田町周辺、村上郷が大町市周辺にあたるものであろう。正倉院に残されている布袴の墨書には、「信濃国安曇郡前科郷戸主安曇部真平調布志端(中略)郡司主帳従七位上安曇部百島 天平宝字八年(764)十月」とあり、安曇氏が郡司層の一端を担っていた事実を窺わせる。なお、当地の古社として知られる徳高神社は、「日本三代実録」貞観元(859)年条に「宅宅神」とみえ、延喜式神名帳に「徳高神社 明神大」とある通り、有力な官社と

して取り扱われていた。

奈良時代の集落立地は、古墳時代までの傾向を概ね踏襲しており、犀川以西の扇端と犀川以東の河岸段丘上に営まれた。また、三郷地域の三角原遺跡 [3-14]、堀金地域の堀金小学校遺跡 [4-24]、豊科地域の吉野町遺跡 [1-22] などで集落遺跡が発見されたことにより、8世紀以降、これらの地域で新たに開発が及んだとみられている。9世紀中葉～11世紀中葉の遺構が継続する様子が確認された三郷地域の三角原遺跡 [3-14] などのように、9世紀中葉以降になると各地で集落遺跡が増加することから、平安時代以降に郡内の開発がさらに進んだとみられる³¹⁾。

穂高地域では、馬場街道遺跡 [2-53] から、8世紀・10～11世紀の竪穴建物跡がそれぞれ確認されている³²⁾。このほか矢原五輪畑遺跡 [2-48]、矢原宮地遺跡 [2-49] でも竪穴建物跡が確認されている。堀金地域では、岩田天神南遺跡 [4-3]、おもそう遺跡 [4-7]、下堀道南遺跡 [4-22] などで奈良時代の集落遺跡が確認されており³³⁾、堀金小学校付近遺跡 [4-24] では、9世紀後半以降の竪穴建物跡が確認された³⁴⁾。豊科地域では、鳥羽遺跡 [1-23]・吉野町遺跡 [1-22]・梶海波遺跡 [1-6] で竪穴建物跡が発見されており、広大な沖積地の開発が進んだことが窺われるが、いずれも9世紀後半に位置づけられ、集落は継続していない³⁵⁾。

犀川以東の明科地域でも、全域で集落が確認されており、開発が広範囲に及んでいたとみられている³⁶⁾。潮古墳群 [5-503～508]・明科庵寺 [5-409] の造営集団の集落とみなされている明科遺跡群 [5-407～414] では、栄町遺跡 [5-411] や龍門淵遺跡 [5-412] の発掘調査から、犀川を中心とした水運の支配を経済基盤として富を蓄積した可能性が想定されている³⁷⁾。このほか、潮神明宮前遺跡 [5-501] や上生野遺跡 [5-517]、犀川を挟んだ段丘上に位置するほうろく屋敷遺跡 [5-101] などでも平安時代の集落が営まれた³⁸⁾。また古殿屋敷遺跡 [5-413] では、平安時代の木棺墓が確認され、八稜鏡や緑釉陶器が出土した³⁹⁾。これらの集落遺跡のほかに、主要な生産遺跡として牧と窯跡を挙げておく。10世紀前半に編纂された『延喜式』によれば、勅旨牧である信濃十六牧のうち、松本平には埴原牧・大野牧・猪鹿牧が置かれていたと記されている。いずれも具体的な遺跡は明確に発見されていないが、このうち猪鹿牧が、安曇野市穂高牧付近に比定されている。

信濃の須恵器生産は、6世紀前半の長野市松ノ山窯跡に始まり、7世紀中葉から後葉になって各地に窯が出現した⁴⁰⁾。松本平では、7世紀から8世紀中頃にかけて、松本市新切窯跡群・銀形沢窯跡、塩尻市菟淵窯跡など複数の須恵器生産地が出現した。この時期の松本平における遺跡からは、岐阜県的美濃須恵窯跡群で生産された土器の出土が目立っており、須恵器に対する需要の高まりが開窯の契機になったと考えられている。また、菟淵窯の製品は美濃須恵窯と類似しており、陶工の移動が想定されている。豊科地域でも、東山山麓にある上ノ山窯跡群・菟淵平窯跡群 [1-12・13] で、8・9世紀代の須恵器窯跡17基と、数基の土器焼成土坑、26棟の竪穴建物跡が調査されている。9世紀頃になると、松本市の会田盆地窯跡群や、上ノ山窯跡群・菟淵平窯跡群や田湧池窯跡からなる筑摩東山窯跡群に須恵器生産が集約されたと考えられている。この傾向は須恵器だけでなく、土師器にも当てはめるとできるとされる。集落遺跡出土の土師器の規格が揃い始めた点と、土師器焼成坑の遺構が筑摩東山窯跡群に限られている点は注目される。また、上ノ山窯跡群・菟淵平窯跡群から出土した瓦や、須恵器壺には土師器堯の技法であるハケが施されたものがあり、土師器と須恵器が一体的に生産されていたことも指摘され

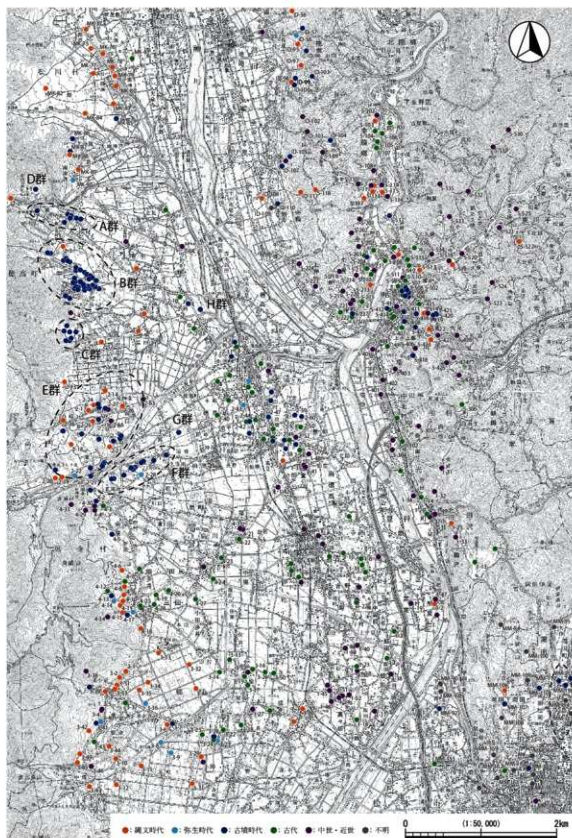
ている。9世紀前葉頃には、松本平に流通する土器はすべて筑摩山窯跡群で生産する体制が整ったと考えられ、松本平の古代住居跡で使われていた土器のほとんどは、ここで焼かれていたものであるとされている。松本平において須恵器窯での食膳具生産は、9世紀前葉までで終了したとされ、9世紀中葉から後葉にかけては土器焼成坑での生産がおこなわれていたと考えられている。また須恵器貯蔵具は9世紀後葉まで窯での生産がおこなわれていたものと推定されている。9世紀末には、遺跡から出土する土器は、東海地方などから搬入品である灰軸陶器が多くなり、在地産の土師器も個体差が大きくなるなど、多種の土器を一元的に生産・供給した体制が終焉を迎えたとみられている⁴¹⁾。

(6) 中世・近世

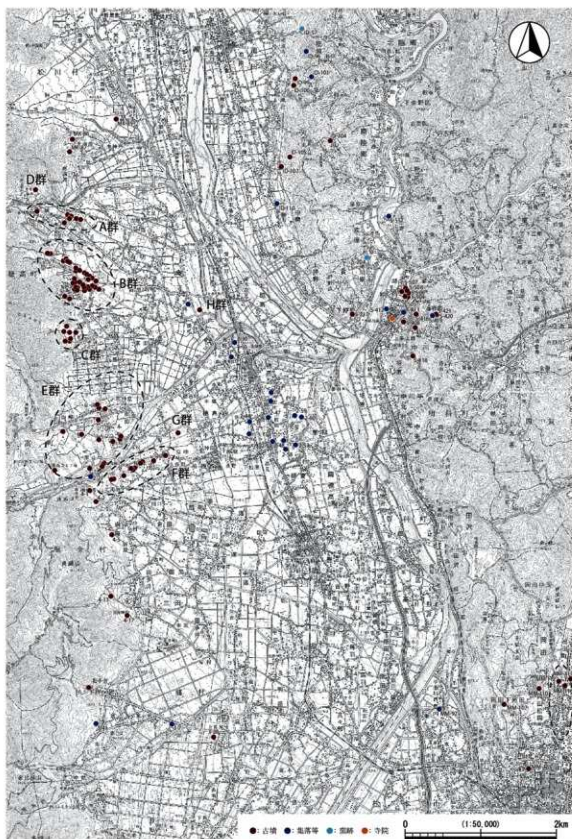
平安時代末から鎌倉時代初期には、住吉荘・大穴荘・仁科荘や、矢原御厨・仁科御厨などが存在した。鎌倉・室町時代においては、仁科氏が大町市周辺を拠点として勢力を保ち、徳高神社の大檀那も務めた細萱氏(大伴氏)が矢原に拠っている。また、松本平にて力を伸ばした小笠原氏が度々信濃守護職となったが、天文19年(1550)に小笠原長時を破った武田晴信が中信を手にした。その後は、仁科氏が徳高神社の大檀那を担い、一族・被官の古瀬氏・等々力氏・堀金氏・丸山氏・真々部氏らも武田に従う。同様に、東信の小県郡を本貫地とした海野氏や、その支族である会田氏・塔原氏らも武田被官となった。武田氏滅亡後は、木曾義昌が一带を領したが、織田信長の死とともに小笠原氏が迎えられ、天正18年(1590)に徳川家康が関東へ移った後、石川家・小笠原家・戸田松平家・堀田家・水野家を経て、享保10年(1725)に再び戸田松平家が松本藩に封じられて明治維新を迎えた。なお、この地域は、千国道が通る交通の要衝であり、天保3年(1832)には松本と新町を結ぶ犀川通船も開かれた。

遺跡の様相に目を転じると、平地に中近世の館跡、西山・東山の一帯に戦国期の山城が残されている。中世前期に遡る殿村館跡 [1-35] は、古くから当地域の開発に関わってきた細萱氏の館跡であろう。一方、仁科氏の一族・被官に関しては、古瀬氏が古瀬城跡 [2-65]・空保木城跡 [2-63]、等々力氏が等々力城跡 [2-62]、堀金氏が岩原城跡 [4-33]、丸山氏が中村堀屋敷跡 [1-26]・鳥羽館跡 [1-30]、真々部氏が真々部氏館跡 [1-24] などを営んでいた。豊科地域では、16~17世紀に城館を中心とした街並みが形成され、近世を通じて居住地が固定化されるとともに、生産域の開発が積極的におこなわれていった⁴²⁾。また、明科地域に塔原氏の上手屋敷遺跡 [5-404]・塔ノ原城跡 [5-406]、豊科田沢に光氏の町田館跡 [1-34]・光城跡 [1-31] などがあり、瀬・塔ノ原・光にかけて「古屋敷」という地名も複数残されている通り、海野一族が犀川東岸一帯を押さえていたことがわかる。

なお、安曇野の扇状地は、「堰」と呼ばれる用水路によって潤われてきた。それは、山麓の斜面を利用した縦堰と、ほぼ等高線に沿って南北に設けられた横堰からなる。とりわけ、文化13年(1816)に開削された最大規模の拾ヶ堰は、総延長約15kmの規模を誇る横堰だが、周辺10村の人々によって約3ヶ月の短期間のうちに竣工したことも知られる。(原武・深田)



第4図 安曇野市周辺の遺跡



第5図 安曇野市周辺の遺跡(古墳時代)

第1表 安曇野市周辺の遺跡

地域	番号	遺跡名	主な時代	種別
豊科	1-1	宮前遺跡	平安	散石地
豊科	1-2	熊倉遺跡	縄文	散石地
豊科	1-3	小海渡遺跡	平安	散石地
豊科	1-4	上手木戸遺跡	中世	集落跡
豊科	1-5	寛井遺跡	平安	集落跡
豊科	1-6	熊海渡遺跡	平安	集落跡
豊科	1-7	本村遺跡	平安	散石地
豊科	1-8	熊原遺跡	平安	散石地
豊科	1-9	大海渡遺跡	平安	散石地
豊科	1-10	健ヶ池遺跡	平安	散石地
豊科	1-11	成相遺跡	縄文・平安	散石地
豊科	1-12	葛原平塚跡群	平安	生家遺跡
豊科	1-13	上ノ山原跡群	奈良・平安	生家遺跡
豊科	1-14	町田遺跡	弥生・平安	集落跡
豊科	1-15	光遺跡	縄文・平安	散石地
豊科	1-16	原村遺跡	平安	散石地
豊科	1-17	飯田古宮遺跡	中世	集落跡
豊科	1-18	真ヶ部山下遺跡	平安	散石地
豊科	1-19	町村遺跡	中世	散石地
豊科	1-20	小瀬川遺跡	弥生・平安	散石地
豊科	1-21	上ノ山北遺跡	縄文	散石地
豊科	1-22	吉野町遺跡	平安	集落跡
豊科	1-23	鳥羽遺跡	平安	集落跡
豊科	1-24	真ヶ部氏館跡	中世	城館跡
豊科	1-25	吉野町館跡	中世	城館跡
豊科	1-26	中村別荘館跡	中世	城館跡
豊科	1-27	成相氏館跡	中世	城館跡
豊科	1-28	積土の墓館跡	中世	城館跡
豊科	1-29	法蔵寺館跡	中世	城館跡
豊科	1-30	鳥羽館跡	中世	城館跡
豊科	1-31	光城跡	中世	城館跡
豊科	1-32	田沢城跡	中世	城館跡
豊科	1-33	上ノ山城跡	中世	城館跡
豊科	1-34	町田館跡	中世	城館跡
豊科	1-35	殿村館跡	中世	城館跡
豊科	1-36	熊倉氏館跡	中世	城館跡
豊科	1-37	花村氏館跡	中世	城館跡
豊科	1-38	飯田谷跡	中世	城館跡
豊科	1-39	法蔵寺跡	中世	社寺跡
豊科	1-40	日光寺跡	中世	社寺跡
豊科	1-41	常光寺跡	中世	社寺跡
豊科	1-42	正覚院跡	奈良	社寺跡
豊科	1-43	円蔵寺跡	奈良	社寺跡
豊科	1-44	円通寺跡	中世	社寺跡
豊科	1-45	正覚寺跡	奈良	社寺跡
豊科	1-46	真光寺跡	中世	社寺跡
豊科	1-47	清法寺跡	中世	社寺跡
豊科	1-48	常光寺跡	中世	社寺跡
豊科	1-49	円通寺跡	中世	社寺跡
豊科	1-50	上手瀬原館跡	中世	城館跡
豊科	1-51	常松寺跡	奈良	社寺跡
豊科	1-52	金堂寺田跡	中世	社寺跡
穂高	2-1	宮城遺跡	縄文中期後半	集落跡
穂高	2-2	野辺沢遺跡	縄文	集落跡
穂高	2-3	松尾遺跡	縄文中前期	集落跡
穂高	2-4	青原寺大門遺跡	中世	城館跡
穂高	2-5	小岩塚下木戸遺跡	縄文中期後半・中世	集落跡
穂高	2-6	原巻込遺跡	平安	集落跡
穂高	2-7	庄内渡遺跡	縄文	集落跡
穂高	2-8	高下神社東遺跡	縄文中期後半	集落跡
穂高	2-9	高下遺跡	縄文	集落跡
穂高	2-10	耳塚公民館敷遺跡	平安	集落跡
穂高	2-11	耳塚遺跡	古墳前期・奈良	集落跡
穂高	2-12	有明南遺跡	縄文	集落跡
穂高	2-13	寺島原遺跡	縄文中期後半～後期	集落跡

地域	番号	遺跡名	主な時代	種別
穂高	2-14	有明山上遺跡	縄文	集落跡
穂高	2-15	かんべいじふ遺跡	平安	集落跡
穂高	2-16	山崎遺跡	縄文中期～後期	集落跡
穂高	2-17	草津遺跡	縄文中期～後期	集落跡
穂高	2-18	十三郎倉遺跡	縄文	集落跡
穂高	2-19	藤山遺跡	縄文	集落跡
穂高	2-20	大坂遺跡	縄文中期	集落跡
穂高	2-21	瀬下遺跡	縄文・古墳	集落跡
穂高	2-22	シヨウノヒナタ遺跡	縄文中期後半～後期・弥生	集落跡
穂高	2-23	南原遺跡	縄文前期後半	集落跡
穂高	2-24	神谷遺跡	縄文中期後半～後期	集落跡
穂高	2-25	新林遺跡	縄文早期～後期	集落跡
穂高	2-26	鬼神次遺跡	縄文	集落跡
穂高	2-27	他谷遺跡	縄文・中世	集落跡
穂高	2-28	塚原遺跡	弥生	集落跡
穂高	2-29	貝物通下遺跡	平安	集落跡
穂高	2-30	貝物通上遺跡	古墳・平安	集落跡
穂高	2-31	辻遺跡	古墳・平安	集落跡
穂高	2-32	一本松遺跡	平安	集落跡
穂高	2-33	神の木遺跡	平安	集落跡
穂高	2-34	宮脇遺跡	弥生中期・平安・中世	集落跡
穂高	2-35	等々力町市上町上遺跡	縄文・弥生・奈良・平安・中世	集落跡
穂高	2-36	穂高神社境内遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	集落跡
穂高	2-37	天才の神遺跡	古墳前期・平安	集落跡
穂高	2-38	藤塚遺跡	古墳前期・平安	集落跡
穂高	2-39	宗徳寺遺跡	平安	集落跡
穂高	2-40	芝宮南遺跡	弥生・平安	集落跡
穂高	2-41	穂高高化北遺跡	平安	集落跡
穂高	2-42	大坪沢遺跡	平安	集落跡
穂高	2-43	南原遺跡	弥生	集落跡
穂高	2-44	長者池遺跡	古墳・平安	集落跡
穂高	2-45	追原遺跡	平安	集落跡
穂高	2-46	矢原穂刈池遺跡	平安	集落跡
穂高	2-47	三枚橋遺跡	弥生中期～中世	集落跡
穂高	2-48	矢原五輪池遺跡	古墳・平安	集落跡
穂高	2-49	矢原宮地遺跡	縄文中期・奈良～平安	集落跡
穂高	2-50	梅池遺跡	縄文中期後半・平安	集落跡
穂高	2-51	西反田遺跡	古墳前期・平安	集落跡
穂高	2-52	正高遺跡	縄文中期後半・中世	集落跡
穂高	2-53	馬場御道遺跡	古墳・奈良・平安	集落跡
穂高	2-54	矢原おふて池遺跡	平安	集落跡
穂高	2-55	下原遺跡	縄文中期後半	集落跡
穂高	2-56	八丁川遺跡	奈良・平安・中世	集落跡
穂高	2-57	船原遺跡	古墳前期～平安	集落跡
穂高	2-58	中在地遺跡	縄文中期後半・古墳前期～平安	集落跡
穂高	2-59	堀之内遺跡	古墳中期～後期・中世	集落跡
穂高	2-60	矢原山上遺跡	古墳中期～後期・中世	集落跡
穂高	2-61	弥之助池遺跡	平安	集落跡
穂高	2-62	等々力城跡	中世	城館跡
穂高	2-63	空保木城跡	中世	城館跡
穂高	2-64	古帆氏館跡	中世	城館跡
穂高	2-65	古帆城跡	中世	城館跡
穂高	2-66	寺前・北田遺跡	中世	散石地
穂高	2-A1	A1号墳(段塚)	古墳	古墳
穂高	2-A3	A3号墳	古墳	古墳
穂高	2-A6	A6号墳(大塚塚)	古墳	古墳

地域	番号	遺跡名	主な時代	種別
鶴高	2-A7	A7号墳(旧塚)	古墳	古墳
鶴高	2-A8	A8号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B1	B1号墳(石いり塚)	古墳	古墳
鶴高	2-B2	B2号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B3	B3号墳(通塚)	古墳	古墳
鶴高	2-B4	B4号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B5	B5号墳(金塚)	古墳	古墳
鶴高	2-B6	B6号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B7	B7号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B8	B8号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B9	B9号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B10	B10号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B11	B11号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B12	B12号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B13	B13号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B14	B14号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B15	B15号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B16	B16号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B17	B17号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B18	B18号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B19	B19号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B20	B20号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B21	B21号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B22	B22号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B23	B23号墳(祝塚)	古墳	古墳
鶴高	2-B24	B24号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B25	B25号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B26	B26号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B27	B27号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B28	B28号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B29	B29号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B30	B30号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B31	B31号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B32	B32号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B33	B33号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B34	B34号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B35	B35号墳	古墳	古墳
鶴高	2-B36	B36号墳	古墳	古墳
鶴高	2-C1	C1号墳	古墳	古墳
鶴高	2-C2	C2号墳	古墳	古墳
鶴高	2-C3	C3号墳	古墳	古墳
鶴高	2-C4	C4号墳	古墳	古墳
鶴高	2-C5	C5号墳	古墳	古墳
鶴高	2-C6	C6号墳	古墳	古墳
鶴高	2-C7	C7号墳	古墳	古墳
鶴高	2-D1	D1号墳(巖石岩窟)	古墳	古墳
鶴高	2-E1	E1号墳(西塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E2	E2号墳(三郎塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E3	E3号墳	古墳	古墳
鶴高	2-E4	E4号墳(藤塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E5	E5号墳(上人塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E6	E6号墳(風塚3号)	古墳	古墳
鶴高	2-E7	E7号墳(風塚2号)	古墳	古墳
鶴高	2-E8	E8号墳(風塚1号)	古墳	古墳
鶴高	2-E9	E9号墳(前田塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E10	E10号墳(寺島塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E11	E11号墳(神谷塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E12	E12号墳(浜塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E13	E13号墳(浜塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E14	E14号墳(藤山1号)	古墳	古墳
鶴高	2-E15	E15号墳(藤山2号)	古墳	古墳
鶴高	2-E16	E16号墳(前塚)	古墳	古墳
鶴高	2-E17	E17号墳 (シオウシハウ)	古墳	古墳
鶴高	2-E18	E18号墳(藤山3号)	古墳	古墳
鶴高	2-E19	E19号墳	古墳	古墳
鶴高	2-F1	F1号墳	古墳	古墳

地域	番号	遺跡名	主な時代	種別
鶴高	2-F2	F2号墳	古墳	古墳
鶴高	2-F3	F3号墳	古墳	古墳
鶴高	2-F4	F4号墳	古墳	古墳
鶴高	2-F5	F5号墳	古墳	古墳
鶴高	2-F6	F6号墳 (元塚大明神)	古墳	古墳
鶴高	2-F7	F7号墳	古墳	古墳
鶴高	2-F8	F8号墳	古墳	古墳
鶴高	2-F9	F9号墳(二つ塚)	古墳	古墳
鶴高	2-F10	F10号墳(大塚)	古墳	古墳
鶴高	2-G1	G1号墳(上原古墳)	古墳	古墳
鶴高	2-H1	H1号墳(大塚塚)	古墳	古墳
三郷	3-1	一本松遺跡	縄文・中世	散布地
三郷	3-2	鳴沢A遺跡	縄文	散布地
三郷	3-3	才の神遺跡	縄文	散布地
三郷	3-4	浄心寺南塚	中世以降	不明
三郷	3-5	浄心寺付近遺跡	縄文・中世	散布地
三郷	3-6	東小倉遺跡	縄文	集落跡
三郷	3-7	アルプス学園前遺跡	古墳以降	古墳?
三郷	3-8	黒沢川右岸遺跡	縄文・弥生	集落跡
三郷	3-9	ナンクラ原遺跡	縄文・弥生	散布地
三郷	3-10	新原西遺跡	縄文	集落跡
三郷	3-11	新原北遺跡	縄文	散布地
三郷	3-12	稲荷西遺跡	縄文	散布地
三郷	3-13	丁田遺跡	縄文・平安	集落跡
三郷	3-14	三角原遺跡	縄文・弥生・平安以降	集落跡
三郷	3-15	藤中村遺跡	平安以降	散布地
三郷	3-16	藤小路遺跡	縄文・平安以降	散布地
三郷	3-17	藤上平遺跡	平安以降	散布地
三郷	3-18	栗の木下遺跡	平安以降	集落跡
三郷	3-19	三柱神社東遺跡	平安以降	散布地
三郷	3-20	白山神社東遺跡	縄文	散布地
三郷	3-21	一日市場郵便局南遺跡	縄文	散布地
三郷	3-22	上総原遺跡	平安以降	散布地
三郷	3-23	川原親氏宅地遺跡	弥生	散布地
三郷	3-24	変原遺跡	弥生・平安	散布地
三郷	3-25	宮宮遺跡	平安	散布地
三郷	3-26	道下遺跡	平安・中世	集落跡
三郷	3-27	坂がへ遺跡	中世以降	散布地
三郷	3-28	平福寺付近古墳	古墳	古墳
三郷	3-29	長尾城址北遺跡	縄文	散布地
三郷	3-30	長尾城址	中世	城跡跡
三郷	3-31	赤坂西遺跡	縄文	散布地
三郷	3-32	住吉原遺跡	縄文	散布地
三郷	3-33	鳴沢B遺跡	縄文	散布地
三郷	3-34	西塚遺跡	縄文	散布地
三郷	3-35	地蔵沖遺跡	縄文	散布地
三郷	3-36	大塚遺跡	弥生	散布地
三郷	3-37	瀬尻遺跡	平安	散布地
三郷	3-38	小倉城址	中世	城跡跡
三郷	3-39	北小倉1号・2号塚	古墳?	古墳?
三郷	3-40	変原西遺跡	弥生	散布地
三郷	3-41	山の越遺跡	古墳	散布地
三郷	3-42	大日堂北遺跡	縄文	散布地
三郷	3-43	中沢遺跡	平安以降	散布地
三郷	3-44	砂の丸保遺跡	縄文	散布地
三郷	3-45	黒沢川水場東遺跡	縄文	散布地
三郷	3-46	富士塚	中世	散布地
三郷	3-47	長者原東遺跡	縄文	散布地
三郷	3-48	千国原北遺跡	縄文	散布地
三郷	3-49	大塚遺跡	縄文	散布地
三郷	3-50	見本町遺跡	平安	散布地
三郷	3-51	鳴沢B遺跡	縄文	散布地
三郷	3-52	竜崎寺跡	中世・近世	社寺跡
三郷	3-53	五反田遺跡	縄文	集落跡

地域	番号	遺跡名	主な時代	種別
福金	4-1	熊野口南古墳	古墳	古墳
福金	4-2	岩原古墳	古墳	古墳
福金	4-3	若原遺跡	古代	集落跡
福金	4-4	巾上遺跡	縄文・弥生・中世	集落跡
福金	4-5	前之安古墳	古墳	古墳
福金	4-6	山の神下遺跡	縄文	敷布地
福金	4-7	おもしろ遺跡	縄文・弥生・古代	敷布地
福金	4-8	上手林遺跡	縄文	敷布地
福金	4-9	石見堂遺跡	縄文	敷布地
福金	4-10	上の原B遺跡	縄文	敷布地
福金	4-11	上の原C遺跡	縄文	敷布地
福金	4-12	曲尾遺跡	縄文・古代	敷布地
福金	4-13	曲尾古墳群	古墳	古墳
福金	4-14	平塚遺跡	縄文・弥生	敷布地
福金	4-15	神沢遺跡	縄文	敷布地
福金	4-16	賀茂神社南遺跡	縄文・弥生	敷布地
福金	4-17	古城下古墳	古墳	古墳
福金	4-18	和合田遺跡	縄文	敷布地
福金	4-19	そり遺跡	縄文・弥生・ 古代・中世	集落跡
福金	4-20	なかしま遺跡	縄文・古代	集落跡
福金	4-21	十両崩原遺跡	中世・近世	敷布地
福金	4-22	下瀬田遺跡	古代	敷布地
福金	4-23	大つま(舊田原)遺跡	縄文・古代	敷布地
福金	4-24	福金小学校付近遺跡	古代	集落跡
福金	4-25	田多井古城下遺跡	縄文・古代・中世	集落跡
福金	4-26	田多井北村遺跡	縄文・古代・中世	敷布地
福金	4-27	福の内遺跡	縄文・古代・中世	敷布地
福金	4-28	深沢南遺跡	縄文・古代	敷布地
福金	4-29	安楽寺遺跡	中世以降	社寺跡
福金	4-30	大洞寺遺跡	中世以降	社寺跡
福金	4-31	上瀬田町原遺跡	中世以降	城跡跡
福金	4-32	田多井氏居館跡	中世以降	城跡跡
福金	4-33	岩原城址	中世以降	城跡跡
福金	4-34	田多井城址	中世以降	城跡跡
福金	4-35	十両崩原遺跡	中世以降	城跡跡
明科	5-101	ほうろく原遺跡	縄文・弥生・奈良・ 平安・中世・近世	集落跡
明科	5-102	高松寺跡	中世・近世	社寺跡
明科	5-103	萬年寺跡	縄文	敷布地
明科	5-104	竹原遺跡	縄文・古代	敷布地
明科	5-105	上ノ段遺跡	古代	敷布地
明科	5-106	北原遺跡	縄文・古代	敷布地
明科	5-107	鶴平遺跡	古代	敷布地
明科	5-108	神宮町見跡	中世	城跡跡
明科	5-109	泉福寺	中世・近世	社寺跡
明科	5-110	中村城址	中世・近世	城跡跡
明科	5-111	尊光寺跡	中世・近世	社寺跡
明科	5-112	寺見遺跡	縄文	敷布地
明科	5-113	石原遺跡	縄文後期	敷布地
明科	5-114	中村殿田遺跡	中世・近世	城跡跡
明科	5-115	中村塚	縄文中期	敷布地
明科	5-116	小丸山宮址	中世・近世	城跡跡
明科	5-117	源平遺跡	縄文	敷布地
明科	5-118	塚田山遺跡	縄文	敷布地
明科	5-201	萩原古原遺跡	中世・近世	城跡跡
明科	5-202	萩原城址	中世・近世	城跡跡
明科	5-203	宮原遺跡	縄文・古代	敷布地
明科	5-204	宮原古原跡	古墳	生産遺跡
明科	5-205	宮ノ前遺跡	縄文・古代	集落跡
明科	5-206	荒井遺跡	縄文・古代	敷布地
明科	5-207	伊勢宮遺跡	縄文	敷布地
明科	5-208	嵐城	中世・近世	城跡跡
明科	5-209	ムトキ+丘遺跡 (組+丘遺跡)	縄文・弥生・古代	集落跡
明科	5-210	塚田原遺跡	縄文・弥生・ 古代・中世・近世	敷布地

地域	番号	遺跡名	主な時代	種別
明科	5-211	塚田原内原跡	中世	城跡跡
明科	5-212	塚田原跡	古代・中世・近世	生産遺跡
明科	5-213	第五原原跡	縄文	敷布地
明科	5-214	塚田原上ノ平遺跡	縄文・中世・近世	敷布地・ 城跡跡
明科	5-215	上野遺跡	縄文・古代・ 中世・近世	敷布地
明科	5-216	やしき遺跡	縄文・古代・ 中世・近世	敷布地
明科	5-217	上野原古墳	古墳	古墳
明科	5-218	白沢城	中世・近世	城跡跡
明科	5-219	押野山遺跡	縄文・中世・近世	敷布地
明科	5-220	押野城	中世・近世	敷布地
明科	5-221	城ノ平遺跡	縄文・中世・近世	敷布地
明科	5-222	押野八幡宮	古代・中世・近世	敷布地
明科	5-223	中木戸遺跡	中世・近世	集落跡
明科	5-224	天王原遺跡	中世・近世	社寺跡
明科	5-301	光遺跡群北村遺跡	縄文・弥生・ 古代・中世・近世	集落跡
明科	5-302	光遺跡群中島遺跡	古代	集落跡
明科	5-303	光遺跡群下原跡	中世・近世	集落跡
明科	5-304	光遺跡群古宮遺跡	中世・近世	社寺跡
明科	5-305	しょうぶ平遺跡	中世・近世	敷布地
明科	5-306	天王遺跡	縄文・古代	敷布地
明科	5-401	輪崎寺古原遺跡	中世・近世	城跡跡
明科	5-402	解宮社	中世・近世	敷布地
明科	5-403	法音寺跡	中世・近世	城跡跡
明科	5-404	上手原敷遺跡	縄文・古代・ 中世・近世	集落跡
明科	5-405	町原敷遺跡	中世・近世	集落跡
明科	5-406	塚ノ原城址	中世・近世	城跡跡
明科	5-407	明科遺跡群上原遺跡	縄文・古代	敷布地
明科	5-408	明科遺跡群中島遺跡	古墳	古墳
明科	5-409	明科遺跡群町原遺跡	縄文・古代	社寺跡
明科	5-410	明科遺跡群町原遺跡	古代	集落跡
明科	5-411	明科遺跡群町原遺跡	古墳・古代	集落跡
明科	5-412	明科遺跡群殿門 遺跡	弥生・古墳	その他 (祭祀)
明科	5-413	明科遺跡群古原 敷遺跡	中世・近世	城跡跡
明科	5-414	明科遺跡群元町 敷遺跡	弥生・古代	集落跡
明科	5-415	こや城	縄文・古代・ 中世・近世	集落跡・ 城跡跡
明科	5-416	能念寺1号墳	古墳	古墳
明科	5-417	能念寺2号墳	古墳	古墳
明科	5-418	能念寺3号墳	古墳	古墳
明科	5-419	武士平遺跡	古墳・中世・近世	敷布地
明科	5-420	武士平1号墳	古墳	古墳
明科	5-421	武士平2号墳	古墳	古墳
明科	5-422	吐中遺跡	縄文	敷布地
明科	5-423	城ノ下遺跡	縄文	敷布地
明科	5-424	海渡遺跡	中世	城跡跡
明科	5-425	光久寺	中世	社寺跡
明科	5-426	清水古原敷	中世	城跡跡
明科	5-427	平上ノ段遺跡	中世	城跡跡
明科	5-428	中沢古原敷	中世	城跡跡
明科	5-501	瀬遺跡群瀬神宮 前遺跡	古代	集落跡
明科	5-502	瀬遺跡群新原遺跡	古代	敷布地
明科	5-503	金山(1)号墳	古墳	古墳
明科	5-504	金山(2)号墳	古墳	古墳
明科	5-505	金山(3)号墳	古墳	古墳
明科	5-506	金山(4)号墳	古墳	古墳
明科	5-507	金山(5)号墳	古墳	古墳
明科	5-508	お経塚古墳	古墳	古墳
明科	5-509	瀬遺跡群古原敷遺跡	古代・中世・近世	城跡跡
明科	5-510	瀬遺跡群瀬田遺跡	古代・中世・近世	敷布地

地域	番号	遺跡名	主な時代	種別
明科	5-511	瀬邊跡群古殿屋敷	中世・近世	城跡跡
明科	5-512	瀬邊跡群稲田若宮跡	縄文・古代	集落跡
明科	5-513	瀬邊跡群三石山遺跡	縄文	散布地
明科	5-514	瀬邊跡群茶臼山遺跡	縄文・中世・近世	散布地、城跡跡
明科	5-515	木戸堀ノ爪遺跡	古代	散布地
明科	5-516	大久保遺跡	古代	散布地
明科	5-517	上生野遺跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世	集落跡
明科	5-518	山中殿屋敷	中世・近世	城跡跡
明科	5-519	山中中原屋敷跡	縄文	散布地
明科	5-520	土橋遺跡	中世・近世	散布地
明科	5-521	花見城址	中世・近世	城跡跡
明科	5-522	庄部沢遺跡	縄文	散布地
明科	5-523	笹ノ野城址	中世・近世	城跡跡
明科	5-524	三草城(馬城)址	中世・近世	城跡跡
明科	5-525	高見巻址	中世・近世	城跡跡
明科	5-526	城二の塚址	中世・近世	城跡跡
明科	5-527	物見岩址	中世・近世	城跡跡
明科	5-528	高巻御物見址	中世・近世	城跡跡
明科	5-529	たかうち跡見址	中世・近世	城跡跡
明科	5-530	築ノ城巻址	中世・近世	城跡跡
明科	5-531	横谷城(高松藩御城)址	中世・近世	城跡跡
明科	5-532	大跡物見址	中世・近世	城跡跡
明科	5-533	梨子塚物見址	中世・近世	城跡跡
明科	5-534	小舟殿屋敷跡	中世・近世	城跡跡
明科	5-535	川はさま巻址	中世・近世	城跡跡
明科	5-537	瀬古墳群6号墳	古墳	古墳
明科	5-538	瀬古墳群7号墳	古墳	古墳
明科	5-539	瀬古墳群8号墳	古墳	古墳
松川村	MK-37	下谷地遺跡	縄文・弥生	散布地
松川村	MK-75	西原遺跡	縄文	散布地
松川村	MK-76	漆桶跡古遺跡	縄文	散布地
松川村	MK-77	藤野塚反畑遺跡	縄文	散布地
松川村	MK-78	有明山社大門北遺跡	縄文	散布地
松川村	MK-79	大門橋南遺跡	縄文	散布地
松川村	MK-80	二ツ家神戶遺跡	縄文	散布地
松川村	MK-81	間海道遺跡	平安	散布地
松川村	MK-82	赤岩遺跡	縄文	散布地
松川村	MK-83	神戸原遺跡	縄文	散布地
松川村	MK-84	七城野遺跡	縄文	散布地
松川村	MK-85	新父が塚古墳	古墳	古墳
松川村	MK-86	稲沢オオノ塚古墳	古墳	古墳
松川村	MK-87	千巻の雲古墳	古墳	古墳
松川村	MK-88	千巻遺跡	縄文	散布地
松川村	MK-89	南海渡西原遺跡	縄文	散布地
松川村	MK-90	西海渡遺跡	弥生	散布地

地域	番号	遺跡名	主な時代	種別
池田町	ID-55	若松城跡	中世	城跡跡
池田町	ID-56	宇左家遺跡	縄文	散布地
池田町	ID-57	相澤寺南遺跡	古墳	遺跡
池田町	ID-58	相澤寺南遺跡	弥生	散布地
池田町	ID-59	相澤寺平道遺跡	縄文	散布地
池田町	ID-96	塚原遺跡	古墳・平安	散布地
池田町	ID-97	若宮遺跡	縄文	散布地
池田町	ID-98	宮下遺跡	縄文	散布地
池田町	ID-99	宮下古墳	古墳	古墳
池田町	ID-100	石矢塚古墳	古墳	古墳
池田町	ID-101	大林遺跡	古墳	散布地
池田町	ID-102	滝沢跡跡	中世	城跡跡
池田町	ID-103	小丸遺跡	中世	散布地
池田町	ID-104	塚の原古墳	古墳	古墳
池田町	ID-105	籠跡塚古墳	古墳	古墳
池田町	ID-106	赤田見尾跡跡	中世	城跡跡
池田町	ID-107	塚田古墳	古墳	古墳
池田町	ID-108	三軒堂遺跡	縄文	散布地
池田町	ID-109	川合神社元宮遺跡	不明	散布地
池田町	ID-110	万海原遺跡	古墳	散布地
池田町	ID-111	幅上遺跡	縄文	散布地
松本市	MM-14	松本城	中世	城跡跡
松本市	MM-90	平瀬跡跡	不明	城跡跡
松本市	MM-91	法住寺跡	不明	社寺跡
松本市	MM-92	山田遺跡	不明	散布地
松本市	MM-94	山田遺跡	不明	散布地
松本市	MM-95	矢作遺跡	不明	散布地
松本市	MM-100	上岡遺跡	不明	散布地
松本市	MM-106	塚倉遺跡	縄文	散布地
松本市	MM-107	塚山古墳	古墳	古墳
松本市	MM-108	神沢遺跡	不明	散布地
松本市	MM-109	下岡田遺跡	不明	散布地
松本市	MM-110	不明	古墳	古墳
松本市	MM-112	次部丸古墳	古墳	古墳
松本市	MM-113	板板古墳群	古墳	古墳群
松本市	MM-114	松岡七日市場遺跡	不明	散布地
松本市	MM-115	西原遺跡	不明	散布地
松本市	MM-116	水汲古墳群	古墳	古墳群
松本市	MM-153	為内遺跡群	平安	散布地
松本市	MM-159	霞光寺遺跡	不明	社寺跡
松本市	MM-160	本村二ツ塚遺跡	不明	散布地
松本市	MM-161	城山遺跡	不明	散布地
松本市	MM-162	輪ノ輪遺跡	奈良・平安	散布地
松本市	MM-163	籠屋遺跡	不明	散布地
松本市	MM-164	沢村北遺跡	不明	散布地
松本市	MM-165	籠屋塚古墳	古墳	古墳
松本市	MM-166	沢村遺跡	不明	散布地
松本市	MM-167	田町遺跡	不明	散布地

凡例

- 第4～9回・第1表は、安曇野市全域と、松川村・池田町・松本市の一部における遺跡分布図・一覧表である。
- 第4回は、当該地域における遺跡分布を過時的に示したものである。第5～9回は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世・近世の各時代別に示した。
- 第4回に複合遺跡を示す場合は、古墳時代から古代への展開過程を明らかにする本調査の研究目的に基づいて、古墳時代、古代、中世、弥生時代、縄文時代の順に優先した。
- 第4～9回・第1表は、『安曇野市縄文文化財包蔵地図』（安曇野市教育委員会編2006）および『全国遺跡地図 長野県』（文化庁文化財保護課編1983）から引用した。
- 遺跡番号は、安曇野市（豊科・穂高・三郷・聖金・明科地域）については、『安曇野市縄文文化財包蔵地図』の表記に準じた。松川村・池田町・松本市については、『全国遺跡地図』における遺跡番号を使用した。松川村・池田町は、松本市旧市域の代わりとして、MK（松川村）、ID（池田町）、MM（松本市）を付した。
- 遺跡名・時代・種別・位置は、基本的に引用元に拠っている。

なお、『安曇野市縄文文化財包蔵地図』の発行以後の発掘調査等で明らかになった加見を追加した箇所もある。

3 穂高古墳群および潮古墳群の概要

(1) 穂高古墳群の概要

本学では、穂高古墳群を以下のように定義・分類している⁴¹⁾。

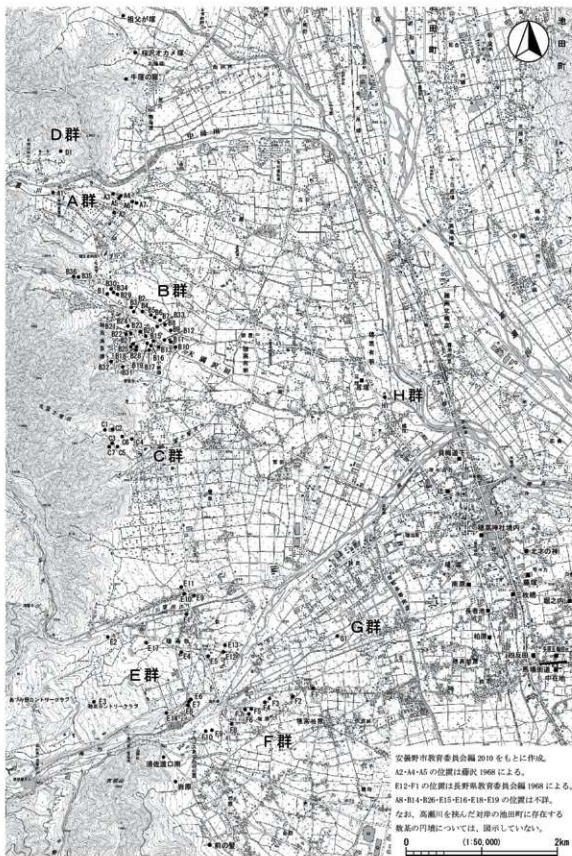
1. 「穂高古墳群」は『信濃史料』において分類されたA群～D群⁴¹⁾、『国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』において分類されたE群～G群⁴²⁾、『穂高町の古墳』において分類されたH群⁴³⁾、『長野県史』によって旧穂高町地域に分布する古墳群を構成する一部とされた松川村所在古墳⁴⁴⁾によって構成される。
2. 従来古墳群全体を示す名称として多く用いられてきた「有明古墳群」は、A群～D群までを指す場合と旧穂高町の古墳全体を示す場合の2通りの語義をもち、なおかつ松川村所在古墳を含める場合と含めない場合があることから、これを用いず「穂高古墳群」の名称に統一する。
3. 単独墳については、現在までの研究史上の慣習やG1号墳(上原古墳)のように未知の古墳が周囲に存在している(していた)可能性⁴⁵⁾を考慮して古墳1基のみで構成されていても「群」とする。
4. A群～H群は、穂高古墳群を構成するそれぞれ独立した支群とし、いくつかの支群の総称として習慣上・便宜上使用してきた「有明古墳群」・「西穂高(牧・塚原)古墳群」などの名称は使用しない。
5. 各支群を構成する古墳の総数は『信濃史料』以降「所属支群を示すアルファベット+通し番号」の表し方で文献上に確認できたものを数え上げた。また、穂高古墳群全体を構成する古墳の総数は、各支群の合計に加え、以前に文献上で存在が確認されているもの(例：孤塚第4・5号古墳)を考慮して「86基以上」とする。

以下、上述の諸文献や各報告書をもとにして、支群ごとの概要と、主な事例について紹介しておく(第6～12図・第2表)。

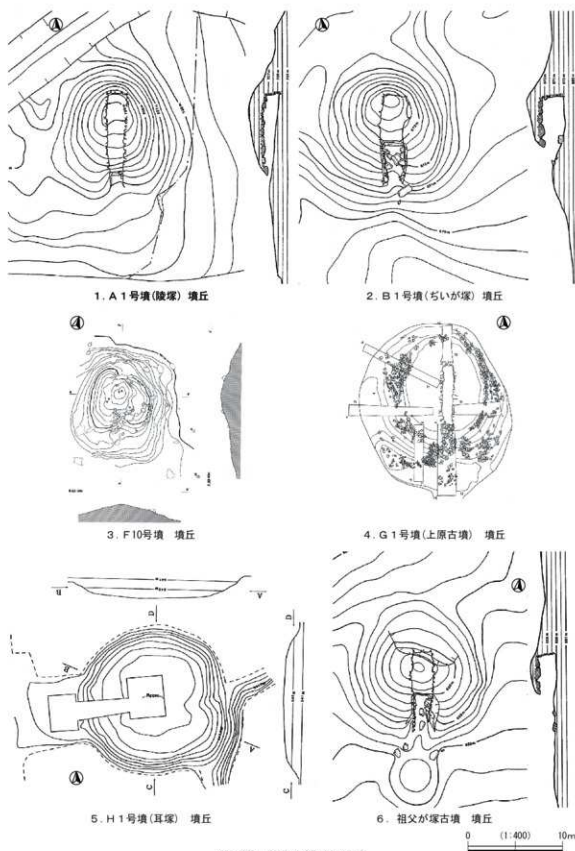
A 群 宮城地区に位置し、油川左岸に沿って分布している。昭和39年(1964)の穂高町教育委員会による悉皆調査では、A群中に8基が存在していたが、そのうち4基が湮滅している。現存する4基のうち、もっとも標高が高い位置にA1号墳があり、残りの3基は800mから1100mほど離れた場所にある。

A1号墳(陵塚)は、墳丘・石室ともに原形に近い形で残っている(第7図1)。石室は、無袖の横穴式石室であり、天井石が12石ある(第8図1)。石材は、花崗岩が用いられている。土師器、須恵器(甕・罎・杯・提瓶)、武器(直刀)、馬具が出土したといわれているもの、所在が不明である。昭和57年(1982)に、筑波大学によって墳丘・石室の実測調査がおこなわれたが、出土遺物が現存していないため、時期を確定することは困難であった。しかし、同じく狭長な無袖の横穴式石室を有するG1古墳(上原古墳)の出土遺物を参考に、6世紀後半を上限とする古墳と想定された⁴⁶⁾。

A6号墳(犬養塚)は、穂高古墳群中では規模の大きなものである。石室は、東壁のすべてと西壁の一部および奥壁が残っているが、天井石を欠く⁴⁷⁾。須恵器(杯・杯蓋・平瓶・横瓶)、武器(直刀・鈎・鉄鏃)、馬具(雲珠・杏葉・轡・鐙・鈎具)、装身具(耳環・勾玉・管玉・切子玉・ガラス小玉)といった多量

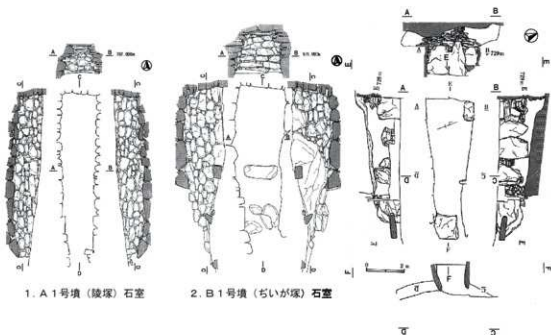


第6図 穂高古墳群と周辺の古墳時代遺跡



第7図 穂高古墳群の墳丘

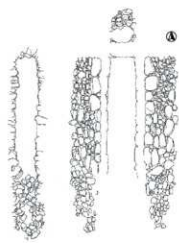
(1・2・6:45頁註49)岩崎・松尾・松村1983, 3:45頁註43[報告2009]、4:46頁註78)安曇野市教育委員会編2015, 5:44頁註20)複製1991)



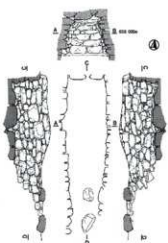
1. A 1号墳 (駿塚) 石室

2. B 1号墳 (ぢいが塚) 石室

3. D 1号墳 (鏡石鬼窟) 石室



4. G 1号墳 (上原古墳) 石室



5. 祖父が塚古墳石室



第8図 穂高古墳群の石室

(1・2・5 : 45頁註49) 岩崎・松尾・松村1983, 3 : 44頁註20) 榎原1991, 4 : 46頁註78) 安曇野市教育委員会編2015)

の副葬品が、有明神社の社宝となっている(第9図1)。昭和57年(1982)に筑波大学によって遺物の実測調査がおこなわれ、須恵器の型式から6世紀後半のものと想定された⁵¹⁾。A8号墳は、墳丘を失っており、内部主体も不明である。付近から、土師器、須恵器(壺・甌・高杯・提瓶)、馬具(鈹具)、装身具(耳環・水晶製切子玉)が採集された⁵²⁾。

B 群 松尾・四ッ堀・小岩岳地区に位置し、天満沢川兩岸に沿って36基が分布している。

B1号墳は、ちがいが塚とも呼ばれ、B群中でも規模が大きい古墳であり、墳丘は、半壊しているものの、石室がほぼ完全に残っている(第7図2)。無袖の横穴式石室であり、天井石6石のうち1石が石室内に落ち込んでいる(第8図2)。右壁に巨大な自然石を用いていることが特徴である。昭和57年(1982)に筑波大学によって墳丘・石室が測量調査されたが、出土遺物が不明なため、時期を確定することは困難であった。そのため、石室の形態・構造が類似する松川村祖父が塚古墳から出土した資料の年代観から、7世紀前半に比定された⁵³⁾。

B5号墳(金堀塚)は、東壁のみが残っている。石室の2箇所に焚火の跡がみられた⁵⁴⁾。無袖の横穴式石室で7世紀前半の築造と思われる⁵⁵⁾。大正7年(1918)に、南安曇教育会によって発掘調査され⁵⁶⁾、人骨3体、須恵器(長頸瓶・提瓶)、武器(直刀・鉄鏃)、馬具(轡・鈹具)、装身具(耳環・勾玉・管玉・小玉)、茶碗のほか多数の遺物が出土した⁵⁷⁾(第9図2)。

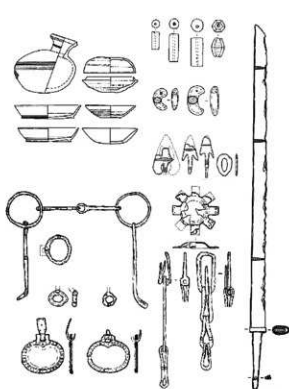
B23号墳(祝塚)は、墳丘が半壊し、わずかに残る石室も土が流入しており詳細不明である⁵⁸⁾。祝塚のある地籍には、ほかに7基の古墳があったとされ、うち2基から出土した土師器(甌・杯)、須恵器(壺・高杯・提瓶)、武器(直刀)、馬具(金鍍金菱形留金具)、装身具(耳環・切子玉・勾玉・管玉)の一部が有明神社で保管されている⁵⁹⁾(第9図3)。これらの遺物については、昭和57年(1982)に、筑波大学によって遺物の実測調査がおこなわれ、須恵器の年代から6世紀後半代の所産とされた⁶⁰⁾。

C 群 富士尾地区に位置し、富士尾沢上流付近の兩岸に7基が分布している。大型石室をもつ古墳はなく、小・中型の石室をもつ古墳で構成され、確認されている石室はすべて横穴式石室である⁶¹⁾。

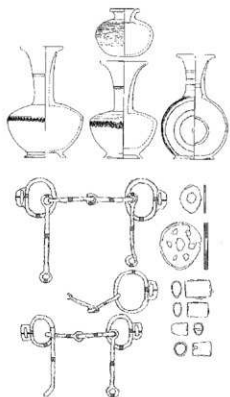
D 群 宮城地区の中房川左岸に位置する、八面大王の居住窟伝承で著名な「魏石鬼窟」⁶²⁾にあたるD1号墳が単独で存在する。

D1号墳は、墳丘をもつ古墳ではなく、自然石である巨石を天井石に見立て、その下部を横穴状に利用した埋葬施設である(第8図3)。巨大な花崗岩の一枚岩を天井石とし、板石と角礫を用いて側壁と奥壁が構築された⁶³⁾。珍しい事例であるが、あたかも片楯の横穴式石室のような姿をみせており、規模や副葬品などに関しては、徳高古墳群における他の古墳との違いはみられない⁶⁴⁾。大正10年(1921)に踏査した鳥居龍藏は、巨石の下に埋葬施設をもつことから「ドルメン式古墳」と呼んだ⁶⁵⁾。鳥居氏の踏査以後も調査がおこなわれ、大正11年(1922)に宮坂光次による実測調査⁶⁶⁾、昭和61年(1986)に三木弘による発掘調査がおこなわれた⁶⁷⁾。副葬品は、須恵器破片(甌・杯・杯蓋・提瓶・平瓶)、武器(鉄鏃)、馬具(鉄地金銅張り飾金具・留金具破片・半球形飾金具・金具破片)、装身具(耳環)が出土した⁶⁸⁾(第9図4)。このうち、須恵器の年代をもとにして、三木は築造年代を6世紀後半に位置づけている⁶⁹⁾。

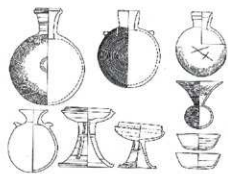
古墳時代以降の遺物としては陶磁器、釘、砥石、古銭が出土した。このうち陶磁器の年代は18世紀後半～19世紀中葉の間とみられている。これは天井石正面に彫刻された3体の観音像や天井石上の御堂が江戸時代に作られたという古伝と一致する。石室壁面や天井石には煤が付着し、焼土や灰が堆積土にみ



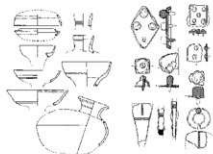
1. A 6号墳 (犬養塚)



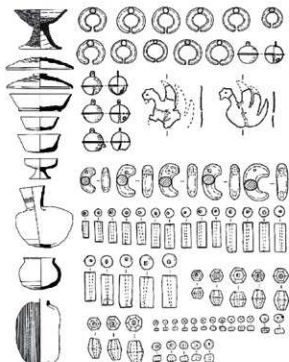
2. B 5号墳 (金堀塚)



3. B23号墳 (祝塚) 付近



4. D 1号墳 (魏石鬼窟)



5. 旧有明村 (東京国立博物館・宮内庁蔵)

土器=1:10 武器・馬具=1:8 装身具=1:4

第9図 穂高古墳群出土の主要遺物(1)(45頁註47)河西・松尾編1983、44頁註20)桐原1991、46頁註87)東京国立博物館編1997)



第10図 穂高古墳群出土の主要遺物(2) (44頁註20) 榎原1991)

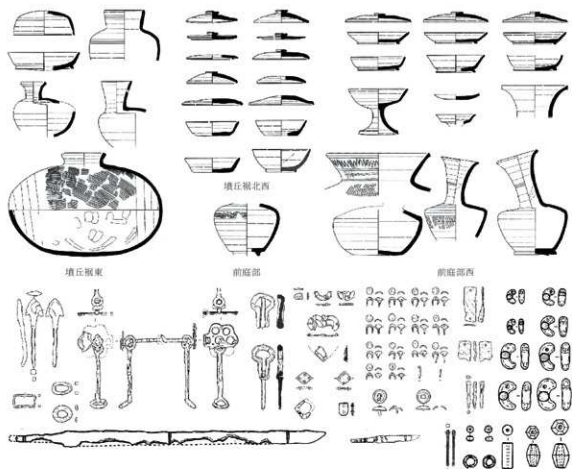
られることから、石室内で断続的に火が焚かれていたことが窺われる。こうした状況から後世にこの古墳は修験の場としても利用されていた可能性も指摘されている⁷⁰⁾。

E 群 烏川と川窪沢川に挟まれている台地の東縁である牧地区に位置し、既に湮滅した古墳も含めて19基が確認されている。

E 6号墳(狐塚3号墳)は、明治44年(1911)に発掘されたE群中最大規模の古墳である。副葬品としては、須恵器(長頸瓶・高杯・杯蓋・平瓶・横瓶)、武器(直刀・鐙・槍身・鉄鏃)、馬具(轡)、装身具(耳環・切子玉・白玉・勾玉・管玉・青銅製銅)が出土し(第10図1)、東京国立博物館・穂高神社・満願寺などに保管されている⁷¹⁾。直刀は、平棟平造りの大刀で、これに倒卵形の鐙1個がともなっていた。須恵器には、6世紀末の平瓶、7世紀前葉から7世紀中葉の長頸壺・フラスコ形長頸瓶、8世紀前葉の平瓶・高盤がみられる⁷²⁾。

E 7号墳(狐塚2号墳)は、昭和26年(1951)に、大場督雄の指導により発掘調査された。武器(直刀・鐙・鉄鏃)、工具(刀子)、装身具(耳環)が出土した⁷³⁾(第10図2)。

F 群 塚原地区に位置し、粕原沢右岸の標高605m～650mの間に10基が列在している。F群は、ほとんどが破壊されており、墳丘・内部主体・副葬品の詳細を知ることはできないが、10基の墳丘規模は大正10年(1921)の調査により判明しており、それによると大小5基ずつの2グループに分けられる⁷⁴⁾。



G1古墳(上原古墳)

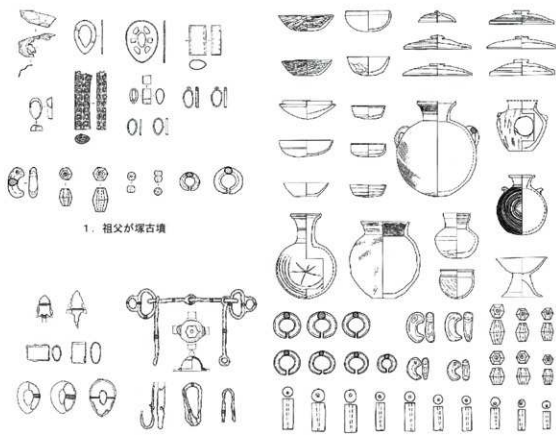
土器=1:10 武器・馬具・石製品=1:8 装身具=1:4

第11図 穂高古墳群出土の主要遺物(3) (44頁註20) 桐原1991、46頁註78) 安曇野市教育委員会編2015)

F1号墳(一本杉古墳)は、F群中最東端に位置する。無袖の横穴式石室であり、天井石はない。昭和50年(1975)に穂高町教育委員会による発掘調査がおこなわれた。須恵器(高台付杯)の破片1点が出土したほか、床面中央部からは、小豆粒大の骨片が掌一杯ほど出土した⁷⁵⁾。

F9号墳は、F10号墳(第7図3)とあわせて二つ塚と呼ばれ、平成21年(2009)より國學院大學考古学研究室が調査を実施している。墳丘の壊変が著しく、天井石を欠くものの、遺存状態の良い無袖の横穴式石室をもつ。土師器(椀)、須恵器(蓋杯・子持壺・長頸壺・フラスコ形長頸瓶・甕ほか)、武器(直刀・両頭金具・鉄鏃)、馬具(轡・鞍金具・鍔紐・鉸具・飾金具・鍔吊金具)、装身具(勾玉・管玉・切子玉・ガラス小玉ほか)などのほか、ウマの骨や、銭貨・釘・瓦も出土した⁷⁶⁾。かつては、諏訪社の古い祠が祀られていた。

G群 上原地区の水田中に埋没した1基が確認されており、今のところG群はこの1基のみをさす。平成11年(1999)の景常担い手育成基盤整備事業にともなう調査の際に、未発見の古墳が埋没していないか検討されたが、新たな古墳は発見されていない⁷⁷⁾。しかし、上原古墳の東にあたる小字「塚田」にて大石



1. 祖父が塚古墳

2. 出土地不明(有明山神社蔵ほか)

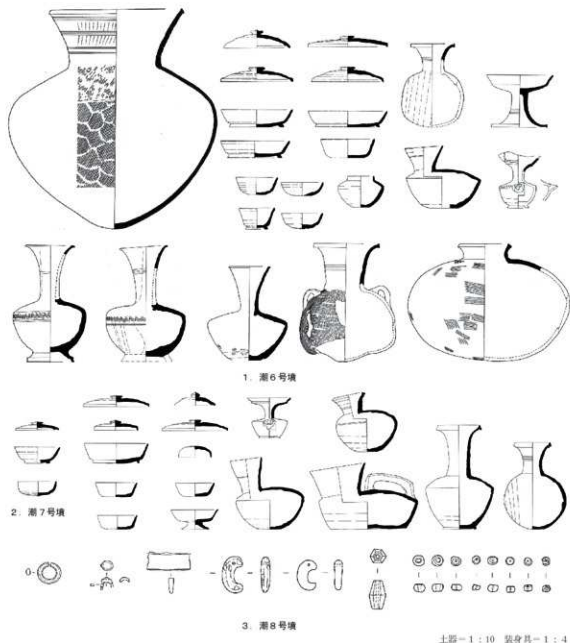
土器=1:10 武器・馬具=1:8 装身具=1:4

第12図 穂高古墳群出土の主要遺物(4) (45頁註47)河西・松尾1983, 44頁註20)棚原1991)

数個が掘り出されたという話や、昭和20年代に今井沢右岸で石積みが掘り出されたとの話も残されている⁷⁰⁾。

G1号墳(上原古墳)は、7世紀前半に築造されたとみられる円墳で、無袖の横穴式石室をもつ(第7図4・第8図4)。昭和5年(1930)に猿田文紀、昭和7年(1932)に今井眞樹が調査をおこなった⁷⁰⁾。その後、昭和57年(1982)に筑波大学が出土遺物の実測調査をおこない⁸⁰⁾、武器(直刀)、馬具(杏葉・轡)、工具(刀子)、装身具(耳環・勾玉・管玉・切子玉・ガラス小玉)を図化した。また、平成14~16年(2002~2004)に安曇野市教育委員会が発掘調査を実施しており、既往の出土資料も改めて再報告された。同調査では、須恵器(広口壺・長頸壺・短頸壺・甕・甌・有台杯・高杯・杯蓋・平瓶・横瓶)、武器(鉄鏃)、馬具(鉸具・留金具)が出土した(第11図)。出土須恵器は、主に尾北産・美濃須衛産とみられるが、歪んだものがほとんどであった。多くが墳丘周辺から故意に細かく割られた状態で出土しており、副葬品ではなく、墓前祭祀に供されたものと考えられる⁸¹⁾。

H群 耳塚地区に位置し、穂高川西側の最低位段丘の先端に築かれたH1号墳1基のみをさす。耳塚とも呼ばれるH1号墳は、昭和61年(1986)に墳丘測量されたが、墳頂部には大塚神社が鎮座しており削



第13図 瀬古墳群出土の主要遺物(46頁註90)明科町教育委員会編2000、44頁註24)明科町教育委員会編2005)

平を受けている(第7図5)。魏石鬼八面大王にまつわる塚や⁸²⁾、耳の神様である大塚様の祠としても知られていたが⁸³⁾、その詳細は不明である。

松川村所在古墳 安曇野市の北側に接する松川村では、穂高古墳群に近い小字鼠穴に、祖父が塚古墳のほか、損壊・湮滅した牛窪の竪古墳・桜沢オカメ塚古墳の存在が知られている⁸⁴⁾。いずれも単独墳であり、ほかにも数基の古墳が存在していた可能性がある。

祖父が塚古墳は、ほぼ完存する無袖の横穴式石室を持ち(第7図6・第8図5)、昭和57年(1982)に筑波大学が墳丘と石室の実測調査をおこなった。副葬品としては、土師器、武器(甲冑・鉾・大刀)、装身

具(玉類)などが出土したと伝えられている。ただし、現存しているものは、宮内庁書陵部に保管されている武器(頭椎大刀)、装身具(耳環・勾玉・切子玉・ガラス小玉)のみである⁸⁵⁾(第12図1)。

その他 旧堀金村内に所在する須砂渡口南古墳・岩原古墳・前の髪古墳・曲尾古墳群・古城下古墳のうち⁸⁶⁾、須砂渡口南古墳・岩原古墳は、F群に近い位置関係にあることから、今後の検討によって徳高古墳群の一部と認められる可能性がある。

その他、旧有明村内の古墳から出土したされる土師器(椀・壺・高杯)、須恵器(壺・高杯・杯蓋・提瓶・平瓶・横瓶)、武器(直刀・鐔・鉄鍔)、工具(刀子)、馬具(轡・鈴)、装身具(耳環・金銅製鳳凰形銅葉・勾玉・管玉・切子玉・白玉)などが、宮内庁や東京国立博物館に保管されている⁸⁷⁾(第9図5、第12図2)。須恵器の年代は、6世紀後半～7世紀前半のものが多い⁸⁸⁾。これらの遺物のうち、鳳凰形銅葉は、奈良県藤原木古墳出土の天冠に表現されている鳥形の装飾に酷似しており注目される⁸⁹⁾。

(和泉・原武)

(2) 潮古墳群の概要

安曇市明科東川手の潮神明宮付近に所在する潮古墳群では、今までに9基の古墳が確認されている。その中で、6・7号墳では平成10年(1998)に、8号墳では平成17年(2005)に発掘調査が実施された⁹⁰⁾。

6号墳は、安曇野市唯一の方墳で周溝をともなうが、後世の擾乱を受けその墳丘の形状は判然としない。石室も保存状態が悪く、遺物などの出土もみられないが、周溝からは7世紀第3四半期および7世紀末～8世紀初頭の2時期にわたる遺物が出土した。主体部からは、武器(鉄鍔・刀子・銀製の刀装具の破片)、武具(鉄金具)、須恵器(杯・杯蓋・平瓶・小型壺)、装身具(ガラス小玉)、人骨が出土している(第13図1)。周溝からは、須恵器(杯・杯蓋・小型壺・高杯・長頸壺・平瓶・甕・横瓶・提瓶・盤・大甕・甕)、ウマの歯、銅鏡が出土している(第13図1)。銅鏡については、保存状態が悪く全体の形状は判然としないが、仏具として捉えられるため、明科廃寺との関係、被葬者と当時の政権との関係を示す遺物であるとされる⁹¹⁾。

7号墳は、石室・周溝ともに残存状況が悪いが、僅かに残った周溝から円墳であると推定されている。出土遺物も少ないが、6号墳と同時期と推定される。主体部からは、武器(鉄鍔・鐔)、武具(鉄金具)、装身具(ガラス小玉・メノウ製勾玉)が出土しており、周溝からは須恵器(杯・杯蓋)が出土している⁹²⁾(第13図2)。

8号墳は、道路拡幅部分の狭小な調査のため古墳の全容は未確認であるが、石室床面に礫が敷き詰められ、玄室・羨道が確認されている。主体部からは、装身具(メノウ製勾玉・金環・水晶製切子玉・濃紺の丸玉・白玉・ガラス小玉)、鉄製品が出土しており、周溝からは7世紀末の須恵器(高杯・長頸壺・平瓶・甕・杯・蓋杯・提瓶)、ウマの歯が出土している⁹³⁾(第13図3)。

このほか、6・7号墳の周辺から7基の墓坑が検出されている。そのうちの2基が古代の墓坑であり、片方からは副葬品としてフラスコ瓶が出土している。ほかは、近世の墓坑であると推測されている。また、同古墳周辺から33軒の住居址も検出されており、4軒が4世紀前半の古墳時代前期に属する住居址であることが判明している⁹⁴⁾。

(大嶋)

註

- 1) 片田正人・磯見博1964「塩尻」『5萬分の1地質図幅説明書』金沢第54号、地質調査所
日本地誌研究所編1972『日本地誌』第11巻(長野県・山梨県・静岡県)、二宮書店
松本盆地団体研究グループ1977「松本盆地の第四期地質－松本盆地の形成過程に関する研究(3)－」『地質学論集』第14号、日本地質学会
日本の地質「中部地方1」編集委員会編1988「中部地方1」日本の地質4、共立出版株式会社
大池千尋1991「位置・地形・地質」『堀金村誌』堀金村誌刊行会
仁科良夫1991「第2章 地形と地質」『穂高町誌』自然編、穂高町誌刊行会
保尊祐之1991「第6章 植物」『穂高町誌』自然編、穂高町誌刊行会
塚原弘昭編2002「地震と防災 糸魚川－静岡構造線」信濃毎日新聞社
原山智・大塚勉・酒井潤一ほか2009「松本地域の地質」地域地質研究報告(5萬分の1地質図幅 金沢(10)第46号)、(独)産業技術総合研究所地質総合調査センター
笹本正治2013『水で結ばれたふるさと』安曇野市
- 2) 前掲註1)仁科1991
- 3) 重野昭茂2003「鳥川扇状地の自然地形と古代開発」『信濃』第55巻第5号、信濃史学会
重野昭茂2007「自然環境による安曇野古代鳥川扇状地の開発」『信濃』第59巻第3号、信濃史学会
- 4) 三郷市教育委員会編1995「東小倉遺跡」三郷村の埋蔵文化財第2集、三郷市教育委員会
安曇野市教育委員会編2012「平成22年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書 東小倉遺跡採集資料整理報告」安曇野市の埋蔵文化財第5集、安曇野市教育委員会
- 5) 豊科町誌編纂委員会編1995『豊科町誌』歴史編・民俗編・水利編、豊科町誌刊行会
- 6) 穂高町教育委員会編2001「穂高町他谷遺跡」穂高町教育委員会
- 7) 堀金村教育委員会編1988「神沢遺跡・田多井古城下遺跡・そり表遺跡」堀金村の埋蔵文化財第1集、堀金村教育委員会
- 8) 明科町教育委員会編1991「はろろく屋敷遺跡－川西地区原営場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－」明科町の埋蔵文化財第3集、明科町教育委員会
長野県埋蔵文化財センター編1993「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11 明科町内2 北村遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第14集、日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 9) 前掲註8)明科町教育委員会編1991
- 10) 安曇野市教育委員会編2016「芝宮南遺跡 穂高南小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」安曇野市の埋蔵文化財第10集、安曇野市教育委員会
- 11) 安曇野市教育委員会編2018「平成28年度安曇野市埋蔵文化財調査報告書」安曇野市の埋蔵文化財第15集、安曇野市教育委員会
- 12) 安曇野市教育委員会編2018「穂高神社境内遺跡1 新穂高文所建設事業に伴う第1次発掘調査報告書」安曇野市の埋蔵文化財第14集、安曇野市教育委員会
- 13) 安曇野市教育委員会編2009「三枚橋・藤塚遺跡 安曇野市穂高交流学習センター建設工事に伴う埋蔵文化財報告書」安曇野市の埋蔵文化財第2集、安曇野市教育委員会
- 14) 三郷市教育委員会編1988「黒沢川右岸遺跡」三郷村の埋蔵文化財第1集、三郷市教育委員会
豊科町教育委員会編1999「町田遺跡 都市対策砂防事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」、豊科町教育委員会
- 15) 前掲註14)豊科町教育委員会編1999
- 16) 前掲註6)穂高町教育委員会編2001
前掲註8)明科町教育委員会編1991
- 17) 前掲註8)明科町教育委員会編1991

- 18) 徳高町教育委員会編1987『徳高町矢原遺跡群(馬場街道遺跡)』徳高町教育委員会
- 19) 前掲註13)安曇野市教育委員会編2009
- 20) 桐原健1991「第二章第三節 古墳時代」『徳高町誌』第2巻歴史編上・民俗編、徳高町誌刊行会
- 21) 堀金村誌編纂委員会編1991「第二編第一章第四節 古代の堀金」『堀金村誌』上巻、堀金村誌刊行会
豊科町誌編纂委員会編1995「第一章第二節四 古墳時代の豊科」『豊科町誌』歴史編、豊科町誌刊行会
- 22) 明科町教育委員会編1995「上生野遺跡」明科町の埋蔵文化財第5集、明科町教育委員会
- 23) 明科町教育委員会編1994「長野県東筑摩郡明科町遺跡詳細分布調査報告書 明科町の遺跡」明科町の埋蔵文化財第4集、明科町教育委員会
明科町教育委員会編2000「明科廃寺址」明科町の埋蔵文化財第7集、明科町教育委員会
- 24) 明科町教育委員会編2005「清神明宮前遺跡Ⅱ-町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書-」明科町の埋蔵文化財第13集、明科町教育委員会
- 25) 前掲註23)明科町教育委員会編2000
- 26) 桐原健2002「明科廃寺が提起する問題」『信濃』第54巻第12号、信濃史学会
- 27) 前掲註8)長野県埋蔵文化財センター編1993
前掲註23)明科町教育委員会編2000
前掲註24)明科町教育委員会編2005
- 28) 前掲註23)明科町教育委員会編2000「明科廃寺址」明科町の埋蔵文化財第7集、明科町教育委員会
安曇野市教育委員会編2017「平成27年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書」安曇野市の埋蔵文化財第11集、安曇野市教育委員会
- 29) 明科町教育委員会編1998「松坂古宮址 主要地方道徳高明科線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告」明科町の埋蔵文化財第5集、明科町教育委員会
- 30) 山路直光2004「甲斐における瓦葺き寺院の出現-天狗沢窟出土礎瓦の祖型を追って-」『開発と神仏のかかわり』 帝京大学山梨文化財研究所・古代考古学フォーラム実行委員会
- 31) 長野県埋蔵文化財センター編2005『安曇野農業水利事業あづみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書-三郷村内-三角原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 76、農林水産省関東農政局安曇野農業水利事業所・(財)長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター
- 32) 前掲註18)徳高町教育委員会編1987
- 33) 前掲註7)堀金村教育委員会編1988
- 34) 前掲註31)長野県埋蔵文化財センター編2005
- 35) 前掲註14)豊科町教育委員会編1999
- 36) 安曇野市教育委員会編2014「平成24年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書 明科遺跡群群古墳遺跡(第4次)」安曇野市の埋蔵文化財第7集、安曇野市教育委員会
- 37) 明科町教育委員会編2002「栄町遺跡-「子どもと大人の交流学習施設」建設に伴う緊急発掘調査報告書-」明科町の埋蔵文化財第6集、明科町教育委員会
- 38) 前掲註22)明科町教育委員会編1995
明科町教育委員会編2001「はろろく屋敷遺跡Ⅳ-個人住宅建築工事に伴う第4次緊急発掘調査報告書-」明科町の埋蔵文化財第11集、明科町教育委員会
前掲註24)明科町教育委員会編2005
- 39) 安曇野市教育委員会編2013「平成23年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書 明科遺跡群古墳敷(第1次)明科遺跡群栄町遺跡(第3次)」安曇野市の埋蔵文化財第6集、安曇野市教育委員会
- 40) 窯跡研究会編2010「古代窯業の基礎研究:須恵器窯の技術と系譜」真臨社
- 41) 豊科町教育委員会・豊科町東山道路調査会編1999『筑摩東山上ノ山・高瀬平窯跡群発掘調査報告書』豊科町教育委員会

- 豊科町郷土博物館1999『土器づくりのムラへの招待 -上ノ山窯跡群・葛瀬沢窯跡群の発掘調査-』豊科町郷土博物館
鳥羽英敏2013『信濃における須恵器生産の動向』『長野県考古学会誌』第145・146号、長野県考古学会
- 42) 豊科町誌編纂委員会編1995『第一章第四節 中・近世』『豊科町誌』歴史編、豊科町誌刊行会
43) 『報告2009』
44) 信濃史料刊行会編1956『信濃史料』第1巻上、信濃史料刊行会
45) 長野県教育委員会編1968『昭和42年度国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』長野県教育委員会
46) 穂高町教育委員会編1970『穂高町の古墳』柳沢書苑
47) 河西清光・松尾昌彦1983『穂高古墳群』『長野県史』考古資料編(3)、長野県史刊行会
48) 重野昭茂・山下泰永2001『第3章第2節3 上原古墳群および上原古墳の調査』『一本松・神の本・宗徳寺・南原遺跡 穂高沢水系による開発跡、上原古墳』穂高町教育委員会
49) 岩崎卓也・松尾昌彦・松村公仁1983『有明古墳群の再調査』『信濃』第35巻第11号、信濃史学会
上記文献では、G1号墳について、出土した甕や装身具からその築造年代を6世紀後半と推定し、「狭長」な石室をもつ点で類似するA1号墳も同年代とみていた。しかし現在では、G1号墳については、甕の年代観の修正を受けて、7世紀前半の築造とみられている(後掲註78)安曇野市教育委員会編2015)。つまり、岩崎らの論理にしたがうならば、A1号墳の年代も同様に引き下げる必要がある。
- 50) 前掲註47)河西・松尾1983
51) 前掲註49)岩崎・松尾・松村1983
52) 藤沢宗平1968『第四章 古墳文化とそれ以降の文化』『南安曇郡誌』第2巻上、南安曇郡誌改訂編纂会
53) 前掲註49)岩崎・松尾・松村1983
54) 前掲註47)河西・松尾1983
55) 前掲註20)桐原1991
56) 太田伯一郎1923『第三章第三節 遺跡(古墳)』『南安曇郡誌』(旧版)、南安曇郡教育會
57) 前掲註20)桐原1991
58) 前掲註46)穂高町教育委員会編1970
59) 前掲註20)桐原1991
60) 前掲註49)岩崎・松尾・松村1983
61) 前掲註49)岩崎・松尾・松村1983
62) 魏城城窟・魏石岩窟とも表記される。
63) 前掲註20)桐原1991
64) 三木弘・寺島俊郎・西山克己1987『長野県安曇野郡穂高町所在魏石鬼窟古墳について』『信濃』第39巻第5号、信濃史学会
65) 鳥居龍蔵1925『豊科町より』『有史以前の跡を訪ねて』藤山閣
66) 宮坂光次1922『信州南安曇郡有明村ドルメン類似の古墳に就いて』『人類学雑誌』第37巻第9号、東京人類學會
67) 前掲註64)三木・寺島・西山1987
68) 前掲註20)桐原1991
三木弘2006『有明古墳群の再検討(2) -魏城城古墳の再考を通じて-』『長野県考古学会誌』118号、長野県考古学会
69) 三木弘2011『古墳社会と地域経営』学生社
70) 三木弘1990『魏石鬼窟古墳を利用した修験道』『穂高町郷土資料館』第12号、穂高町郷土資料館
71) 前掲註20)桐原1991
72) 三木弘1991『有明古墳群の再検討(1)』『信濃』第43巻第12号、信濃史学会
73) 前掲註52)藤沢1968
大場磐雄1951『南安曇記 六月二十日(水)』『栗石雑筆』巻33(大場磐雄2016『記録-考古学史 栗石雑筆(補)』博古研究会に所収)

- 74) 前掲註56) 太田1923
- 75) 中島豊晴1976「穂高町塚原F1号墳調査概報」〔長野県考古学会誌〕第25号、長野県考古学会
- 76) 『報告2009』～『報告2016・17』、および本書
- 77) 前掲註48) 重野・山下2001
- 78) 安曇野市教育委員会編2015「穂高古墳群G1号墳(上原古墳)第3次・第4次発掘調査」安曇野市の埋蔵文化財第8集、安曇野市教育委員会
- 79) 猿田文紀1931「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」〔信濃考古学会誌〕第2年第5・6編、信濃考古学会
猿田文紀1933「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」〔史跡名勝天然記念物調査報告〕第14輯、長野県・長野県教育委員会
今井眞樹1933「穂高町上原の壱式石室塚古墳」〔史跡名勝天然記念物調査報告書〕第14輯、長野県・長野県教育委員会
- 80) 前掲註49) 岩崎・松尾・松村1983
- 81) 前掲註78) 安曇野市教育委員会編2015
- 82) 前掲註56) 太田1923
- 83) 前掲註20) 桐原1991
- 84) 春日賢一1921「北安曇郡に於ける古墳」〔信濃教育〕第417号、信濃教育會事務所
- 85) 前掲註49) 岩崎・松尾・松村1983
- 86) 安曇野市教育委員会編2010「安曇野市埋蔵文化財包蔵地図」安曇野市教育委員会
- 87) 東京国立博物館編1997「須忠器集成Ⅱ(東日本篇)」東京国立博物館、前掲註49) 岩崎・松尾・松村1983
前掲註47) 河西・松尾1983
- 88) 前掲註20) 桐原1991
- 89) 穂高町・穂高町教育委員会編1989「穂高町の古墳群とその人々」穂高町・穂高町教育委員会
- 90) 明科町教育委員会編2000「瀬神明宮前遺跡-明科町総合福祉センター建設に伴う緊急発掘調査報告書-」明科町の埋蔵文化財第8集、明科町教育委員会
前掲註24) 明科町教育委員会編2005
- 91) 前掲註90) 明科町教育委員会編2000
- 92) 前掲註24) 明科町教育委員会編2005
- 93) 前掲註90) 明科町教育委員会編2000
- 94) 前掲註90) 明科町教育委員会編2000

第2表 穂高古墳群一覧

古墳名 (名称)	地籍	墳丘		横穴式石室			出土遺物	備考	
		径(m)	高(m)	開口方位	長(m)	幅(m)			高(m)
A 1号墳 (横塚)	安曇野市穂高有明211	(長)16.00 (幅)14.00	2.10		8.14	(奥)1.80	(奥)1.22	土師器・須恵器(鏡・甕・壺・杯)・武器(直刀)・馬具	定存
A 2号墳	安曇野市穂高有明990付宮			S30° E	4.00(奥)			須恵器	南蔵
A 3号墳	安曇野市穂高有明2345-29	7.00(覆定)			4.00(奥)	1.00			
A 4号墳	安曇野市穂高有明2345	(長)10.80 (幅)7.80	1.20						南蔵
A 5号墳	安曇野市穂高有明2345	(長)6.60	0.60						南蔵
A 6号墳 (大甕塚)	安曇野市穂高有明2348-2	(長)16.00 (幅)11.00	2.70	S30° W	7.20	1.40	(奥)1.10	須恵器(鏡・甕・壺・杯付杯・杯)・武器(鉄鏃・直刀・箭)・馬具(笠巻土・高巻・髀・股・股付)・装身具(耳環・勾玉・管玉・切子玉・ガラス小玉)	
A 7号墳 (高塚)	安曇野市穂高有明2348	10.00-15.00	1.20		8.30	1.50	1.10		
A 8号墳	安曇野市穂高有明211							土師器・須恵器(鏡・甕・壺・高杯)・馬具(股具)・装身具(耳環・切子玉)	南蔵
B 1号墳 (55号塚)	安曇野市穂高有明2179-口	15.00	2.50	S50° W	9.20	[上]0.85 [下]2.50	1.95		定存
B 2号墳	安曇野市穂高有明2188-2	10.00	2.10						
B 3号墳 (連塚)	安曇野市穂高有明3716	15.00	2.50	S22° E	6.40	1.70	0.90		
B 4号墳	安曇野市穂高有明2189-1	15.30	2.70	S12° W	10.20	1.70	2.20		
B 5号墳 (金甕塚)	安曇野市穂高有明2190	(長)15.00 (幅)12.00			8.60	1.40	1.50	須恵器(短蓋函・長蓋函・フラスコ形具(鏡・武器)鉄鏃・直刀)・馬具(股具)・装身具(耳環・勾玉・管玉・小玉)・茶碗・人骨	
B 6号墳	安曇野市穂高有明2190	12.50		S20° E	7.55	1.30-1.40	0.80		
B 7号墳	安曇野市穂高有明2190	8.40		S30° E	5.36(覆定)	1.40	0.80		
B 8号墳	安曇野市穂高有明2191-5	8.30			5.10	1.40	0.80		
B 9号墳	安曇野市穂高有明2191-5	9.62		S30° E	5.95	(南)1.80 (北)1.30	0.90		
B 10号墳	安曇野市穂高有明2216-1	(長)18.00 (幅)14.80	1.80	S10° E	9.00	2.40	1.45		
B 11号墳	安曇野市穂高有明2215-口			S20° E	約9.00	1.80			
B 12号墳	安曇野市穂高有明2215-口	8.00(覆定)	1.50(覆定)						
B 13号墳	安曇野市穂高有明2186-3	12.00	1.70		8.50	(南)1.70 (北)1.10	1.20		定存
B 14号墳	安曇野市穂高有明2186内	11.00	1.50		7.60	1.80	0.80		
B 15号墳	安曇野市穂高有明2186-4				7.00	1.30			
B 16号墳	安曇野市穂高有明2186-2			S20° E	7.50	1.30	1.00		
B 17号墳	安曇野市穂高有明2186-2				3.50	1.50			南蔵
B 18号墳	安曇野市穂高有明			S10° E	5.00	1.50			
B 19号墳	安曇野市穂高有明2186-2				5.00	1.50			
B 20号墳	安曇野市穂高有明2186-2				4.00				南蔵
B 21号墳	安曇野市穂高有明2186内								
B 22号墳	安曇野市穂高有明2186内								
B 23号墳 (鞍塚)	安曇野市穂高有明2186-2	13.80	1.80		4.00	1.80		付宮の古墳から、土師器(鏡・杯)・須恵器(鏡・甕・高杯)・武器(直刀)・馬具(笠巻留金具)・装身具(耳環・勾玉・管玉・切子玉)が出土したとされる	
B 24号墳	安曇野市穂高有明2186-2				5.50				
B 25号墳	安曇野市穂高有明2186-2			S30° E	6.50	1.30			
B 26号墳	安曇野市穂高有明2186内	6.40	1.50						
B 27号墳	安曇野市穂高有明2186-2				7.00	2.00			
B 28号墳	安曇野市穂高有明2186-2				4.80				
B 29号墳	安曇野市穂高有明2176	14.30			8.50	1.30			
B 30号墳	安曇野市穂高有明2319				約4.50	1.25			
B 31号墳	安曇野市穂高有明2248-1				6.00	1.10	0.60		
B 32号墳	安曇野市穂高有明3436				6.00	1.50			
B 33号墳	安曇野市穂高有明2188-2	約10.00							
B 34号墳	安曇野市穂高有明2319				約5.00	(奥)1.30 (中)2.10			
B 35号墳	安曇野市穂高有明								
B 36号墳	安曇野市穂高有明								
C 1号墳	安曇野市穂高有明3629-5	(長)18.50 (幅)11.70	2.00	S10° E	7.20	1.45	1.10		
C 2号墳	安曇野市穂高有明3729-1	11.00	2.00	S2° W	7.50	1.50	1.60-1.80	須恵器(蓋函)・鉄輪陶器?・武器(鉄鏃・直刀)・工具(刀子)	
C 3号墳	安曇野市穂高有明3629-5	10.50	1.50		7.00	(奥)1.70 (北)1.30			
C 4号墳	安曇野市穂高有明3627-3	(長)14.20 (幅)9.10	1.43		3.30	1.50			
C 5号墳	安曇野市穂高有明3729-2				5.30	(上)覆部1.50 (上中部)1.60 (上後部)1.20			
C 6号墳	安曇野市穂高有明2190							地元でキツカと呼ばれる礫石の可能性もある	
C 7号墳	安曇野市穂高有明							地元でキツカと呼ばれる礫石の可能性もある	
D 1号墳 (横石塚)	安曇野市穂高有明2208	-	-		(長)4.36 (奥)2.00	(奥)2.70	(北)2.50 (北)1.94	須恵器(付蓋・杯蓋・平鏡・甕・壺・高杯)・武器(鉄鏃)・馬具(笠巻留金具・方形鍔金具・土埴形鍔金具・管金具)・装身具(耳環)	
E 1号墳 (西牧塚)	安曇野市穂高牧1888	12.00	0.60						

古墳名 (別称)	地籍	墳丘		竪穴式石室			出土遺物	備考		
		径(m)	高(m)	開口方位	長(m)	幅(m)			高(m)	
E 2号墳 (三郎塚)	安曇野市穂高牧1840	14.00	1.40		200	130	120	土師器、須恵器		
E 3号墳	安曇野市穂高牧2055				500	130			十三層古墳とも	
E 4号墳 (塚原)	安曇野市穂高牧116									
E 5号墳 (上人塚)	安曇野市穂高牧200	12.00	1.30							
E 6号墳 (風見3号)	安曇野市穂高牧14	(長)19.80 (幅)16.50	3.60					須恵器(ワラスコ形長頸瓶・長頸壺・平瓶・横瓶・高杯・蓋・高脚)・武器(鉄鏝・直刀・箭・鞍身)・馬具(轡)・装身具(耳環・勾玉・管玉・切子玉・白玉)		
E 7号墳 (風見2号)	安曇野市穂高牧15	15.00	2.00		500	210		武器(鉄鏝・直刀・箭)・工具(刀子)・装身具(耳環)		
E 8号墳 (坂原1号)	安曇野市穂高牧29	15.00	3.00						完存	
E 9号墳 (前田塚)	安曇野市穂高牧948-6	5.00	1.00						壊滅	
E 10号墳 (寺島塚)	安曇野市穂高牧916	8.50	1.50					武器(直刀)・装身具(勾玉)	壊滅	
E 11号墳 (神谷塚)	安曇野市穂高牧1320-2								壊滅	
E 12号墳 (沼津塚)	安曇野市穂高牧3180							装身具(管玉・切子玉)	壊滅 沼津塚1号墳とも	
E 13号墳 (西原塚)	安曇野市穂高牧317イ				8.50	1.80		須恵器(杯・蓋・平瓶)・武器(直刀)・馬具(轡)	壊滅 沼津塚2号墳とも	
E 14号墳 (藤川1号)	安曇野市穂高牧2193	10.00	1.00						壊滅	
E 15号墳 (藤川2号)	安曇野市穂高牧2194	10.00							壊滅	
E 16号墳 (坂原)	安曇野市穂高牧1652-1								壊滅	
E 17号墳 (ツツシノ)	安曇野市穂高牧1884	6.30	0.60					武器(直刀)	ショウノハ古墳とも	
E 18号墳 (藤川3号)	安曇野市穂高牧2194-1								壊滅	
E 19号墳	安曇野市穂高牧上の原1906	(南北)3.50 (東西)4.50	1.50							
F 1号墳	安曇野市穂高牧原2750-1	かつては 4.00ほど			4.40		(高)1.00 (中)1.00 (幅)1.10	1.25	須恵器(杯)	壊滅 一本杉古墳とも
F 2号墳	安曇野市穂高牧原4290-1	3.00	1.00							
F 3号墳	安曇野市穂高牧原4325									
F 4号墳	安曇野市穂高牧原4300	5.30	2.00(覆家)							
F 5号墳	安曇野市穂高牧原4670	10.00	1.60		(東壁)5.50	1.40				
F 6号墳 (坂本塚)	安曇野市穂高牧原4054				5.95	1.50	1.15			
F 7号墳	安曇野市穂高牧原4000イ	9.00			4.00	1.40				
F 8号墳	安曇野市穂高牧原3650-1									
F 9号墳 (二ノ塚)	安曇野市穂高牧原3054	11.00	1.30	S12° E	7.00	1.30-1.50		調査中		
F 10号墳 (二ノ塚)	安曇野市穂高牧原3054	(長)12.90 (幅)11.00	1.80	S10° E					完存	
G 1号墳 (上原塚)	安曇野市穂高9783	(南北)14.50 (東西)13.00		S0°	9.20	(奥)1.25 (中)1.42 (東)1.60	1.40- 1.75		須恵器(蓋杯・高杯・扁・扁頸壺・長頸壺・平瓶・横瓶)・武器(鉄鏝・直刀)・馬具(轡)・装身具(耳環・勾玉・管玉・切子玉・ガラス小玉)・石製品・灰陶器	
H 1号墳 (大塚塚)	安曇野市穂高有明383イ	16.00	2.00						完存 耳環とも	
穂高998 古墳	北安曇郡松田村南神戸4795	16.00	2.53	S11° W	8.14	(奥壁)1.90 (中央)2.40 (側壁)1.20	(奥壁)1.60	土師器・武器(鏝)・武器(直刀)・轡)・馬具・装身具(耳環・勾玉・小玉)	完存	
牛窪の塚 古墳	北安曇郡松田村牛窪4982								牛窪古墳とも	
坂沢オカ ノ塚古墳	北安曇郡松田村南神戸								壊滅	

備考

本一表は、以下の基準で作成した。

- 古墳名と別称の表記および対応関係については、現行の遺跡地図(安曇野市教育委員会編2010・文化庁文化財保護部編1983)に拠った。
- 地籍(住所)については、西暦は令和2010より安曇野市教育委員会編2015から引用した。
- 遺跡の高さ等は、基本的に測量1992年から引用した。
なお、和泉1991以降に発掘の測量調査がされた古墳については、以下に示す文脈を引用した(F 9号墳・本書、F 10号墳・西暦は令和2010、G 1号墳・安曇野市教育委員会編2015)。
例し、B 1号墳の墳丘頂上については、初野・松尾・松村1983で示された測量値と現状とに照合するため、穂高教育委員会編1970から引用した。また、和泉1991に記載がない古墳のうち、それ以前の文献に記載がある場合は、以下に示す文脈を引用した(B 18・B 26号墳・藤沢1968、C 5号墳・穂高教育委員会編1970)。
- なお、この号墳・E 13号墳・E 19号墳、およびC 6号墳とC 7号墳の備考は、安曇野市教育委員会のご指示による。
- 計測箇所を示す記号は、原典に拠った。
- 各計測箇所の有効数字は、原典によって異なるが、本書においては小数点第2位に統一した。
- 出土遺物については、和泉1991をもとに作成し、D 1号墳・E 6号墳を三木2011で補った。例文古墳は初野・松尾・松村1983を用いた。
- また遺物名等については、現在普及している名称表記(改)の箇所がある。
- 企画調の表紙・馬具は下欄を引いて示した。
- 松田村所有古墳については、文化庁文化財保護部編1983、初野・松尾・松村1983、平野1968を参照した。
- 表中の欄は不明・不詳を示す。

第三章 第10次調査成果

1 F9号墳の現況

(1) 古墳の立地

F9号墳の立地 徳高古墳群F9号墳は、長野県安曇野市徳高柏原3653(北緯36°18'56"・東経137°50'40"・標高665m)に所在する(第1図)。同地は、烏川扇状地の扇頂付近にあたり、西に飛弾山脈、東に松本平を望む緩斜面である。また、約200m北側に流れる烏川右岸の微高地でもあった(第6図)。現在は、国土交通省が所管する国営アルプスあづみの公園堀金徳高地区の敷地内に保存されているが、平成16年(2004)に開園した同公園の造成が始まる前まで、西に隣接するF10号墳との間に旧徳高町の上水道塚原配水池が設けられていた(第15図)。

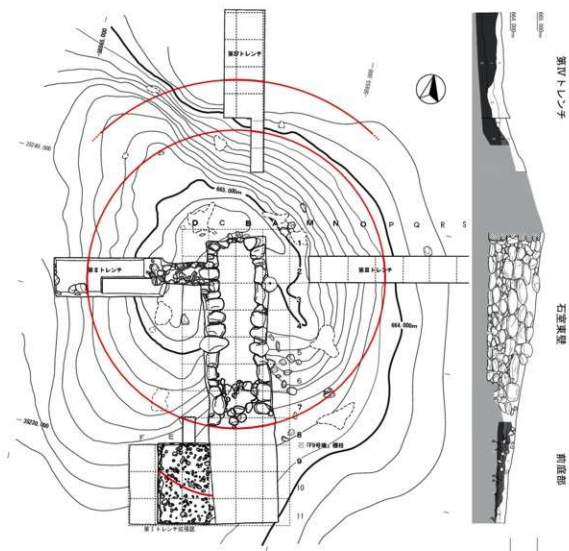
墳丘の現状 第1次調査の墳丘測量では、F9号墳を径17.0m・残存高約1.3mの円墳と判断した¹⁾。第2次調査では、配水池によって西側の墳端部が削平されていた様子を確認することができた²⁾。また、墳丘の北西・南西側における突出は、削平に伴う造成土が寄せ集められたものとみられる。したがって、築造当初における墳丘の形状や規模は、現状と大幅に異なっていた可能性が高い。

石室の現状 墳丘の中央に設けられた横穴式石室は、すべての天井石を欠いている。発掘調査に着手する以前は、残された側壁の最上段が部分的に露出しており、僅かに落ち込んだ石室埋土の様子とあわせて、南側に開口する横穴式石室の存在が示唆されていた。墳丘北東側には、大型の礫が散在しているが、これらも石室の部材であった可能性がある。もともと、地表面の観察から危ぶまれていた石室の遺存状態は、後述する調査成果にみる通り、予想以上に良好であることがあきらかとなった。(関根美季)

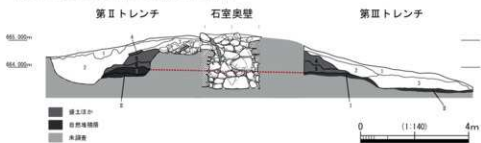
(2) 調査区の設定

これまでの調査で、石室・前庭部に第Iトレンチ、墳丘に第II～第IVトレンチを設定している。第10次調査は、石室内調査の終了を目的として、遺物の取り残しが無いか精査をおこなった。また、第9次調査に引き続き、開口部付近の墳丘構造や周溝の存否確認のため、第9次調査の調査区をさらに西側へ拡張して調査をおこなった。

グリッドの設定 調査区の設定に際しては、石室の中軸線を基準とする1m×1mのグリッドを用いた。ただし、現行のグリッドは、N-14.5°-Wと想定していた石室の主軸方向を、N-12°-Wに修正したことを受け、第4次調査から採用したものである³⁾。当初は、石室内の出土遺物を記録することが主たる目的であったため、石室部分に設けた第Iトレンチ上の東西にA～D区、南北に1～11区のグリッドを設定した(第14図)。ほかの調査区も、現行グリッドの導入以前に調査をおこなった第IIトレンチを除



平面図角座標系（第10次）による坐標系
 【F〇標尺】×座標 -35231.402 Y座標 -56854.742 Z座標 664.794



第14図 第10次調査トレンチ配置図

けば、すべて石室上のグリッド区画に準拠して設定している。

第Ⅰトレンチ 第2次調査において横穴式石室の範囲確認を目的とし、墳丘上に南北100mで設定した調査区である。第9次調査までに、石室東側のB区、石室西側のC区の掘り下げは完了しており、初昇時床面はほぼ検出を終えた。石室内調査の終了後は、砂を充填して石室保護するため、第10次調査では遺物の取り残しなどがないよう、再度床面の精査をおこなうことを目的とした。また、石室外の前庭部についてもトレンチ壁面の精査をした。第Ⅰトレンチ全体の調査面積は26.25㎡である。

第Ⅰトレンチ拡張区 石室開口部付近の墳丘構造や墳丘規模の解明を目的として、第9次調査で設定した調査区である。第10次調査では第9次調査の調査目的に周溝の有無の確認を加えて、第9次調査からD8・F9～F11グリッドへと拡張した。調査面積は約10㎡である。さらに、E9～E11グリッドの西側に東西10m・南北30mの調査区を設定した。調査面積は30㎡である。(関口・田中)

(3) 基本層序

墳丘と石室の基盤層 調査対象地域の地層は、烏川によって形成された扇状地砂礫層を基盤としている。F9号墳周辺の自然堆積層としては、第Ⅰトレンチ前庭部サブトレンチ、ならびに第Ⅱ～Ⅳトレンチにて、やや土壌化して黄色を呈する砂礫層のⅠ層と、オリーブ黄色を呈する砂礫層のⅡ層を検出した(第14図)。墳丘と石室は、これらの砂礫層を基礎にして構築されている。

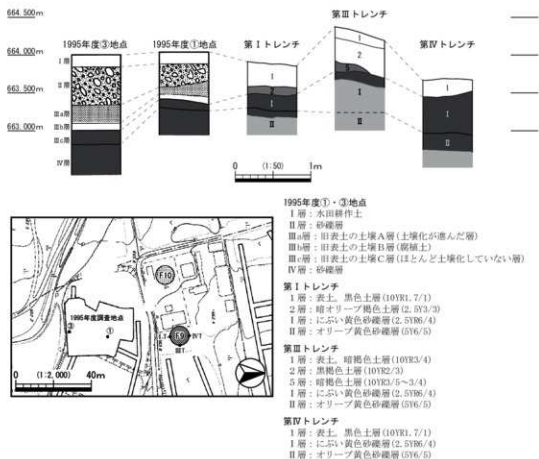
周辺の土壌と旧地形 公園建設に先立つ平成7年(1995)の試掘調査では、F9号墳から約50cm南側の地点で計6層の堆積を確認した⁴¹⁾(第15図)。Ⅰ層が水田耕作土、Ⅱ層が水田床土の砂礫層、Ⅲa層が黒ボク土である遺物包含層、Ⅲb層が腐植土と砂礫を含む遺物包含層、Ⅲc層がほとんど土壌化していない火山灰・砂礫層、Ⅳ層が砂礫層である。このⅢc層・Ⅳ層が、F9号墳におけるⅠ・Ⅱ層に相当するものであろう。なお、これらの基盤層は、西から東、および北と南へ下って傾斜しており、F9・F10号墳が烏川右岸の微高地上にあった事実を表づけている。(紀・高橋)

2 遺構

(1) 概要

墳丘 F9号墳は、盛土の流出、石室天井石の欠失、南側隣接地における水田開拓、塚原配水池の建設、そして公園造成などの影響を受けて、築造当初の姿から大きく変貌を遂げている。

第9次調査までは直径11.0m・残存高1.3mの円墳であると想定していたが、後述する第10次調査・第11次調査の結果、墳丘径の長大化およびA1号墳のように楕円形の墳形が推定される。墳丘の大部分は、烏川扇状地に由来する砂礫層の上に、この砂礫層と黒ボク土を母材とした盛土が施されたものであろう。実際に、第Ⅲトレンチや第Ⅳトレンチでは、包含礫の大きさに差があるものの、墳丘盛土と考えられる黒色土層を確認しており、第8次調査においても、第Ⅱトレンチにて黒褐色土層・灰褐色土層を



第15図 基本層序（61頁註4）長野県埋蔵文化財センター編1997、『報告2013』・『報告2014』

確認した⁵³。第Ⅱトレンチの墳丘盛土西端は、墳端の推定ラインには届いておらず、第2次調査での所見通り、西側の墳端は削平されているとみられる。

周溝の有無については、第7次調査で第Ⅳトレンチにおいてレンズ状堆積の3層を確認している。『報告2015』では、3層のレンズ状堆積を周溝埋土とするならば、幅1.8m、深さ0.4m以上の周溝が墳丘背面に巡っていたと推定している。

第9次調査では、周溝の存在確認、石室開口部前面付近の構造をあきらかにすることを目的としてD9～E11グリッドの位置に調査区を設定した。人為層とみられる4層上面を検出し掘削を終了した。4層は包含する礫の大小から南北に分けられ、北側が墳丘盛土の一部で、南側が整地土の可能性があるとした⁵³。

石室 墳丘の中央に設けられた埋葬施設は、主軸をN-12°-Wにとり、南向きに開口する平面隅丸長方形の無袖横穴式石室である（第16図）。すべての天井石が失われていたが、全長約7.0m・下端幅約1.8m・上端幅約1.3m・残存高約1.8m、現状床面標高663.1mの石室自体は、閉塞石の一部が崩れていることを除き比較的良好的な遺存状態である。なお、本調査では、墳丘の正面側を「前庭部」と仮称しているが、明確な前庭部の有無については、今後の検討課題としたい。

また、壁体の積み上げに先立って、自然堆積層であるⅠ・Ⅱ層を70cm程度掘り下げて石室掘方を設けている。その内部に、石材を3段ほど積みむことで壁体の高さを掘方の上面に揃えている。その後、墳丘構築を石室壁体の構築と並行しておこなったと考えられる。このような工程で横穴式石室が構築された結果、床面から開口部までの間には、約50cmの比高差をもつ傾斜が形成された。

壁体を構成する石材は、大部分が烏川で採取されたとみられる飛騨山脈由来の花崗岩礫である。奥壁最下段中央に据えられた縦約50cm・横約100cmの石材が腰石と考えられる一方、側壁には明確な腰石がみられない。この奥壁を除いた東西の側壁は、完全な布積みではないものの、石材を概ね6段積み上げており、下から3段を平積み、4段目以上を小口積みしたとみられる。主に、縦約30～40cm・幅約60～90cmの石材が用いられたが、石材間の隙間を調整したためか、中段に径約10cm～約20cmの間石を噛ませている部分が広くみられた。両側壁ともに、3段目まで垂直に積み、4段目以上を次第に内傾させる持ち送りの技法を用いている⁷⁾。

第9次調査において、B1～B3、C1～C6グリッドの一部で砂礫層のⅡ層を検出した。そのⅡ層は、Cグリッドでの検出が目立つ。しかし、Bグリッドでは、Cグリッドの自然堆積層として検出したC1グリッドⅡ層の最上面より掘り下けてもⅡ層が検出されなかった。この検出状況からⅡ層は、西から東へなだらかに傾斜することが判明した。(荒堀・平井)

(2) 第Ⅰトレンチ [第17・18図]

調査の経過 第9次調査で石室床面の検出がほぼ完了したため、第10次調査では石室床面の精査と遺物の残存確認をおこない、石室内の調査が完了した。排土はグリッド毎に分け、1mm方眼メッシュのふるいにかけて、遺物を細大漏らさず回収することに努めた。石室内は、全体を砂で埋め戻し、石室上面にも盛土して墳丘上部を養生した。前庭部では、東壁の堆積状況を再検討し記録をおこなった。

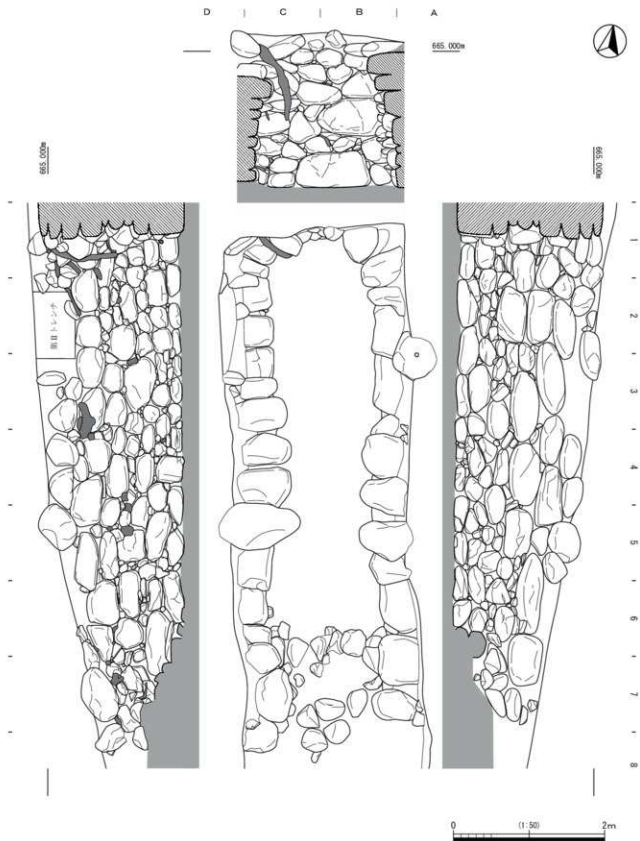
土層堆積状況 東壁は再検討の結果1～6層に分層した(第18図)。1層と2層は墳丘にともなわない層である。3層は、トレンチ南端で確認した落ち込みに堆積している層である。この落ち込みは、周溝の一部と捉えることもできるが、根拠乱の可能性もある。4層と5層は、第Ⅱトレンチで検出した4・5層に近い性質をもつことから、墳丘にともなう層と判断した。6層は、第9次調査で古墳造営にかかる整地土と推定した第Ⅰトレンチ拡張区4層と性質が類似することから、同じく整地土と推定した。

遺物出土状況 第Ⅰトレンチからは、須恵器片、ガラス小玉、炭化物の計11点が出土した(第17図)。

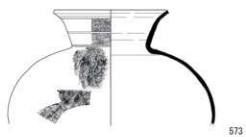
須恵器は、石室内の排土から1点、前庭部の排土から5点の計6点が出土した。B2グリッドの排土から回収した杯の口縁部〔590〕は、過年度出土の杯〔160(ほか)〕と接合した。C11グリッドから出土した壺の胴部〔579〕は、過年度に出土した〔5(ほか)〕と接合した。C11グリッドの排土から壺の底部の破片〔589〕を1点回収した。そのほか、微細な須恵器片がB11グリッド・C11グリッドから3点の出土である。

ガラス小玉は、B4・C3・C4グリッドの排土からふるいかけにより、それぞれ1点ずつ回収した。

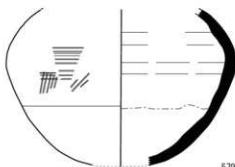
炭化物は、B1グリッドとC11グリッドでそれぞれ1点ずつ出土した。(関口)



第16図 石室実測図



573



579



591



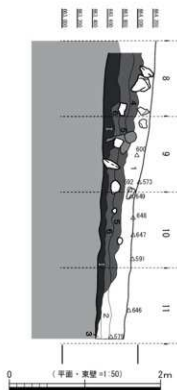
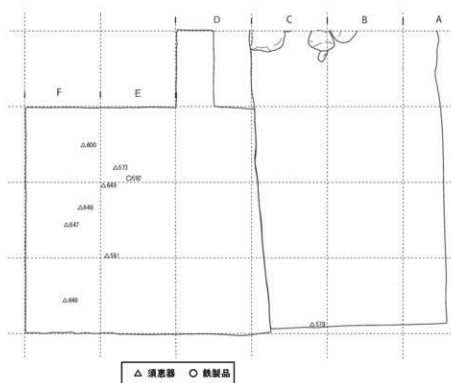
647



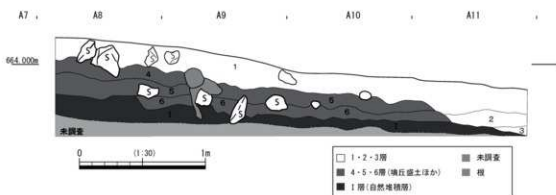
592

0 (579・591・592・647=1:3) 10cm

0 (573=1:8) 20cm

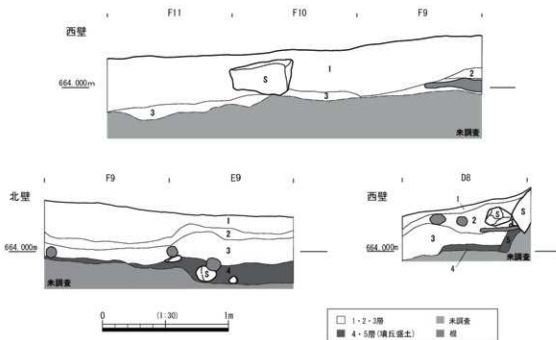


第17図 第10次調査遺物出土状況



- 1層：暗褐色土層(10YR3/4)
表土。径4.5~20.0cm前後の礫が多く混じる。粘性弱い。しまり普通。
- 2層：鈍い褐色土層(10YR4/3)
墳丘盛土の流入土。円礫が中量混じる。粘性弱い。しまり普通。
- 3層：鈍い褐色土層(10YR4/3)
周埋埋土の可能性のある層。
- 4層：暗褐色土層(10YR3/4)
墳丘盛土。径4.2~10.0cm前後の礫が多く混じる。粘性弱い。しまり普通
- 5層：暗褐色土層(10YR2/3)
墳丘盛土。径4.1~20.0cm前後の礫が多く混じる。粘性弱い。しまり普通。
- 6層：褐色土層(10YR4/4)
惣埋土。径4.2~10.0cm前後の礫が多く混じる。粘性弱い。しまり普通。
- 7層：自然堆積層。

第18図 第Iトレンチ前庭部東壁土層断面図



- 1層：黒色土(SY2/1)
表土。配水池掘削に伴う腐土。全体的に礫が多く混じる。
- 2層：黒色土(SYR2/1)
配水池掘削に伴う腐土。細かい砂粒が混じる。
- 3層：黄褐色土(10YR5/4)
配水池掘削に伴う腐土。しまり弱い。D8西壁と北壁では微細な礫から径3~7cmの礫が混在するが、西壁では礫は混ざらない。
- 4層：黒色土(10YR2/1)
墳丘盛土か、しまりやや強い。粘性は弱い。細かい砂粒が混じる。
- 5層：暗褐色層(10YR3/4)
径7cm程度の礫が墳丘方向に立ち上がる。4層との層界は、はっきりと確認できない。

第19図 第Iトレンチ拡張区土層断面図

(3) 第Iトレンチ拡張区 [第17・19図]

調査の経過 周溝の有無、石室と墳丘の取り付け方ならびに墳丘の規模の解明を目的とし、第9次調査で設定した拡張区をさらに北側と西側に拡張して調査をおこなった。

石室主軸線を基準とする現行グリッドに準拠して、E9～E11グリッドから西側へ東西1.0m南北3.0m拡張して調査区(F9～F11グリッド)を設定し掘削をおこなった。D8グリッドは、当初、D7グリッドを含めて北へ2.0m拡張する予定であったが、地表に露出していた礫が予想以上に大きく、墳丘構築当初に設置した可能性があるため、礫の手前まで掘削を中止した。なお、排土は第Iトレンチと同様にグリッドの層別に1mm方眼メッシュのふるいにかけた。

F9～F11グリッドは第9次調査で確認した拡張区西壁3層にあたる層を検出したところで掘削を終了し、北壁、西壁の分層・記録をおこなった(第19図)。D8グリッド西半にはサブトレンチを設定し、D8グリッド西壁の分層・記録をおこなった。また、土層断面図や写真による記録のほか、SDM-MVSによる石室三次元モデル作成用の写真撮影および墳丘の三次元レーザースキャナによる計測をおこなった。すべての作業完了後、土糞と発泡スチロールで埋め戻し、次年度の調査に備えた。

土層堆積状況 D8グリッド西壁は1～5層に分層した。2・3層は単一の層が厚く堆積するとともに礫が多く含まれることから、配水池掘削にともなう排土に由来する土層と解される。4層は、第9次調査において検出された4層と対応することから、墳丘にともなう層(盛土層)と推定される。5層は4層と同様の性質をもつ層である。層界は明確ではないが、径7.0cm程の礫が墳頂方向へ傾斜してみられるため便宜的に区分した。北壁と西壁でみられる1～4層は、それぞれD8グリッド西壁の1～4層に対応する層である。

遺物出土状況 第Iトレンチ拡張区では、土師器・須恵器・磁器・鍍金具・角釘・不明鉄片・瓦・炭化物の計71点が出土した。

土師器は6点出土した。D8グリッド清掃土で1点、F9グリッド3層で2点、F10グリッドの表土で1点と2層で2点の出土である。いずれも接合せず、復元できる個体はない。

須恵器は、いずれも破片で34点出土した。2層ではF9グリッドで7点、F10グリッドで13点、F11グリッドで3点、3層上面ではF9グリッドで7点、F10グリッドで3点、F11グリッドで1点出土した。なお、F9グリッド2層で出土した甕の肩部〔573〕は、過年度の調査で主に石室内から出土した〔138ほか〕と接合した。F10グリッド2層で出土した脚部〔591〕は過年度調査出土の〔60ほか〕と接合した。

鉄製品は、F9グリッド3層で鍍金具〔592〕が出土した。このほかに、D8グリッドで角釘1点、F11グリッドで鉄片1点が出土した。

瓦は平瓦のみで20点出土した。E11グリッドで1点、F10グリッドで2点、F11グリッドで17点出土した。すべて近世以降に生産された瓦である。このほか、F10グリッドで磁器1点が出土した。

炭化物は7点出土した。D8グリッドで1点、D11グリッドで1点、F11グリッドで5点の出土である。いずれも粒状で、第9次調査で出土したものと同一層位から出土した。(関口)

3 遺物

(1) 概要

第10次調査では、計91点の遺物が出土した。第1トレンチで、石室内からはB4・C3・C4グリッドでガラス小玉3点、B2グリッドで須恵器片1点、B1グリッドで炭化物片1点が、前庭部からはC11グリッド出土の壺を含む須恵器片5点、C11グリッドで炭化物片1点が出土した。第1トレンチ拡張区では、F10グリッド出土の子持壺や甕を含む須恵器片34点が出土したほか、土師器片6点、瓦片20点、炭化物7点、F10グリッドで磁器片1点、F9グリッドで馬具1点、D8グリッドで角釘1点、F11グリッドで鉄片1点が出土した。また、トレンチは不明だが、ふるいがけにより鉄釘を1点回収した。このほか、丸瓦・平瓦合わせて7点、磁器1点を採集した。

以下、主な出土遺物について詳述する。なお、過年度に同様の遺物が出土している場合は、あわせてその概要も略述する。(齋藤)

(2) 第1トレンチ

i) 須恵器 [第20図1、第3表、図版11]

B2グリッドの排土から杯の口縁部〔590〕を1点回収した。過年度出土の杯〔160ほか〕と接合する。なお、当該個体はごく微細な破片のため、実測していない。

1〔579〕は、長頸壺の胴部であり、C11グリッドから出土した。過年度までに出土した〔5ほか〕と接合した。接合した状態で、残存高12.4cm、厚さ最大1.0cm、残存率は10%である。外面肩部と内面底部に自然軸が認められることから、正位での焼成と考えられる。ロクロ成形後、外面上半にカキメ、外面下半にロクロケズリを施す。焼成は良好で、色調は外面が黒褐色(25Y3/1)、内面が灰黄色(25Y7/3)である。胎土に白色・黒色微粒子を含む。

〔589〕は、甕の底部の破片であり、C11グリッドから出土した。残存高4.3cm、幅5.7cm、厚さ最大0.7cmである。ロクロ成形後、外面に波状文を施す。焼成は良好で、色調は外面が灰黄色(Y6/2)、灰色(Y5/1)、内面が浅黄色(25Y7/4)、灰黄色(25Y6/2)である。胎土に白色・黒色微粒子を微量に含む。

(大塚)

ii) ガラス小玉 [第21図22～24、第4表、図版13]

B4グリッドでは22〔585〕、C3グリッドでは23〔603〕、C4グリッドでは24〔604〕が出土した。いずれも排土のふるいがけで回収した。(日下部)

(3) 第Iトレンチ拡張区

i) 土師器

第10次調査では、D8グリッドの清掃土より1点、F9グリッド3層より2点、F10グリッドで表土から1点、2層より2点の計6点出土した。いずれもふるいがけにより回収した。(上地)

ii) 須恵器 [第20図2～5、第21図6～20、第3表、図版11～13]

須恵器は、前庭部および第Iトレンチ拡張区から破片を含めると39点が出土した。その内訳は、子持壺2点、壺1点、脚部1点、杯蓋2点、甕28点、器種不明5点である。接合をおこない、そのうち実測が可能であった26点を報告する。

子持壺 2 [647] は、子持壺の肩部の破片であり、F10グリッドから出土した。残存高5.4cm、幅6.9cm、厚さ最大1.0cmである。ロクロ成形後、内外面ともにロクロナデを施す。焼成は良好で、色調は暗灰黄色(25Y6/2)である。胎土に石英と思われる白色微粒子と、黒色微粒子を微量に含む。

[633] は、子持壺の小壺胴部の破片であり、F10グリッドから出土した。残存高2.9cm、幅3.4cm、厚さ最大0.6cmである。外面に自然軸が見られ、外面上半に降灰箇所がある。焼成は良好で、色調は外面が黒色(75Y2/1)、降灰部分が浅黄色(5Y7/4)、内面が黄灰色(25Y4/1)である。白色・黒色微粒子をごく微量に含む。過年度までに出土した子持壺とは接合できていないが、胎土などの特徴から同一個体と考えられる。

脚部 3 [591] は、二段透かしをもつ器種不明の脚部であり、F11グリッドから出土した。過年度までに出土した[60ほか]と接合した。残存高13.2cm、底径15.4cm、厚さ最大9.0cm、残存率は35%である。下段透かしの側方に波状文、外面にロクロ目、内面にナデを施す。焼成は良好で、色調は外面が灰色(5Y6/1)、灰オリーブ色(5Y5/2)、内面が灰オリーブ色(5Y5/2)である。胎土に白色・黒色微粒子をごく微量に含む。

甕 5 [573] は、甕の肩部であり、F9グリッドの2層から出土した。過年度までに出土した[138ほか]と接合した。残存高24.6cm、復元径24.3cm、厚さ最大11.0cm、残存率は15%である。口縁部を3段に形成し、頸部に1条の沈線で上下に分割された櫛描波状文がみられ、肩部に平行タタキ目を施す。頸部内側にはナデ調整がみられる。丸みを帯びた肩部と、「ハ」の字状に広がる頸部をもつ。内外面に降灰が認められる。焼成は良好で、色調は外面が灰オリーブ色(5Y6/2)、浅黄色(25Y7/4)、暗灰色(25Y5/2)、灰色(5Y4/1)、内面が灰色(5Y5/1)、におい黄色(25Y6/3)、灰オリーブ色(5Y5/3)である。胎土に白色・黒色微粒子を含む。

6 [648] は、甕の胴部の破片であり、F10グリッドから出土した。残存高7.3cm、幅5.9cm、厚さ最大1.0cmである。内面にナデを施す。焼成は良好で、色調は外面が灰オリーブ色(5Y6/2)、浅黄色(25Y7/4)、暗灰色(25Y5/2)、灰色(5Y4/1)、内面が灰色(5Y4/1)である。胎土に白色・黒色微粒子をごく微量に含む。

7 [576、600] は、甕の胴部下半の破片であり、F10グリッドから出土した[576]と、F9グリッドから出土した[600]を接合した。残存高7.2cm、幅8.0cm、厚さ最大0.9cmである。外面一部に横ナデ、内面にナデを施す。焼成は普通、色調は外面が灰オリーブ色(5Y5/2)、内面が灰オリーブ色(5Y6/2)であ

る。胎土に白色微粒子を微量に含む。

8〔584, 616, 618, 651〕は、甕の胴部の破片であり、F10グリッドから出土した〔584, 616, 618〕と、F9グリッドから出土した〔651〕と接合した。残存高7.0cm、幅6.6cm、厚さ最大0.8cmである。外面一部にナデ、内面にナデを施す。焼成は普通で、色調は外面が褐灰色(10YR5/1)、内面は黄灰色(2.5Y6/3)～灰(5Y5/1)である。胎土に白色微粒子を微量に含む。〔570ほか〕、〔602ほか〕と同一個体の可能性がある。

9〔608〕は、甕の肩部の破片であり、F9グリッドから出土した。残存高4.6cm、幅5.8cm、厚さ最大1.3cmである。外面に横ナデ、内面にケズリを施す。焼成は良好で、色調は外面が暗灰黄色(2.5Y5/2)、黄灰色(2.5Y4/1)、内面が黄灰色(2.5Y5/1)、暗灰黄色(2.5Y4/2)である。胎土に白色微粒子を微量に含む。

10〔649〕は、甕の胴部の破片であり、F9グリッドから出土した。残存高4.6cm、幅3.7cm、厚さ最大1.0cmである。内面にナデを施す。焼成は良好で、色調は外面が灰色(7.5Y5/1)、内面が灰色(7.5Y4/1)である。胎土に白色微粒子を微量に含む。

11〔570, 574〕は、甕の胴部の破片であり、F11グリッドから出土した〔570〕と、F9グリッドから出土した〔574〕を接合した。残存高4.4cm、幅6.8cm、厚さ最大0.9cmである。外面の一部にナデ、内面にナデを施す。焼成は良好で、色調は外面が黄灰色(2.5Y4/1)、内面がにぶい黄色(2.5Y6/4)である。胎土は白色微粒子を微量に含む。〔584ほか〕、〔602ほか〕と同一個体の可能性がある。

12〔624〕は、甕の胴部の破片であり、F10グリッドから出土した。残存高4.1cm、幅3.7cm、厚さ最大1.1cmである。内外面ともにナデを施す。焼成は良好で、色調は外面が灰色(5Y5/1)、内面が暗灰黄色(2.5Y5/2)である。胎土に白色微粒子を微量に含む。

13〔602, 613〕は、甕の胴部の破片であり、F9グリッドから出土した〔602〕と、F10グリッドから出土した〔613〕を接合した。残存高3.8cm、幅8.2cm、厚さ0.9cmである。内外面ともにナデを施す。焼成は良好で、色調は外面が暗灰黄色(2.5Y5/2)、内面が浅黄色(2.5Y7/4)、暗灰黄色(2.5Y5/2)、明黄褐色(2.5Y7/6)である。胎土に白色微粒子を微量に含む。〔570ほか〕、〔584ほか〕と同一個体の可能性がある。

14〔646〕は、甕の胴部の破片であり、F11グリッドから出土した。残存高3.6cm、幅5.5cm、厚さ最大1.1cm、最小0.9cmである。内外面ともにナデを施す。焼成は良好で、色調は外面が灰色(N4/0)、内面が黄灰色(2.5Y4/1)である。胎土に白色微粒子を含む。

15〔597〕は、甕の胴部の破片であり、F9グリッドから出土した。残存高3.3cm、幅6.3cm、厚さ最大0.9cm、最小0.7cmである。内面にナデを施す。焼成は良好で、色調は外面がにぶい黄色(2.5Y6/3)、暗灰黄色(2.5Y4/2)、内面が黄褐色(2.5Y5/3)である。胎土に白色微粒子を含む。

16〔575〕は、甕の胴部の破片であり、F10グリッドから出土した。残存高3.1cm、幅4.0cm、厚さ最大0.75cmである。内外面ともにナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗灰色(2.5Y5/2)である。胎土に白色微粒子を微量に含む。

17〔615〕は、甕の胴部の破片であり、F9グリッドから出土した。残存高3.0cm、幅3.6cm、厚さ最大0.75cmである。内外面ともにナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに褐灰色(10YR5/1)である。胎土に白色微粒子を微量に含む。

18〔645〕は、甕の胴部の破片であり、F10グリッドから出土した。残存高2.8cm、幅3.4cm、厚さ最

大0.9cmである。内面にナデを施す。色調は外面が灰黄色(25Y6/2)、灰色(25Y5/1)で、内面が灰黄色(25Y6/2)、黄灰色(25Y6/1)である。胎土に白色・黒色微粒子をごく微量に含む。

19〔638〕は、甕の胴部の破片であり、F11グリッドから出土した。残存高2.4cm、幅3.5cm、厚さ最大0.8cmである。内面にナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色(5Y5/1)である。胎土に白色・黒色微粒子をごく微量に含む。

20〔577〕は、甕の胴部の破片であり、F9グリッドから出土した。残存高2.2cm、幅2.4cm、厚さ最大0.8cmであった。内面にナデを施す。焼成は良好で、色調は外面が灰オリーブ色(7.5Y5/2)で、内面は灰色(7.5Y5/1)である。胎土に白色微粒子を微量に含む。

4〔622〕は、甕の肩部の破片であり、F10グリッドから出土した。残存高2.0cm、幅6.1cm、厚さ最大1.4cmである。外面に横ナデ、内面にナデを施す。焼成は良好で、色調は外面が灰オリーブ色(5Y5/2)、内面が灰黄色(25Y5/1)、黄褐色(25Y5/3)である。胎土に白色微粒子を微量に含む。

〔641〕は、甕の胴部の破片であり、F10グリッドから出土した。残存高2.0cm、幅2.4cm、厚さ最大0.8cmである。内面にナデを施す。焼成は普通で、色調は外面が灰色(5Y5/1)、内面が灰オリーブ色(5Y5/2)である。胎土に白色・黒色微粒子をごく微量に含む。

〔587〕は、甕の胴部の破片であり、F9グリッドから出土した。残存高1.8cm、幅2.4cm、厚さ最大0.8cmである。両面にナデを施す。焼成は良好で、色調は外面が灰色(7.5Y4/1)、内面が黄灰色(2.5Y4/1)である。胎土に白色・黒色微粒子をごく微量に含む。

〔619〕は、甕の胴部の破片であり、F9グリッドから出土した。残存高1.7cm、幅2.7cm、厚さ最大0.9cmである。両面にナデを施す。焼成は普通で、色調は外面が黄褐色(2.5Y5/3)、内面が黄灰色(2.5Y5/1)である。胎土に白色微粒子を微量に含む。

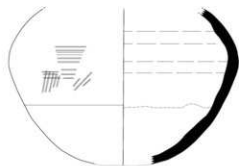
器種不明〔620〕は、胴部であり、F10グリッドから出土した。残存高3.2cm、幅0.9cm、厚さ最大0.8cmである。焼成は良好で、色調は外面が灰黄色(25Y6/2)、灰オリーブ色(5Y5/2)、内面がオリーブ黄色(5Y6/3)、灰オリーブ色(5Y5/2)である。胎土に白色・黒色微粒子をごく微量に含む。 (大塚)

iii) 鉄製品 [第21図21、第5表、図版13]

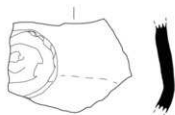
21〔592〕は、鍍金具である。F9グリッドの3層、標高663.871mで出土した。最大幅4.2cm、最大長9.5cm、銜高0.7cm、銜径0.2cm。鍍金具とは鞍から鍍金を吊るす鍍金軸と一連のものであり、鍍金軸の先に装着する。なお、鍍金軸は、第8次調査においてC5グリッドの標高663.198mから出土している。(豊田)

註

- 1)『報告2009』
- 2)『報告2010』
- 3)『報告2012』
- 4)長野県埋蔵文化財センター編1997『国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書1-穂高古墳群-近世集石遺構の調査』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書23、建設省関東地方建設局・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 5)『報告2016・2017』
- 6)『報告2016・2017』
- 7)『報告2015』



1 [579]



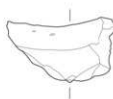
子壺接合予想図



2 [647]

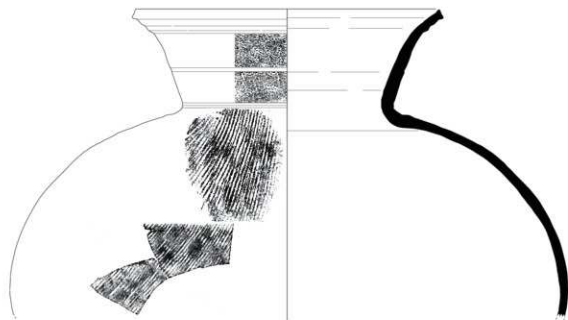


3 [591]



4 [622]

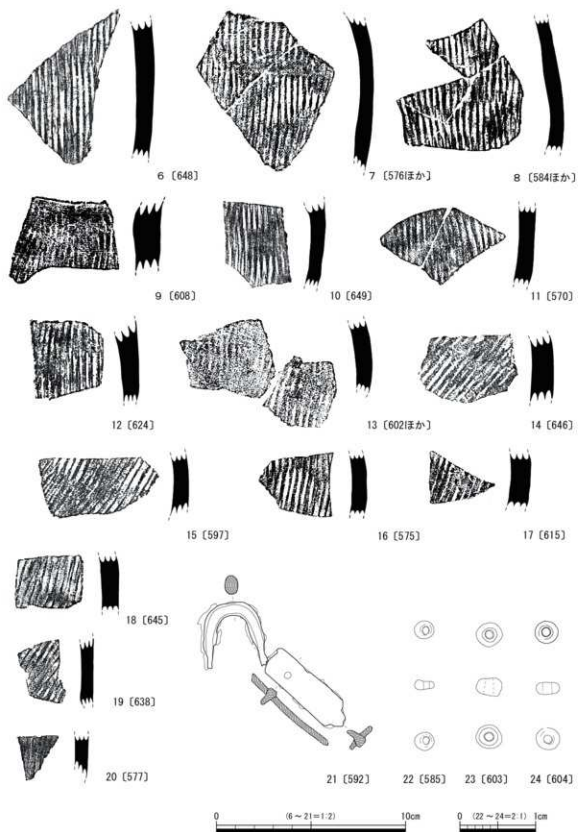
0 (2・4=1:2) 10cm



5 [573]

0 (1・3・5=1:3) 10cm

第20図 第10次調査出土物実測図(1)



第21図 第10次調査出土遺物実測図(2)

第3表 第10次調査 須恵器観察表

図面番号	遺物番号	出土地点	砂粒	部位	計測値(cm)		成形	調整		色調		胎土	焼成	保存	備考
					口径	器高		外面	内面	外面	内面				
第21041	579	C11	空 (瓦原田)	胴部	不明	(124)	ロクロ	ナデ	ナデ	灰褐色 (2.5Y7.3-1)	灰黄色 (2.5Y7.2)	白色・灰色 微粒子	良好	10%	(514か) と接合
第21042	647	F10	子持壺	肩部	不明	(15)	ロクロ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	暗灰黄色 (2.5Y6.2)	暗灰黄色 (2.5Y6.2)	白色(石英 か)、灰色 微粒子微量	良好	破片	
第21043	591	F11	不明	胴部	154 (残推)	(132)	ロクロ	ナデ	ナデ ケズリ	灰色 (5Y6.1) 灰オリーブ色 (5Y5.2)	灰オリーブ色 (5Y5.2)	白色・灰色 微粒子ごく 微量	良好	35%	(603か) と接合
第21044	622	F10	甕	肩部	不明	(20)	タタキ	横ナデ	ナデ	灰オリーブ色 (5Y5.2)	黄灰色 (2.5Y5.1) 黄褐色 (2.5Y5.3)	白色微粒子 微量	良好	破片	
第21045	573	F9	甕	肩部	(243)	(246)	タタキ	ナデ	ナデ	灰オリーブ色 (5Y6.2) 浅黄色 (2.5Y7.4) 暗灰黄色 (2.5Y6.3) (2.5Y5.2) 灰色 (5Y4.1)	灰色 (5Y5.1) にふい黄色 (2.5Y6.3) 灰オリーブ色 (5Y5.3)	黒色微粒子	良好	15%	(1384か) と接合
第21046	648	F10	甕	胴部	不明	(73)	タタキ	無	ナデ	灰オリーブ色 (5Y6.2) 浅黄色 (2.5Y7.4) 暗灰黄色 (2.5Y5.2) 灰色 (5Y4.1)	灰色 (5Y4.1)	白色・灰色 微粒子ごく 微量	良好	破片	
第21047	576 600	F9 F10	甕	胴部下手	不明	(72)	タタキ	一部横 ナデ	ナデ	灰オリーブ色 (5Y5.2)	灰オリーブ色 (5Y6.2)	白色微粒子 微量	普通	破片	
第21048	584 616 618 651	F9 F10	甕	胴部	不明	(70)	タタキ	一部 ナデ	ナデ	暗灰色 (30YR5-1)	黄灰色 (2.5Y6.3～ 5Y5.1)	白色微粒子 微量	普通	破片	
第21049	608	F9	甕	肩部	不明	(46)	タタキ	横ナデ	ケズリ	暗灰黄色 (2.5Y5.2) 黄灰色 (2.5Y4.1)	黄灰色 (2.5Y5.1) 暗灰黄色 (2.5Y4.2)	白色微粒子 微量	良好	破片	
第21040	649	F9	甕	胴部	不明	(46)	タタキ	無	ナデ	灰色 (7.5Y5.1)	灰色 (7.5Y4.1)	白色微粒子 微量	良好	破片	
第210411	570 574	F9 F11	甕	胴部	不明	(44)	タタキ	一部 ナデ	ナデ	黄灰色 (2.5Y4.1)	にふい黄色 (2.5Y6.4)	白色微粒子 微量	良好	破片	(574) と接合
第21042	574	F11	甕	胴部	不明	(44)	タタキ	一部 ナデ	ナデ	黄灰色 (2.5Y4.1)	にふい黄色 (2.5Y6.4)	白色微粒子 微量	良好	破片	(570) と接合
第210412	624	F10	甕	胴部	不明	(41)	タタキ	ナデ	ナデ	灰色 (5Y5.1)	暗灰黄色 (2.5Y5.2)	白色微粒子 微量	良好	破片	
第210413	602 613	F9 F10	甕	胴部	不明	(38)	タタキ	ナデ	ナデ	暗灰黄色 (2.5Y5.2)	浅黄色 (2.5Y7.4) 暗灰黄色 (2.5Y5.2) 明黄褐色 (2.5Y7.6)	白色微粒子 微量	良好	破片	
第210414	646	F11	甕	胴部	不明	(36)	タタキ	ナデ	ナデ	灰色 (N4.0)	黄灰色 (2.5Y4.1)	白色微粒子	良好	破片	
第210415	597	F9	甕	胴部	不明	(33)	タタキ	無	ナデ	にふい黄色 (2.5Y6.3) 暗灰黄色 (2.5Y4.2)	黄褐色 (2.5Y5.3)	白色微粒子	良好	破片	
第210416	575	F10	甕	胴部	不明	(31)	タタキ	ナデ	ナデ	暗灰色 (2.5Y5.2)	暗灰色 (2.5Y5.2)	白色微粒子 微量	良好	破片	
第210417	615	F9	甕	胴部	不明	(30)	タタキ	ナデ	ナデ	暗灰色 (30YR5-1)	暗灰色 (30YR5-1)	白色微粒子 微量	良好	破片	

国庫番号	遺物番号	出土地点	器種	部位	計測値 (cm)		成形	調査		色調		胎土	焼成	残存率	備考
					口径	器高		外面	内面	外面	内面				
第210418	645	F10	甕	胴部	不明	(2.8)	タタキ	無	ナテ	灰黄色 (25V6/2) 灰色 (25Y5/1)	灰黄色 (25V6/2) 黄灰色 (25V6/1)	白色・黒色 微粒子ごく 微量	良好	破片	
第210419	638	F11	甕	胴部	不明	(2.4)	タタキ	無	ナテ	灰色 (5Y5/1)	灰色 (5Y5/1)	白色・黒色 微粒子ごく 微量	良好	破片	
第210420	577	F9	甕	胴部	不明	(2.2)	タタキ	無	ナテ	灰オリーブ色 (7.5Y5/2)	灰色 (7.5Y5/1)	白色微粒子 微量	良好	破片	
	587	F9	甕	胴部	不明	(1.8)	タタキ	ナテ	ナテ	灰色 (7.5Y4/1)	黄灰色 (2.5Y4/1)	白色・黒色 微粒子ごく 微量	良好	破片	
	589	C11	甕	底部	不明	(4.3)	ロクロ	成状文	無	灰黄色 (Y5/2) 灰色 (Y5/1)	浅灰色 (2.5Y7/4) 灰黄色 (2.5Y6/2)	白色・黒色 微粒子微量	良好	破片	
	619	F9	甕	胴部	不明	(1.7)	タタキ	ナテ	ナテ	黄褐色 (2.5Y5/3)	黄灰色 (2.5Y5/1)	白色微粒子 微量	普通	破片	
	620	F10	不明	胴部	不明	(3.2)	ロクロ	無	無	灰黄色 (2.5Y6/2) 灰オリーブ色 (5Y5/2)	オリーブ黄色 (5Y6/3) 灰オリーブ色 (5Y5/2)	白色・黒色 微粒子ごく 微量	良好	破片	
	633	F10	子持缶 (子瓮)	胴部	不明	(2.9)	ロクロ	無	無	黒色 (7.5Y2/1) 浅灰色 (5Y7/4)	黄灰色 (2.5Y4/1)	白色・黒色 微粒子ごく 微量	良好	破片	
	641	F10	甕	胴部	不明	(2.0)	タタキ	無	ナテ	灰色 (5Y5/1)	灰オリーブ色 (5Y5/2)	白色・黒色 微粒子ごく 微量	普通	破片	

第4表 第10次調査 ガラス小玉観察表

国庫 番号	遺物 番号	出土 地点	計測値 (cm)		
			長さ	厚さ	孔径
第210422	585	B 4	2.6	1.3	1.1
第210423	603	C 3	3.4	2.3	1.0
第210424	604	C 4	3.2	1.6	1.1

第5表 第10次調査 鍍吊金具観察表

国庫 番号	遺物 番号	出土 地点	計測値 (cm)		
			長さ	幅	厚さ
第210421	592	F 9	9.5	4.2	1.5

第Ⅳ章 第11次調査成果

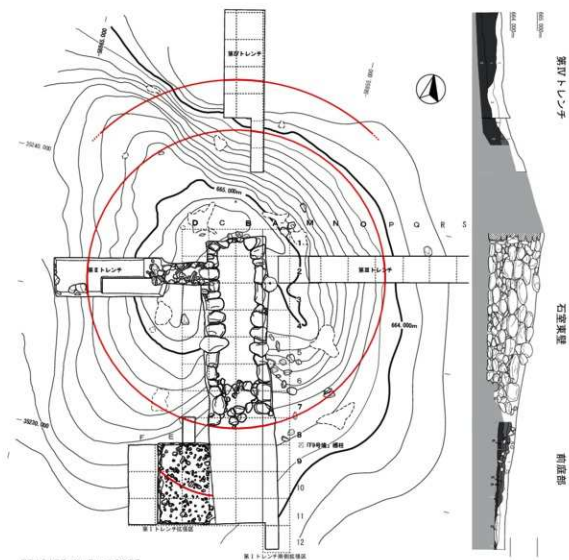
1 調査区の設定

既往の調査で、石室・前庭部に第Ⅰトレンチ、墳丘に第Ⅱ～第Ⅳトレンチを設定した。第11次調査では、第10次調査において検出した周溝の可能性のある落ち込みの範囲を把握するため、第ⅠトレンチA11グリッドの南側を新たに拡張した。なお、拡張範囲は、石室主軸線を基準とする東西1.0m・南北1.0mのグリッドに準拠して設定した。

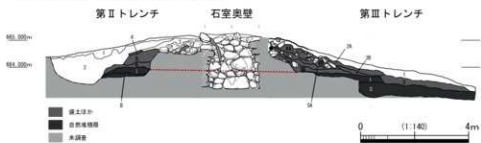
第Ⅲトレンチは墳裾部の把握ならびに周溝の有無の確認を目的として再調査した。また、石室側壁の背面構造をあきらかにするため、トレンチを西側へ拡張した。

第Ⅰトレンチ南側拡張区 第10次調査時に第Ⅰトレンチ東壁南端で検出した、周溝の可能性のある落ち込みの範囲確認を目的としている。前庭部A11グリッドの南側に東西1.0m、南北0.5mの拡張区(第Ⅰトレンチ南側拡張区)を設定した。調査面積は0.5㎡である。

第Ⅲトレンチ 周溝の有無の確認、墳丘の構築方法を解明することを目的とし、第5次調査において墳丘東側に設定した調査区である。第5次調査では、墳頂部付近の石室石材を避けるため、石室から約0.6m東へ離し、現在の墳頂部東端付近から東西8.0m、南北1.0mに設定して掘削作業をおこなった。第11次調査では、墳裾部の把握ならびに周溝の有無の確認を目的として、第5次調査時の状況を復原し、改めて調査を実施した。また、第10次調査で石室を埋め戻したことにより、石室側壁の背面構造を把握し、石室、墳丘構築過程をより詳細に復元するため、第5次調査のトレンチ西端からさらに西側へ拡張した。側壁を確認したのち、石室上部をトレンチと同一幅で掘削した。拡張した範囲はA2・M2グリッド、調査区全体はA2・M2～S2グリッド、調査面積は約8.0㎡である。(河原)



平面図の座標系(「第1号」による座標系)
【P(0横22) X座標 - 70231.402 Y座標 - 50054.742 之座標 - 664.704



第22図 第11次調査トレンチ配置図

2 遺構

(1) 第Ⅰトレンチ [第23・24図]

調査の経過 第Ⅰトレンチでは、周溝の存否確認を目的として、第9次調査・第10次調査で設定した第Ⅰトレンチ拡張区を含む南壁の分層や、新たに設定した南側拡張区(A12グリッド)を調査した。

南壁を分層・記録したのち、トータルステーションでA11グリッドから南北1m、東西0.5mの拡張区を設定し、掘削をおこなった。土層の検討、分層作業を経て、拡張区を南東・西・北西の3方向から撮影した。その後、東壁の土層断面図を作成した。なお、排土は、層別に3mm方眼メッシュと1mm方眼メッシュのふるいにかけて、遺物を細大漏らさず回収することに努めた。その結果、東壁2層排土から土師器片1点と土製品片1点を回収した。

最後に、南壁・南側拡張区ともにSIM-MVS用の写真を撮影した。次年度も継続して調査するため、調査面を養生する目的で土嚢や発泡スチロールを詰め、土で埋め戻した。

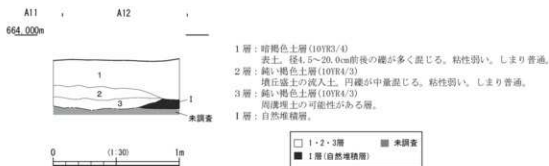
土層堆積状況 南壁は再検討の結果、1～9層に分層した。B11～F11グリッドで確認した層は、表土と自然堆積層である1層以外、いずれも攪乱層と判断した。E11・F11グリッドの6層は、第10次調査のF11グリッド西壁1層に対応する。B11～D11グリッドの2～5層は、いずれも根攪乱をいぢるしく受けていると思われる。南壁A11グリッドでは、1・8・9層を確認した。これらの層は、第10次調査で再分層した東壁1・2・3層にそれぞれ対応する。また、南側拡張区で確認した1～3層も、同じく第10次調査で再分層した東壁1～3層にそれぞれ対応する。

第11次調査の分層結果から、第10次調査の東壁1・2・3層が南壁1・8・9層と対応することが認められた。また第11次調査で確認した南側拡張区東壁第3層は、A11グリッド第3層と連続しており、自然堆積1層から立ち上がるなどからも周溝埋土の可能性はある。しかしながら、第Ⅰトレンチのすぐ南側には大きな杉があること、東壁3層と対応する南壁9層を周溝とすると石室開口部の直線上に位置すること、第7次調査で確認した第Ⅳトレンチとの対応関係を考慮すると根攪乱の可能性も考えられる。したがって、次年度以降の調査では、ほかのトレンチも含めて墳丘構築方法および周溝の存否、墳丘規模を確認していく必要がある。

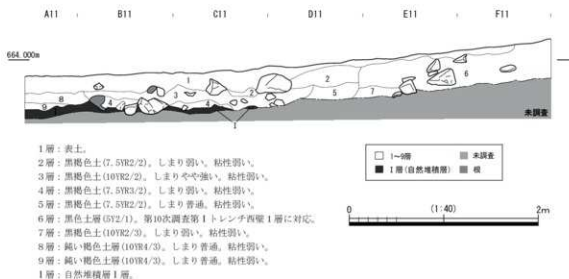
(池田・石澤・望月)

(2) 第Ⅲトレンチ [第25図]

調査の経過 墳裾部の再検討ならびに周溝の存否確認を目的として、第5次調査で設定した第Ⅲトレンチを再調査した。調査前全景を撮影したのち、トータルステーションを用いてトレンチの範囲を設定した。埋め戻し土ならびに土嚢を撤去して第5次調査終了時の状態にトレンチを復原した。その後、石室側壁の背面構造の把握を目的としてトレンチを西側へ2m拡張し、A2・B2グリッドを設定した。そして、掘削によって石室の控え積みとみられる礫を確認した。この礫の出土状況を撮影したのち、B2



第23図 第1トレンチ南側拡張区土層断面図



第24図 第1トレンチ南壁土層断面図

～M2グリッドにかけて礫による控え積みを北側から南50cmの幅で階段状に掘削し、1層の下に4・5層を確認した。その後、第5次調査の土層断面図との対応を確認しつつ、北壁土層断面を再検討した。その結果、第5次調査時に確認した4層、5層をそれぞれ4A・4B、5A・5B層に細分した。その後、北壁土層断面図を作成した。なお、排土は3mm方眼メッシュと1mm方眼メッシュのふるいにかけて、A2グリッド4層の排土から須恵器片1点を回収した。

また、第5次調査では、トレンチ最下層を6・7層としていた。しかし、O2～S2グリッドにかけて北壁から南北50cm幅のサブトレンチを設定したことで、自然堆積層のI・II層であることを再確認した。北壁土層断面を分層し、第5次調査で作成したM2グリッドからS2グリッドの土層断面図をもとに上記の細分した土層と主要な礫を追加した。

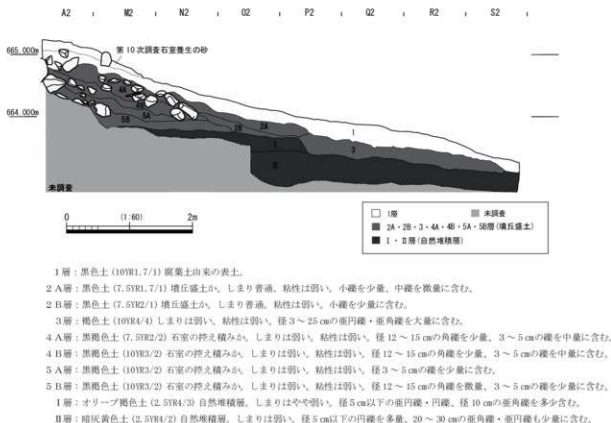
土層断面図作成後、トレンチの全景と北側土層断面を写真撮影したのち、SiM-MVS用の写真撮影を

おこなった。その後、トレンチを土糞と発泡スチロール、トレンチ掘削土で埋め戻した。

土層堆積状況 北壁の土層を再検討した結果、まず、第5次調査では2層として認識していたものを、2A・2B層とに細分した。2A・2B層は、径2～4cmの小礫を少量含んでいる。2A層は、20cmの中型の角礫を微量に含む。なお2A・2B層は、これに続く3層と一連と考えられること、さらに原位置をほぼとどめている石室東壁背面の控え積みとも一連とみなしうること、加えて後世の遺物を含まないことなどから墳丘盛土と判断した。A2・B2グリッドを拡張し層序を改めて検討した結果、4層、5層はそれぞれ4A・4B、5A・5B層に細分できると判断した。これらの層には、12～15cm程度の角礫が少量含まれ、石室側壁との対応関係などから、いずれも控え積みの礫とみられる。

第5次調査では、自然堆積層とみられるⅠ・Ⅱ層と墳丘盛土とみられる4・5層を確認していた。第11次調査により、後世の改変にともなう土層とみなされていた2・3層も、上述の理由から墳丘盛土と考えた。このため、3層東端までを盛土ととらえ、ここが墳端と仮定すると、従来の推定墳丘規模よりも大きくなる可能性がある。

(古口・馬場)



第25図 第Ⅲトレンチ土層断面図

3 遺物

(1) 第Iトレンチ南側拡張区

i) 土師器 [第6表、図版10]

[662] は甕の頸部と推定される破片でA12グリッド2層のふるいがけにより回収した。外面にはナデ調整が施されているが、内面は剥離している。色調は外面が橙色(5YR6/8)、内面も橙色(7.5YR6/6)を呈し、焼成は普通、胎土は内外面ともに白色微粒子を微量に含む。残存高1.8cm、幅2.5cm、厚さ0.6cm。

ii) 土製品 [第6表、図版10]

[663] は、器種不明の土製品の小片でA12グリッド2層のふるいがけにより回収した。外面には沈線が刻まれている。色調は内外面ともに明赤褐色(5YR5/6)を呈し、焼成は普通、胎土は内外面ともに白色微粒子を微量に含む。残存高2.5cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm。(張)

(2) 第IIIトレンチ [第7表、図版10]

第IIIトレンチでは、A2グリッド4層のふるいがけにより須恵器1点を回収した。

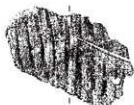
1 [661] は甕の肩部と推定される破片である。外面には平行タタキ目が全体に薄く施されており、内面は滑らかで全体にナデ調整がみられる。当て具痕や指頭痕は不明瞭。色調は外面が灰色(7.5Y5/1)、内面は灰色(5Y4/1)を呈し、焼成は普通、胎土は内外面ともに白色微粒子を微量含む。幅2.4cm、残存高3.7cm、厚さ0.8cm。(菱本)

第6表 第11次調査 土師器・土製品観察表

図面 番号	遺物 番号	出土 地点	器種	部位	計測値(cm)		成形	調整		色調		胎土	焼成	残存率
					口径	器高		外面	内面	外面	内面			
	662	A12	不明	不明	不明	(1.8)	不明	ナデ	不明瞭	橙色 (5YR6/8)	橙色 (7.5YR6/6)	白色微粒子 微量	普通	不明
	663	A12	不明	不明	—	(2.5)	不明	沈線	均等	明赤褐色 (5YR5/6)	明赤褐色 (5YR5/6)	白色微粒子 微量	普通	不明

第7表 第11次調査 須恵器観察表

図面 番号	遺物 番号	出土 地点	器種	部位	計測値(cm)		成形	調整		色調		胎土	焼成	残存率
					口径	器高		外面	内面	外面	内面			
第30図1	661	A2	須恵器甕	肩部	不明	(3.7)	タタキ	無	ナデ	灰色 (7.5Y5/1)	灰色 (5Y4/1)	白色微粒子 微量	普通	不明



1 [661]



第26図 第11次調査出土遺物実測図

4 E6号墳の調査

(1) 調査計画の策定

國學院大學考古学研究室は、平成21年(2009)に考古学実習の一環として長野県安曇野市を中心に所在する徳高古墳群F9号墳を対象に発掘調査を開始した。当古墳は国営アルプスあづみの公園の敷地内に立地し、今後土地開発の影響を受ける可能性が低いことから、一連の調査では学術調査という性格上、遺跡の保存と活用という目的も念頭に置いてきた。

第1～第11次調査までは、当古墳群の中でも墳丘が残存するものの、既に天井石が失われているF9号墳の調査を中心におこなってきた。10年に及ぶ調査によって多くの調査成果が得られた一方、当古墳群ならびにその周辺地域のさらなる実態解明のため、比較検討の対象として、F9号墳以外の古墳の調査をおこなう必要性が生じてきた。群中の古墳から調査対象の選定をおこなった結果、上記公園内に所在し、かつ当古墳群最大規模の墳丘を有し、F9号墳と同様に天井石が失われているE6号墳が候補として浮上した。

そこでまず、第11次調査では、F9号墳の調査と併行して、E6号墳の基礎的なデータ取得を目的とした墳丘の三次元レーザースキャナーによる測量を開始した。今後も調査を継続する予定である。

(岡・押本)

(2) 既往の調査・研究

E6号墳は、烏川左岸の標高約670mの台地東縁に位置する。

名称 旧来、E6号墳は『南安曇郡誌』に「狐の巢屈となりしより其の名を冠せり。」とあり、狐塚の名称で周知されてきた¹⁾。このほか、狐塚1号墳、狐塚4号墳、牧E8号墳、A群8号墳、狐塚3号墳とも記述され、複数の呼称が認められる²⁾。しかし、それらがいずれもE6号墳を指すことはほぼ確実である。その後、平成元年(1989)刊行の『徳高町の古墳群と人々』の編纂にあたり、現在の名称・認識が定着していったと推定される。

既往の調査 E6号墳の発掘調査にかかる記述として最も古いものは、『南安曇郡誌』である。明治44年(1911)6月に発掘調査がおこなわれた。石室内のみの調査であり、詳細な記録は実施されていない。戦後、発掘調査はおこなわれていないが、昭和34年(1959)の徳高町教育委員会による徳高古墳群全体の調査・標柱を立てる事業が実施され、写真も撮影されている³⁾。昭和56年(1981)の長野県史編纂にともなう長野県教育委員会による徳高古墳群全体の調査でも、何らかの略測がおこなわれた可能性がある⁴⁾。平成3年(1991)には、三木弘により、徳高郷土資料館などに断片的に伝えられていた出土資料の調査・整理がおこなわれた⁵⁾。

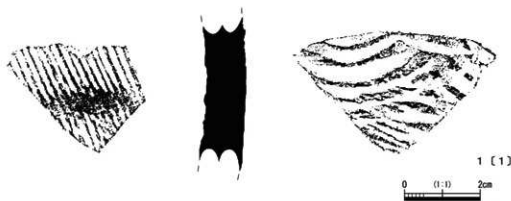
墳丘 墳丘上部は失われており、墳丘規模は各文献により差異がみられる⁶⁾。なお、『長野県史』の墳

第8表 E6号墳が記載された文献における名称と墳丘の規模

文献名	名称 (上)通称 (下)古墳名	墳丘長径(径)	墳丘短径	墳丘高	備考
南安養野郡誌	風塚	6丈6尺 (約30m)	5丈5尺 (約16.6m)	1丈2尺 (約3.6m)	
	風塚一号墳 A群八号墳	20m	約16.6m	約3.6m	
穂高町の古墳	風塚一号墳	190~200m		約3.6m	
	E6号墳				
長野県史	風塚四号墳	15m		3m	略図の可能性はある
	E8号墳				
穂高町誌	風塚二号墳	19.8m	16.5m	3.6m	
	E6号墳				

第9表 第11次調査 E6号墳表面採集須恵器観察表

河内 番号	遺物 番号	出土 地点	器種	部位	計測値(cm)		成形	調整		色調		胎土	焼成	残存率	備考
					口径	器高		外面	内面	外面	内面				
第2701	1	表採	須恵器甕	不明	不明	(4.15)	タタキ	無	同心円文の 帯で具世	灰オリーブ (0Y4/2)	灰オリーブ (5Y5/2)	白色・黒色塵粒子 微量	普通	不明	



第27図 第11次調査 E6号墳表面採集須恵器実測図

丘高の差異については、先述の通り略測がおこなわれたと推測できるが、詳細は不明である。埋葬施設は横穴式石室と考えられ、墳丘中央に長さ5.0m、幅1.5mのくぼみがある⁷⁾(第8表)。

築造年代 E6号墳の築造年代については、桐原健が須恵器の検討から7世紀前半と推定している⁸⁾。これに対して三木は、須恵器だけでなく馬具なども含めた検討から築造年代を6世紀末と考察しており、少なくとも7世紀前半に2回、8世紀前半に1回の追葬があったとしている⁹⁾。両者は、年代観において若干の差異があるものの、古墳時代後期から終末期の築造であることは確実であろう。

被葬者および造営集団 E6号墳の被葬者について桐原は、平安時代の御牧に先行する私牧に関連した

集団との関係を指摘している³⁰⁾。一方、三木はE群全体における馬具の出土が少ない点や、他の支群と副葬品・墳丘規模などに大きな差異をみいだせない点などから、E群全体の古墳と牧の管理・運営をおこなった集団とを関連づけることに否定的である³¹⁾。

副葬品 E6号墳で発掘当時出土した副葬品の多くは、古幡仁太郎らによって、東京国立博物館・徳高神社・満願寺などに寄贈され、分散して保管されてきた³²⁾。横瓶1点・杯蓋1点・鉄製袋穂槍身1点・刀身3点・鉄鎌2点が東京国立博物館に³³⁾、勾玉7点(メノウ製6点・蛇紋岩製1点)・水晶製切子玉16点・ガラス製小玉・白玉・管玉など11点が徳高神社に³⁴⁾、須恵器(長頸瓶2点・平瓶2点・高盤1点)・直刀8点・馬具(素環鏡板付轡)1組・銅鋼1点が安曇野市徳高郷土資料館に收藏されている³⁵⁾。なお、安曇野市徳高郷土資料館で保管・展示されている資料は、発掘後に満願寺に寄贈された副葬品が、安曇野市徳高郷土資料館開館の昭和47年(1972)から平成元年(1989)までの期間に移されたものと考えられる。また須恵器(フラスコ形瓶・長頸瓶)は、平成元年(1989)に宮島三五郎、平成3年(1991)に宮島貞安が保管していたことが確認できる³⁶⁾。「南安曇野郡史」では人骨が発掘されたとの記述も確認できるが、その所在は不明である³⁷⁾。副葬品で図示されているものは、須恵器5点(長頸瓶2点、平瓶1点、高盤1点)・勾玉7点・切子玉16点・小玉11点・銅鋼1点・馬具1組・直刀8点である³⁸⁾。写真による記録は、少なくとも明治44年(1923)の発掘直後と平成元年(1989)の「徳高町の古墳群と人々」編纂時におこなわれている³⁹⁾。ほかにも、金環・馬具(轡)・高杯2点などが出土したことが写真や文献から確認できるが、上記人骨などと同じく現在ではその所在が不明となっている³⁹⁾。(神澤・松本・水谷)

(3) 表面採集遺物 [第27図1、第9表、図版10]

墳丘において過年度を含めて、須恵器片4点を表面採集した。そのうち、実測可能な1点を報告する。

[1] は甕の一部と推定される破片である。外面には平行タタキ目が施されており、内面は同心円文(青海波文)の当て具痕がみられる。色調は外面が灰オリーブ色(5Y4/2)、内面も灰オリーブ色(5Y5/2)を呈し、焼成は普通、胎土に白色・黒色微粒子を微量に含む。残存高4.15cm、幅5.75cm、厚さ1.0cm。

(大嶋)

註

- 1) 太田伯一郎1923「第三章第三節 遺跡(古墳)」『南安曇野郡誌』南安曇郡教育會
榎原健1991「第二章 第三節 古墳時代」『徳高町誌』第2巻歴史編上・民俗編、徳高町誌刊行会
- 2) 長野県1981「Ⅲ中信地区 南安曇郡 徳高町」『長野県史考古資料編全一巻(一) 遺跡地名表』長野県史刊行会
藤沢宗平1968「第四章 古墳文化とそれ以降の文化」『南安曇野郡誌』第2巻上、南安曇郡誌改訂編纂會
徳高町・徳高町教育委員会編1989「徳高町の古墳群とその人々」 徳高町・徳高町教育委員会
徳高町教育委員会編1970「徳高町の古墳」柳沢書苑
- 3) 前掲註3) 徳高町・徳高町教育委員会編1989
前掲註3) 徳高町教育委員会編1970
- 4) 前掲註3) 長野県1981
- 5) 三木弘1995「有明古墳群の再検討(1)」『信濃』第43巻第12号、信濃史学会

- 三木弘2011『古墳社会と地域経営』学生社
- 6) 前掲註1)太田1923
 前掲註1)桐原1991
 前掲註2)長野県1981
 前掲註2)藤沢1968
 前掲註2)穂高町教育委員会編1970
- 7) 前掲註1)桐原1991
 前掲註2)穂高町教育委員会編1970
- 8) 前掲註1)桐原1991
- 9) 前掲註5)三木2011
- 10) 前掲註1)桐原1991
- 11) 前掲註5)三木2011
- 12) 前掲註1)太田1923
- 13) 前掲註1)太田1923
 東京国立博物館編1966『東京国立博物館収蔵品目録：考古・土俗・法隆寺献納宝物』東京国立博物館
 前掲註4)長野県1981
 前掲註2)穂高町教育委員会編1970
 前掲註2)穂高町・穂高町教育委員会編1989
 前掲註5)三木2011
- 14) 前掲註1)太田1923
 前掲註1)桐原1991
 前掲註4)長野県1981
 前掲註2)穂高町教育委員会編1970
 前掲註5)三木2011
- 15) 前掲註1)桐原1991
 前掲註2)穂高町教育委員会編1970
 前掲註5)三木弘1995
 三木弘2011
- 16) 前掲註1)桐原1991
- 17) 前掲註1)太田1923
- 18) 前掲註5)三木弘1995
 三木弘2011
- 19) 前掲註1)太田1923
 前掲註2)穂高町・穂高町教育委員会編1989
- 20) 前掲註1)太田1923
 前掲註1)桐原1991
 前掲註2)長野県1981
 前掲註5)三木2011

第V章 考 察

1 墳丘規模と構築過程に関する知見の整理

本考察の目的 F9号墳の具体的な構築過程は、第8・9次調査までの成果にもとづき、『報告2016・2017』で概要が示され、続く第10次調査において石室内部に関する調査が完了した。一方で、構築過程の詳細に関しては依然として不明点が残されている。以下、これまでの調査成果を整理し、改めてF9号墳の墳丘構築過程に関する復元案を提示する。調査時の誤認や検証不足をそのまま文章化した箇所もあるが、発掘調査時の検証過程を明文化しておくことで、誰でも発掘調査の履歴と調査目的が把握できること、加えて今後の調査方針などに活用できると考えたためである。

石室ならびに墳丘の構造 石室ならびに墳丘構造に関して得られた知見について、第9次調査までの成果および考察をまとめておく。

まず、石室に関しては、第3次調査においてF9号墳の埋葬施設が無袖式横穴式石室であることが判明し、第7次調査で石室が自然堆積層である砂礫層(I・II層)を掘り込んで掘方を設け、そこから大型の円礫を順に積み上げていくといった、石室壁体の構築過程の概要を復元した。さらに石積みの詳細をみると、石材は基底部付近で平積み、それより上部が小口積みで、第9次調査成果から墳丘盛土の厚さがおよそ石室壁体の石材3段分に相当することが指摘され²⁾、石室と墳丘の構築が並行しておこなわれたことが判明した。

また、石室構築の中断を示す目地が認められないことに加え、第Iトレンチの石室開口部から前庭部付近の水平を基調とした土層断面からも、第1次墳丘と第2次墳丘とを画する層境が確認できず、第1次・第2次墳丘といった段階的な墳丘構築は考えにくい、というのが従前の理解であった。

同時に石室背面には円礫が多量に積まれており、石室の控え積みとして供されたと推定した。石室の控え積みは、持ち送られる石室壁体の石材の後ろに礫を設置することで、石室壁体が内側へ転ぶことを防ぐ役割が期待されていた。ところが、控え積みとしては機能しない位置、すなわち石室壁体の石材と直接取り合わない部分にも礫が認められることから、控え積みは先述した機能以外の役割も担っていた可能性が示唆された。

次に、墳丘盛土に関して整理しておく。第9次調査で墳丘盛土の状況から石室壁体との関係性を特定するため、第IIトレンチの5・6層および第IIIトレンチの4・5層を比較した。その結果、旧表土由来の黒褐色土であり、自然堆積層でなく偽礫を含む人工的な土層であること、後世の遺物が混入していないことなどから、いずれも墳丘盛土と認定した。F9号墳の墳丘残存部分を検討するかぎり、盛土は旧表土を削っておこなわれており、それより下層も石室掘方を設けるために自然堆積層を掘り込んでいる。しかし、これらの掘削によって発生する墳丘盛土の量はそれほど多いとは考え難い。よって、不足する盛土を古墳周辺で容易に採取することができる礫をもって補うため、石室背面に多量の円礫を用いた控

え積みも設けたことなどが推測できる。

周溝の有無 石室と墳丘に関しては、以上のような調査成果が得られたが、依然として解決しない課題のひとつが周溝の存否であった。石室掘方と墳丘盛土を確保するため、旧表土層と地山の一部掘削がおこなわれたことは、先に述べたとおりである。つまり、墳丘構築に必要な土量はそれほど多くないため、周溝を掘削しなかった可能性も捨象できない。ただ、第Ⅳトレンチの土層断面によると、周溝の可能性が示唆される落ち込みを検出している。ところが、第Ⅱトレンチでは周溝推定位置が既に擾乱されているため、確認は不可能である。よって、第Ⅰトレンチの精査ならびに調査区の拡張によって、周溝の存否を確認するしかないと判断し、第10次調査で東壁の土層断面を再精査した。

その結果、第Ⅰトレンチ東壁の南端付近、A11グリッドで周溝の可能性のある落ち込みの一端(第3層)を検出した。第11次調査ではさらにこの落ち込みを追跡し、周溝に備わる両端の立ち上がりを検出することで、この落ち込みが周溝である蓋然性を高めることを企図し、第Ⅰトレンチ東壁南端付近をさらに拡張することとした。その結果、反対側の立ち上がりを検出し、くわえてこの西側でも対応する層が認められたため、ここに周溝が存在する可能性が浮上してきた。しかし、この落ち込みの両端間は約1.2 mであり、第Ⅳトレンチで検出した落ち込みの幅とは一致しない。また、第Ⅳ章で指摘した通り、第3層は根拠などである可能性も排除できない。

仮に、周溝が第Ⅰトレンチ南端付近をとおりと想定し、その推定ラインを墳形にしたがって復元してみると、これまでの墳丘推定ラインよりもかなり離れた場所に周溝が存在することとなり、墳丘自体も一回り大きくなる可能性も浮上する。

第Ⅲトレンチの調査所見からみた墳丘の復元 調査の結果、第Ⅰトレンチと類似した落ち込みが存在するか明確に決するにはいたらず、周溝の存否に関しては引き続き検討を進めていくことになった。ただし、第Ⅲトレンチ北壁の検討をおこなったところ、従来墳丘裾付近と推定してきた自然堆積層の落ち込み位置付近よりもさらに墳丘が東側に広がる可能性がでてきた。というのも、石室控え積みとともに積み重ねていたため、墳丘盛土と判断した2 A層の東端が3層に被さるため、2 A層を墳丘盛土ととらえる以上、3層も墳丘盛土とみなさないと整合性がとれないためである。くわえて、3層は後世に下る遺物が一切混入しないこと、層理面付近に比較的大型の礫がまとまって認められるが、本来はこの上部へさらに墳丘盛土が展開していたと仮定すると、これら礫が盛土同士の摩擦力を高めるための工夫とみなしうることなどをふまえ、墳丘盛土の可能性が捨象できないと判断した。

墳裾が第Ⅲトレンチ3層の東端、ならびに第Ⅰトレンチ東壁3層の北端付近まで展開すると仮定すると、以上のことから、墳形は従来推定よりも不整な円形を呈する可能性が出てきた。これらは、いずれも今後の発掘調査成果によってその成否を検証していくことが必要である。

土層断面でもう一点注意されるべきは、第Ⅱトレンチの墳丘盛土層および第Ⅲトレンチの墳丘盛土下半では、各層が比較的水平積みを基調とするのに対し、第Ⅲトレンチのそれは墳丘上半でスロープ状を呈し、東側へなだらかに傾斜することである。このことは、ここが石室に供する大型の円礫を運搬する際、墳丘上に引き込む作業道であった可能性を暗示する。2 A・B層の上面付近には礫が多いことを先に記したが、これら礫は土の不足を充足するだけでなく、こうした作業用の通路で重量がかさむ石材などの運搬をスムーズにおこなうため、一種の簡易的な舗装材としての役割も担っていた可能性も視野に

入れておきたい。また、こうした土層断面形状を勘案すると、第Ⅲトレンチ側つまり墳丘東側のほうが石室石材を搬入しやすい状態であったと評価できる。周辺地形は西側のほうが高いため、より高所より石室石材を下ろしてきたほうが合理的であるため、その理由については改めて考察する必要があるが、石室に適したサイズの石材を採取できる地点が、F9号墳北東側の標高的に古墳より少し下った烏川の河原であった可能性も否定できない。

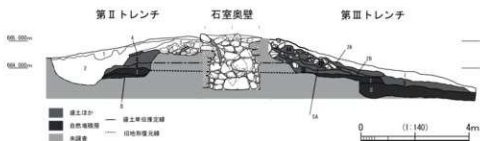
第1次墳丘・第2次墳丘の存否 礫の使用という点では、第10次調査で墳丘を構築する過程で層界に円礫をならべた可能性を指摘した。具体的には、第1トレンチ東壁D8グリッド付近にて大型の礫が確認されたことである。また、その中でD8グリッドにて確認された大型の礫の位置は、第8次調査の第ⅡトレンチのEグリッドで検出した大型の礫、さらにD～Eグリッド付近に展開する墳丘表面に露出した礫、これらを結ぶと弧状のラインを呈することが判明した。このことから、上記した礫は墳丘内石列の一部である可能性が浮上し、この推定石列を境に墳丘が第1次墳丘と第2次墳丘を画するのではないかと推定した。

ところが、第11次調査における第Ⅲトレンチの再調査による土層を精査した結果、墳丘内石列想定ラインがとおるPグリッドでは、大型の礫が検出されなかった。検出されなかった理由として根椋乱なども考えたが、残存する墳丘部に礫を設置した証左は見出しがたく、第Ⅲトレンチのみ礫が確認されないというのは不自然なことから、F9号墳では墳丘内石列というかたちで第1次墳丘と第2次墳丘を画していない可能性が高いと考えた。

以上の所見をまとめると、現状では第1次墳丘と第2次墳丘の存在を明確に認める状況にない。もちろん、第Ⅲトレンチの4層と2A・2B層との境界、あるいは2A層と2B層の境界など、石室構築の作業単位の違いが把握できる部分があることなどから、墳丘は段階的に構築された可能性は残る。しかし、石室についても、本稿の冒頭ならびに『報告2016・2017』において指摘した、構築の中断面がみうけられない点も勘案し、現段階の調査所見では、従来の解釈を改めるまでの根拠が十全でないと判断した。

ただし、穂高古墳群のなかで石室が四面によって記録化された事例の多くは、石室に構築中断面が認められる点には注意が必要だろう。F9号墳で、こうした中断期間を挟んだ墳丘構築がおこなわれなかったとみなす場合、いかなる理由で中断期間をおかずに墳丘を構築したのか考察する必要があることは言を俟たない。それが直径10m強という小規模な墳丘という墳丘構築の作業量に起因するのか、それとも支群単位でことなる集団であるといった墓制や集団関係の相違を反映したのか、出土遺物なども含めて考察することを今後の課題として提示しておく。

構築過程の復元 本稿の冒頭にふれたとおり、『報告2016・2017』において第8次・第9次調査の調査成果をふまえた構築過程の復元がおこなわれ、構築過程模式図(以下模式図と称す)が作成された。しかし、第10・11次の調査においてさらに新所見を得たことから、構築過程を一部改訂する必要性が生じた。



第28図 F9号墳断面図

本稿の最後に、従来の知見に上述してきた調査成果をふまえた構築過程を提示したい。

【第1段階】

墳丘構築面として一帯を整地するため、旧表土および自然堆積層の一部を取り除く。

【第2段階】

整地した地表面を土坑状に約70cm掘り下げ、石室掘方とする。その後礫まじりの土を敷き、石室床面を構築する。そして、石室掘方を掘削した際に発生した排土を、前底部の整地土として利用する。

【第3段階】

石室掘方内に腰石を置き、腰石の高さに合うように石材を積み、奥壁の1、2段目を構築する。奥壁の高さに合わせ、側壁2段分の石材を積む。さらに、石室掘方掘削面の標高に合わせるように3段目となる石室壁体の石材を積む。

【第4段階】

腰石の上部に目安となる大型の石材を設置し、その高さに合わせ側壁の4段目を構築する。ここまで積んだ奥壁の高さに合わせて墳丘に盛土する(第Ⅱトレンチ6層・第Ⅲトレンチ5A・5B層)。墳丘東西側両側とも水平積みを基調とする。盛土後、石材を搬入し、側壁2段分の石材を積む。

【第5段階】

その背後に控え積みの礫を置き、さらにその外方に盛土する(第Ⅱトレンチ5層・第Ⅲトレンチ4B・4A層)。東側では緩傾斜のスロープ状の盛土とし、ここを石室上部の壁体を搬入するさいの搬入路とした可能性がある。

【第6段階】

奥壁の5段目を積み、この高さに合わせて側壁2段分の石材を積む。さらに石室壁体の背後に控え積みの礫を積み重ね、墳丘東側ではこの背面に第5段階と同様、スロープ状に盛土する(第Ⅲトレンチ3層・2A層・2B層)。なお3層は地山削り出しにともなう段差を解消し、かつ墳丘にむけて緩やかに上昇するように盛土され、その西側端で2A・2B層へ接続する。

【第7段階】

3層・2A層・2B層からなるスロープ状の盛土を搬入路として天井石を引き入れ、設置する。

〔第8段階〕

天井石ならびに墳丘全体を盛土して墳丘を完成させる。

展望と課題 第11次調査までに得られた調査成果をもとに、導出された知見や残された課題、そして現状で理解しうる墳丘構築過程についてまとめた。墳丘は削平など後世の変更が大きく、構築過程についても推定部分が多い。これに関連して、F9号墳の墳丘規模や形状、周溝の存否など、まだ確定とまではいえない要素が残されている。今後の発掘調査をつうじて、これらを解明する手がかりを得たいと考えている。また、各地での発掘調査成果によると、横穴式石室墳の墳丘構築方法、とくに群集墳にかんしては、地域差が顕著にうかがえる属性との指摘がある⁴⁾。具体的には、石室掘方の有無や石室掘方の形状と深さ、さらには石室石材の設置方法などが主たる属性と考えられる。長野県下あるいは周辺地域でも墳丘構築方法が判然とする事例が存在するが、今後こうした類似との比較検討をかさねていくことで、F9号墳や徳高古墳群の特徴を明確にしていきたい。(青木・押本・望月)

註

- 1) 墳丘中心部付近の墳丘と石室を先行して構築する第1次墳丘、さらにみえがかりの墳丘と石室の開口部付近を第1次墳丘に追加して墳丘を完成させる第2次墳丘といった石室と墳丘構築の段階差が明示される例が、横穴式石室墳に少なからず存在することが指摘されている。
- 2) 『報告2016・2017』
- 3) 『報告2016・2017』、p.77
- 4) 青木敬2005「後・終末期古墳の土木技術と横穴式石室——群集墳築造における“畿内と東国”」『東国史論』第20号、pp.1-35

2 須恵器甕の出土状態に関する基礎的整理

本考察の目的 F9号墳では古墳時代後期を中心とした遺物が多数出土している。このうち須恵器は、6世紀代から8世紀代までの複数の時期からなり、器種も杯・高杯・壺・甕や手持壺などの、飲食具や貯蔵具、葬送儀礼とかかわる装飾須恵器など多様である¹⁾。こうした出土須恵器の状況を踏まえた青木敬は、貯蔵具としての甕がともなう埋葬時の儀礼が7世紀までに収束し、8世紀以降になると、甕よりも小型の壺が主たる貯蔵具へ取って代わることを指摘した²⁾。さらに青木は、壺と甕はともに埋葬時の儀礼に用いた酒器である可能性が高く、先の甕から壺へという酒器の変化を踏まえると、壺の容量は甕に比して少量であり、8世紀に至り埋葬儀礼に参集する人数が減少した可能性に言及し、その背後に仏教の浸透があるのではないかとした。

以上を要するに、古墳から出土する須恵器甕は、古墳時代の埋葬にともなう諸儀礼、とくに大勢が参集し飲酒する宴会である豊明(とよのあかり)に似た儀礼が、古墳周辺で修された可能性を示唆する重要な遺物といえる。前述のとおり、F9号墳でも須恵器甕が出土するが、その出土位置は石室から墳丘にかけて広く分布し、埋葬にともなう儀礼を復元・考察するにも、甕が埋葬当初どこに納められていたのかといった位置情報が把握しにくい難点があった。そこで、須恵器甕の出土状態を個別に可視化し、今後の埋葬諸儀礼の復元をおこなうための基本的な情報をいったん整理することを目的とし、過年度調査でF9号墳から出土した甕53点を、記録した出土位置から平面・垂直分布図を作成し、出土状況を検討することとした。

接合状況 出土した須恵器甕片(以下、甕片)のなかで、B6グリッドから5点 [138・223・224・236・343] と第IVトレンチ西壁から1点 [431]、F9グリッドから1点 [573] が接合した。また、B3・B9・C9・C10グリッドからそれぞれ1点 [364・135・65・97]、B6から2点 [208・229] の甕片も接合した。胎土あるいはタタキ目をはじめとする特徴が合致することから、両者は同一個体と判断できる。

第29図1の破片の多くは、石室内でも閉塞石の北側からまとまって出土している。このほか、墳丘北側と南西側で1点ずつ出土しているが、出土した標高が墳丘面ではなく後世の堆積土にともなう可能性が高い。これらを勘案すると、当初(埋葬儀礼終了後)は石室内に片付けられ、後世になって石室内が復乱されたことによって石室外へ移動した可能性が高い。ただし、破片が出土した標高をみると、閉塞石の北側など石室床面から20cm程度高く、初葬にともなう個体ではないとみなし得る。

ただし、甕片には [233・243・271・374] のように、ほぼ床面直上から出土した個体が一定数出土しており、初葬時にも甕が用いられていた可能性を視野に入れておく必要があろう。

甕の移動履歴の復元 第29図のように、甕は石室内と墳丘各所で出土しており、当初の位置を保っていない個体が多数認められる。つまり甕の破片が、埋葬後から現在に至る履歴のなかでさまざまな事情によって移動した可能性が考えられる。その原因について、周辺環境変遷から以下のような履歴を推測することが可能である。

- ①須恵器甕が使用された、すなわち埋葬儀礼に参集した人びとが甕を酒器として用いた場所は、石室開口部付近、いわゆる前庭部付近であった可能性が高い。ただしF9号墳ではこれを裏付ける証左は見いだせず、現時点では推定レベルにとどまる。
- ②使用された甕は石室内に片付けられた。初葬については不明だが、追葬時には閉塞石の北側に置かれた可能性が高い。
- ③後世、石室の天井石が除却された際に石室内部が擾乱され、これにともない墳頂部に破片が散乱した。
- ④墳頂部にかつて諏訪神社の祠が築かれていた。この祠を設けた際に、墳頂部付近が切土され、これにともない墳丘裾部へと移動したことで墳丘各所に甕の破片が拡散することとなった。なお、祠は現在撤去されているが、1970年時点で存在が確認されている³⁾。
- ⑤国営アルプスあづみの公園の整備前には、F9号墳西側に旧穂高町の上水場水源池(塚原配水池)が所在した。この配水池設置にともなう掘削により、掘削土が墳丘の西側の南北に積み置かれた⁴⁾。これらによって甕の破片がいつそう墳丘各所へ散乱することになった。

葬送儀礼復元に向けて 以上、F9号墳出土須恵器甕の当初所在位置は石室内と推測した。また、石室内の出土標高をふまえると、須恵器甕は初葬、追葬それぞれで用いられた可能性が指摘できた。ここでは基礎的な分析にとどまったが、今後F9号墳をはじめとした古墳における葬送儀礼を復元していくための手がかりの一端を提示できたと考えている。

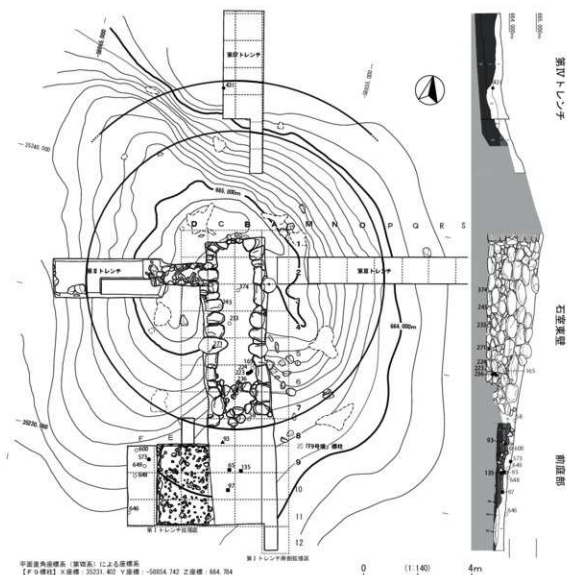
ただ、今後へ向けての課題は数多い。本考察では石室開口部付近で甕を用いた儀礼が修されたと推測したが、F9号墳の場合、前庭部付近の残存状況が必ずしも十全でないため、前庭部で修したと断言できるものではない。また、甕以外の器種が担う役割も推定していく必要がある。とくに子持壺が出土している点は、西日本の影響も少なからずあったことを暗示することから見逃せない。ほかの副葬品などにみられる系統なども念頭におきつつ、被葬者あるいはその後継者をはじめとする集団が有する周辺地域との関係性や、葬送観などを復元するため、出土遺物を詳細に把握することがもとめられる。

さらに、古墳から離れた場所でこうした儀礼をおこなった可能性も捨象してはならない。つまり殯などの儀礼、具体的には喪屋の設置などが、古墳からはなれた場所でおこなわれた可能性も残されている。葬送にともなう儀礼が、従来からいわれている古墳あるいは古墳に隣接して修されたという固定観念でのみ理解することの危うさを指摘したい。

(青木・馬場)

註

- 1) 『報告2012』『報告2013』『報告2014』『報告2015』など
- 2) 青木敬2020『横穴式石室における土器祭祀の姿容と特質—松本平を中心に—』『横穴式石室の研究』同成社、pp. 389-402
- 3) 穂高町教育委員会(編)1970『穂高町の古墳』樺沢書苑
- 4) 『報告2010』



平面図は標高(東向き)による等標高
【F9墳丘】× 標高 702.31、402 × 距離 -58854.742、2 距離 684.704



【223[ほか]



【65[ほか]

0 (1:10) 20cm

第29図 F9号墳における須恵器甕の出土状況

第10表 F9号墳出土須恵器一覧

遺物番号	部位	出土地点	組合關係	報告書/図版掲載出	備考
9	胴部	旧A 8	9・65・97・135・ 208・229・364	2010年11-5	13813中7同一個体
65	胴部	旧B 9		2011年13-9・10	
97	胴部	旧C 9		2011年13-9・10	
135	胴部	B10		2012年13-7	
208	胴部	B 6		2013年未報告	
229	胴部	B 6		2013年未報告	
364	胴部	B 3		2014年19-9	
27	胴部	旧A10		2010年11-4	
119	胴部	B10		2012年未報告	
38	胴部	旧B 6		2014年19-10	
349	胴部	C 6	2014年19-10	58・349	
93	胴部	旧C 7	2013年17-18		
271	胴部	C 5	2013年17-18	93・271	
138	胴部	B 6	2012年13-6		
223	胴部	B 6	2013年17-16	138・223・224・ 236・343	
224	胴部	B 6	2013年17-16		
236	胴部	B 6	2013年17-16		
343	口縁部	B 6	2014年19-8		
233	胴部	C 4	2013年17-17		
243	不明	C 3	2013年未報告		
300	胴部	B 6	2014年19-2		
374	胴部	B 3	2014年19-11		
431	不明	4丁西塚	2014年19-13		
543	不明	E11	2016・17年未報告		
500	不明	E11	2016・17年未報告		
570	胴部	F11	2018・19年20-11		
573	胴部	F 9	2018・19年20-5		
574	胴部	F 9	2018・19年20-6		
575	胴部	F10	2018・19年20-16		
576	胴部(下手)	F10	2018・19年20-7		
577	胴部	F 9	2018・19年20-20		
578	胴部	F 9	2018・19年図版未掲載		
584	胴部	F10	2018・19年20-8		
588	不明	F 9	2018・19年図版未掲載		
597	胴部	F 9	2018・19年20-15		
600	胴部(下手)	F 9	2018・19年20-7		
602	胴部	F 9	2018・19年20-13		
608	胴部	F 9	2018・19年20-9		
613	胴部	F10	2018・19年20-13		
615	胴部	F 9	2018・19年20-17		
616	胴部	F10	2018・19年20-8		
618	胴部	F10	2018・19年20-8		
619	胴部	F 9	2018・19年図版未掲載		
622	胴部	F10	2018・19年図版未掲載		
624	胴部	F10	2018・19年20-12		
638	胴部	F11	2018・19年20-19		
645	胴部	F10	2018・19年20-18		
646	胴部	F11	2018・19年20-14		
648	胴部	F10	2018・19年20-6		
649	胴部	F11	2018・19年20-10		
651	胴部	F 9	2018・19年20-8		

第Ⅵ章 結 語

1 調査のまとめ

本節では、これまでに述べた第10・11次調査の調査成果を概観し、まとめることとする。

(1) 第10次調査

第10次調査の調査目的は、石室内調査の完了、墳丘規模の確認と周溝の存否確認、石室と墳丘の取り付き方の解明の3点である。

石室内の調査は、当初の目的である床面の精査をおこない、最終的な調査を終了して石室を埋め戻した。

第9次調査から引き続き調査をおこなった前底部および拡張区では、東壁の堆積状況を再検討の結果、A11グリッド南端で周溝とおぼしき落ち込みを確認できた。

石室と墳丘の取り付き方の解明については、本来、拡張区北側をD7グリッドまで掘削する予定であったが、中断したため新たな知見を得ることはできなかった。(関口)

(2) 第11次調査

第11次調査では、石室側壁の背面構造の把握、墳裾部の再検討、そして周辺古墳のデータの収集、この3点を調査目的とした。

F9号墳における石室側壁の背面構造に関する調査所見として、第Ⅲトレンチの再調査をおこない、第5次調査で確認された層序が細分化された。また、細分化がなされた2・4・5層は、石室構築過程における作業用のスロープとしての役割を果たしていた可能性があるとの所見が得られた。さらに、第11次調査までの調査成果を踏まえたうえで墳丘構築過程を8段階に分けて説明できたことも大きな成果である。また、第Ⅰトレンチから確認された周溝らしき落ち込みの存在から、従来の推定より墳丘規模が大きくなる可能性が浮上した。

E6号墳では、既往の調査・研究を踏まえ、三次元計測および表面採集をおこなった。本報告で提示できたのは、数点の須恵器片にとどまった。引き続き、F9号墳との比較検討を見据え、詳細をあきらかにしていくことが望まれる。

第11次調査では、第Ⅰトレンチの拡張区および、第Ⅲトレンチの再調査によって、墳丘構築過程の詳細な検討が可能となり、墳裾部に関する新たな所見も得られた。さらに、F9号墳出土須恵器臺の集成によって、古墳における葬送儀礼を復元するための端緒を示すことができた。一方で、墳丘の規模や

周溝などについては不明な点が残されたままである。そのため、さらなる発掘調査例の増加を期待しつつ、ほかの古墳・古墳群との比較検討に向けて調査を進めていきたい。(大嶋・小池・望月)

2 おわりにあたって

第10次調査 平成21年(2009)から始まった國學院大學考古学研究室による徳高F9号墳の発掘調査は、平成30年(2018)で第10次調査を迎えた。この第10次調査では、石室床面の精査、周溝の有無、石室と墳丘の取り付き方および墳丘規模の解明を目的とし、石室内の精査と第9次調査区をさらに拡張し、調査をおこなった。

第10次調査は実習生14名に加えて、多くの特別参加生が調査にあたった。夏の調査時には、先生や先輩の指示を受けつつ慣れない作業にも協力して取り組むことができた。

しかし、発掘調査後の報告書刊行にかかる作業は、調査時とは対照的に実習生同士の連携を上手くとることができず困難を極めた。学年の異なる実習生や離脱者もいたため、遅々として進まず、遺物の整理作業だけでも十数か月かかるほどの進捗の遅さであった。こんなにも作業が遅れたのは、ひとえに私たち実習生の怠惰によるものであり、自分自身、総務という立場である以上、もっと実習生に声をかけ真剣に作業に取り組ませるべきであったと反省している。さらに、調査で作成した図面に誤りがあり、第11次調査において下級生にも協力してもらいつつ完成を目指すという実に情けないものであった。それでも、今ここに報告書が刊行されているのは、御指導をいただいた先生と大学院生の先輩方、第11次調査で実習に参加した下級生の助けがあってこそのものであり、心の底から御礼申し上げる。

第11次調査 平成31年(2019)で徳高古墳群F9号墳の調査は第11次調査を迎えた。この第11次調査では、第10次調査において検出した周溝の落ち込みの範囲を把握するため、第IトレンチA11グリッドの南側を拡張した。第IIIトレンチにおいては、墳裾部の把握ならびに周溝の有無の確認を目的として再調査をおこなった。また、石室側壁の背面構造をあきらかにするため、トレンチを西側へ拡張した。

第11次調査は、考古学専攻生だけでなく、他専攻の学生や、学部1年生も参加していたため、大所帯であった。調査法の授業では、機材の使用法や図面の作成方法、文化財保護法について学んだ。また、前期は授業の後に勉強会を開き、実習生同士で古墳時代や徳高古墳群について学び合い、実習に備えた。そして、前期が終了する頃には実習生の仲も深まり、現地での発掘調査に向けた準備は万全であった。

8月にはいり、実習当日をむかえたが、初めて発掘調査をおこなう実習生がほとんどであり、戸惑うことが多々あった。しかし、日数がたつにつれ、実習生にも余裕が出始め、先生や先輩方の指導のもと調査法の授業や勉強会で学んだことを発揮することができるようになっていった。実習の後半では、実習生たちも積極的に行動ができるようになり、作業効率も上がっていった。また、F9号墳以外の古墳の見学を通して、徳高古墳群についての理解を深めることもできた。この10日間にわたる実習を通して、発掘調査をするうえで必要な技術や古墳時代の知識に加えて、集団行動をするうえで大切なことを学べた。

発掘調査が終了してから、この報告書が刊行されるまで1年半がたった。この1年半の間には実に

様々なことがあった。思うように作業が進まず、頭の中が報告書のことでいっぱいになり泣きたくなることもあった。また、感染症の流行に伴って、大学に行って作業することが困難な状況に陥り、作業のペースが乱れてしまうこともあった。しかし、作業が比較的順調に進みここまでたどり着くことができたのは、実習生たちが協力して作業を進めてくれたからである。こんな自分を支えてくれた実習生たちには感謝してもきれない。こうして一緒に作業を進めた実習生たちが、全員考古学の道を進むわけではない。しかし、この期間を通して学んだことや経験したことは考古学の道を歩む歩まない関係なく、これからの人生できっと役に立つだろう。

青木先生からは、我々がおこなう学術調査の重要性、文化財保護の重要性について、授業をはじめとした様々な場面でご教授いただいた。

最後になりましたが、発掘調査実習の準備から報告書刊行に至るまで、ご指導して下さった先生方、諸先輩方、そしてご支援して下さった方々にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。

(大嶋・関口)

